

新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

—No. 14 遺 跡 —

1983

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

— No.14 遺跡 —

1983

新東京国際空港公团
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県の北部にひろがる広大な北総台地は、数多くの遺跡が所在し、歴史的文化遺産の多いことで知られています。

新東京国際空港予定地内におきましても、先土器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡が数多く所在しており、当（財）千葉県文化財センターでは千葉県教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施しております。

この度、昭和53年4月から翌54年3月にかけて実施したNo14遺跡の調査の成果がまとまり、本報告書として刊行の運びとなりました。

今回の発掘調査では先土器時代から縄文時代早期後半（特に、鶴ヶ島式土器）にかけての遺物が数多く検出され、北総台地の分水界の歴史を知るうえで貴重な資料を追加することができました。

これらを収載した本報告書は、昭和46年に財團法人千葉県北総公社によって発行された『三里塚』、昭和56年に文化財センターが発行した『木の根』に引き続き、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第3集に当たり、三里塚地域の歴史を解明するために欠くことのできない資料の一つと言えましょう。

このような本報告書が学術的資料として利用されるばかりでなく、教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用されることを望んで止みません。

最後に、新東京国際空港公团をはじめ、関係諸機関の御協力と御指導、酷寒猛暑について発掘調査及び整理作業を行っていただいた多くの調査補助員の方々に対して心より謝意を表します。

昭和58年2月26日

財團法人千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　言

1. 本書は、新東京国際空港予定地内の成田市古込字古込9番地他に所在したNo.14遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財团法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は昭和53年4月1日から翌54年3月31日まで実施した。調査面積は20,800m²である。
4. 本書は、昭和46年に刊行された『三里塚』（財團法人千葉県北総公社発行）、昭和56年に刊行された『木の根』（新東京国際空港公団・財團法人千葉県文化財センター発行）に続く新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第3集にあたるものである。
5. 発掘調査及び報告書作成作業の担当職員は次のとおりである。なお、太字は直接担当職員である。

(1) 発掘調査（昭和53年度）

調査部長 西野 元 班長 杉山晋作 調査研究員 野口行雄 山口直樹 宮重行 三浦和信 石倉亮治 加藤正信 藤崎芳樹 萩野谷悟 西川博孝

(2) 報告書作成作業（昭和56年度）

部長 白石竹雄 部長補佐 中山吉秀 班長 西山太郎 主任調査研究員 深沢克友（57.2.1～） 調査研究員 野口行雄 西川博孝 西口 徹 雨宮龍太郎 麻生正信 大野康男 糸川道行（56.6.1～） 横山 仁（56.12.1～） 林田静男

(3) 報告書刊行作業（昭和57年度）

部長 白石竹雄 部長補佐 天野 努 班長 西山太郎 調査研究員 西川博孝 西口 徹 雨宮龍太郎 川島利道 麻生正信

6. 本書の執筆は、第1章第1節、結語を西山太郎、第3章第3節の鉄滓を山口直樹、他を野口行雄が担当した。
7. 遺物の写真撮影は深沢克友が担当した。
8. 本書の編集については、西山太郎が野口行雄と協議のうえ行った。
9. 鉱物分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社の手をわざらわせた。
10. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、新東京国際空港公団、成田市教育委員会、船橋市立郷土資料館佐藤武雄氏の御協力、御助言をいただいた。
また、多くの調査研究員、調査補助員の御協力を得た。深く謝意を表する。

目 次

序 文	
例 言	
第 1 章 調査の経過と方法	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査の方法	1
第 3 節 調査の経過	2
第 2 章 遺跡とその環境	7
第 1 節 遺跡周辺の地形	7
第 2 節 周辺の遺跡	7
第 3 節 遺跡の概要	8
第 4 節 基準層序	13
第 5 節 鉱物分析	16
第 3 章 遺構と遺物	19
第 1 節 先土器時代	19
第 2 節 縄文時代	25
第 3 節 その他の時代	96
第 4 章 考察編	97
第 1 節 B 地点出土の第 2 群土器について	97
第 2 節 遺跡の性格と特徴	106
結 語	110

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形と発掘区	3
第2図 No14遺跡発掘調査区域図	5
第3図 遺跡の位置と周辺主要遺跡	9
第4図 遺構分布図	12
第5図 標準層序	14
第6図 遺跡土層断面図	15
第7図 重鉱物組成図	17
第8図 層序の対比関係図	18
第9図 No 1 炭化物片集中地点	20
第10図 No 2 炭化物片集中地点	21
第11図 No 3 炭化物片集中地点	21
第12図 No 4 炭化物片集中地点	22
第13図 No 5 炭化物片集中地点	22
第14図 先土器時代遺物	23
第15図 001, 002遺構	27
第16図 003, 004遺構	28
第17図 A 地点土器出土状況図	30
第18図 A 地点石器・礫出土状況図	30
第19図 A 地点出土遺物	33
第20図 A 地点出土遺物	34
第21図 A 地点出土遺物	35
第22図 A 地点出土遺物	36
第23図 B 地点縄文時代グリット別遺物出土図	38
第24図 B 地点第2群I・II類土器	40
第25図 B 地点第2群II類土器	41
第26図 B 地点第2群III類土器	45
第27図 B 地点第2群III類土器	46
第28図 B 地点第2群III類土器	47
第29図 B 地点第2群III類土器	51
第30図 B 地点第2群III類土器	52
第31図 B 地点第2群III類土器	53

第32図	B地点第2群Ⅲ類土器	55
第33図	B地点第2群Ⅳ類土器	58
第34図	B地点第2群Ⅴ類土器	60
第35図	B地点第2群Ⅵ類土器	62
第36図	B地点第2群V類土器及び把手	64
第37図	B地点第2群Ⅶ類土器（完形品）	65
第38図	B地点第2群Ⅷ類土器（完形品）	66
第39図	B地点第2群Ⅸ類土器及び粗製土器（完形品）	67
第40図	B地点第2群Ⅹ類土器（262、265 拓本図）	68
第41図	B地点第2群土器口縁部（1）	70
第42図	B地点第2群土器口縁部（2）	71
第43図	B地点第1・2群土器底部	72
第44図	B地点第3・4群土器	74
第45図	B地点第4・5群土器	75
第46図	B地点第5群土器及び古銭	76
第47図	B地点石器組成図	78
第48図	石鉗数量図	80
第49図	B地点縄文時代石器（1）	84
第50図	B地点縄文時代石器（2）	85
第51図	B地点縄文時代石器（3）	86
第52図	B地点縄文時代石器（4）	87
第53図	B地点縄文時代石器（5）	88
第54図	B地点縄文時代石器（6）	89
第55図	第2群土器模式図	102

図版目次

1. 遺跡全景（航空写真）南より B地点遠景（航空写真）西より
2. 遺跡近景（南方より） 遺跡近景（北方より）
3. 8 E 38土層セクション 8 G 56土層セクション
4. Na.2 炭化物片集中地点 Na.5 炭化物片集中地点
5. Na.4 炭化物片集中地点セクション Na.4 炭化物片集中地点
6. 先土器時代遺物
7. A地点縄文時代遺物出土状況（東より） A地点縄文時代遺物出土状況（西より）
8. A地点出土遺物
9. A地点出土遺物
10. A地点出土遺物
11. 001遺構
12. 002遺構
13. 003遺構
14. 004遺構
15. 8 G 縄文時代遺物出土状況 9 F 南側縄文時代遺物出土状況
16. 9 F 北側縄文時代遺物出土状況 10 F 縄文時代遺物出土状況
17. B地点 第2群I・II類土器
18. B地点 第2群II類土器
19. B地点 第2群III類土器
20. B地点 第2群IV類土器
21. B地点 第2群V類土器
22. B地点 第2群VI類土器
23. B地点 第2群VII類土器
24. B地点 第2群VIII類土器
25. B地点 第2群IX類土器
26. B地点 第2群X類土器
27. B地点 第2群XI類土器
28. B地点 第2群XII類土器
29. B地点 第2群XIII類土器
30. B地点 第2群XIV類土器

31. B 地点 第2群Ⅲ類土器及び粗製土器
 32. B 地点 第2群土器口縁部(1)
 33. B 地点 第2群土器口縁部(2)
 34. B 地点 第1・2群土器底部
 35. B 地点 第3・4群土器
 36. B 地点 第4・5群土器
 37. B 地点 第5群土器、鐵滓、古錢
 38. B 地点 縄文時代石器(1)
 39. B 地点 縄文時代石器(2)
 40. B 地点 縄文時代石器(3)
 41. B 地点 縄文時代石器(4)
 42. B 地点 縄文時代石器(5)
 43. B 地点 縄文時代石器(6)
 44. 第2群土器文様拡大写真(1)
 45. 第2群土器文様拡大写真(2)
 46. 第2群土器文様拡大写真(3)

表 目 次

第1表 主な周辺遺跡.....	10
第2表 B地点石器計測表(1).....	90
第3表 B地点石器計測表(2).....	91
第4表 B地点石器計測表(3).....	92
第5表 B地点石器計測表(4).....	93
第6表 B地点石器計測表(5).....	94
第7表 B地点石器計測表(6).....	95

付 図 目 次

- 付図1 B地点第2群土器分布図
 付図2 B地点石器剝片類分布図

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

新東京国際空港建設予定地内に所在する遺跡については、道路建設、宅地造成等の土木工事と同様に、事前に取扱いを協議し発掘調査を実施している。その結果は、財団法人千葉県北総公社によって、「三里塚一新東京国際空港用地内における考古学的調査」（昭和47年刊）として発行されている。また、当文化財センターでも、「木の根」（昭和55年刊）として発行した。これらに所収した以外の遺跡については、当文化財センターにおいて、現在も計画的、継続的に発掘調査を実施中である。

本書では昭和53年度に発掘調査を実施したNo14遺跡を対象としている。No14遺跡の一部については、昭和45～46年度に、財団法人千葉県北総公社（文化財調査班）によって発掘調査が実施されており、その成果は「三里塚」に所収されている。

ところで、県教育委員会（文化課）は、新東京国際空港公団から当該地で土木工事を実施したいとの要望があったため、公団と遺跡の取扱いについて度重ね協議を行った。その結果、当該地を現状で保存することが困難であったため、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置をとることで結論に達した。そこで、県教育委員会（文化課）は、No14遺跡の未調査区域であった20,800m²について、当文化財センターを調査機関として指定した。これにより当文化財センターが発掘調査を行うこととなり、新東京国際空港公団と発掘調査についての詳細な調整を行い、委託契約を締結したのである。

当文化財センターは、公団との委託契約に基づき県教育委員会（文化課）の指導の下に、昭和53年4月1日から翌54年3月31日までの約1か年を要して発掘調査を実施した。以後、2年間の空白の後、昭和56年4月1日より1年間整理を行い、ここに本報告書を刊行する運びとなつたのである。

第2節 調査の方法

今回のNo14遺跡の発掘調査は、第1次調査時に未買取地のため調査されなかった20,800m²を対象地として実施された。遺跡の性格、内容については、第1次調査により縄文時代早期の条痕文系土器を中心とした遺物包含地であることが明らかであったため、遺物の分布範囲を主に確認することを目的とし、本調査に先立ち確認調査を実施した。

調査は、まず調査対象区域を包括する大グリッドを設定することから始めた。大グリッドは

公共座標を用いて区分したもので、50m方眼を1つの大グリッドとした。なお、No14遺跡の発掘調査と並行して隣接するNo62遺跡の確認調査の実施が計画されていたため、この両遺跡を包括するように大グリッドを設定した（第1図）。大グリッドの名称は、西から東へAからIまで、北から南へ0から12までの記号を付して組み合わせる方法をとった。この大グリッドはさらに5m方眼の小グリッドにより細分し、1つの大グリッドは100個の小グリッドにより構成されている。小グリッドの名称は、最北列の西から東へ00から09まで、最北列の北から南へ00から90までの番号を付し（第2図）、大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせ、1A-00、10F-99のようにグリッドを呼称した。

以上のように発掘区の設定後、最初の発掘作業として、縄文時代までの確認調査を実施した。確認調査は、調査対象全区域に 2×4 mの試掘坑を設定し、第III層直上面まで掘り下げ遺構・遺物の検出を行なった。この結果に基づいて、縄文時代の本調査範囲を確定し、その確定された範囲については、人力により小グリッド単位に拡張して包含層と遺構の精査を行なった。縄文時代遺物包含層範囲は、調査区域の北西部と南西部の2地点が確認され、検出された遺物の違いにより、前者をA地点、後者をB地点と便宜的に区分を行なった。

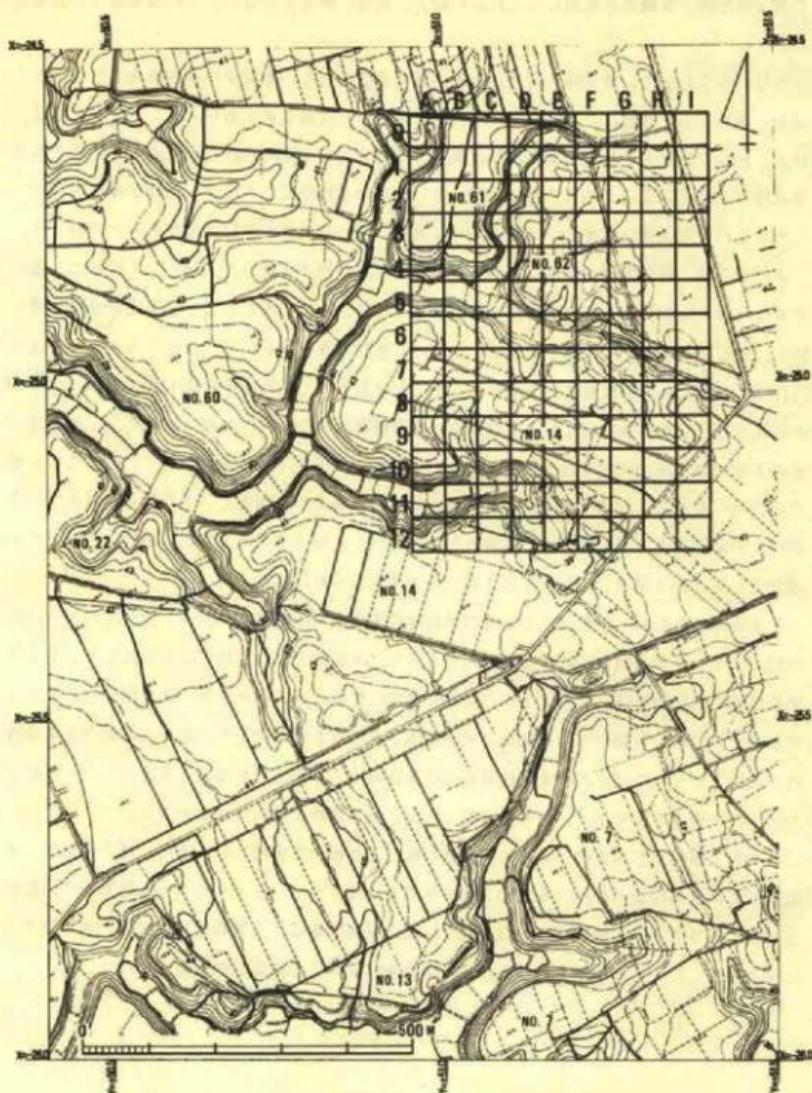
縄文時代の本調査終了後、 2×2 mの試掘坑を調査全区域に設定し、先土器時代の確認調査を行なった。発掘深度は、立川ローム層最下部までとし、遺物・炭化物片の検出を行ない、それらの検出されたグリッドについては拡張し本調査を行なった。またA地点、B地点のそれぞれに土層観察を行なうため、東西、南北にトレーンチを入れた。

検出された縄文時代、先土器時代の遺物は、全て平面的位置とレベルを記録し、遺構より出土したものは各遺構ごとに001から3桁の数字で、包含層より出土したものは小グリッドごとに、表土擾乱層中遺物に対しては0001の番号を付して一括で、その他のものに対しては0002から4桁の通し番号を付し、写真撮影後取り上げを行なった。遺構番号は大グリッドごとにイ01から通しの番号を付した。

先土器時代の炭化物片集中地點の調査方法は、まず平面的な広がりを確認し、中央部にベルトを残し、10cm～20cmの一定のレベルごとに平面的に掘り下げを行なった。炭化物片の集中が密になった段階で、平面的位置を記録し写真撮影を行なった後、さらに平面的掘り下げを行ない記録をとった。この作業を3～4回繰り返し、つぎに炭化物片集中地點の中央部にサブトレーンチを入れ、炭化物片の垂直的位置を記録することとした。

第3節 調査の経過

発掘調査は、昭和53年5月から実施された。発掘作業に先立ち基準点測量、地形測量を行なった。また調査区域内には竹林や雑草が生い茂っており、所々に土が多量に盛られている状態



第1図 通路周辺地形と発掘区

第1章 調査の経過の方法

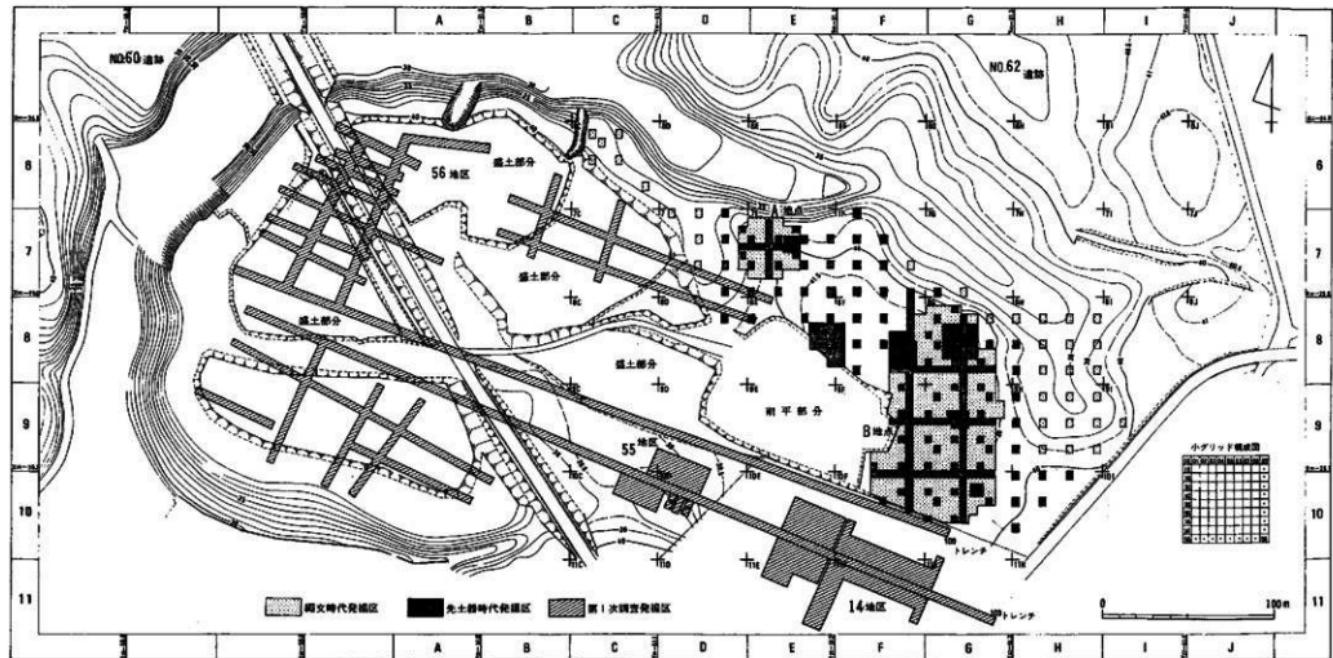
であったため、重機等を使用してこれらの除去、伐採、排土を行ない、その後発掘区を設定した。

6月から7月まで、縄文時代遺物包含層の確認調査を行ない本調査の範囲を決定した。この結果、遺物の出土状況は、7Eグリッド西側の地点より沈線文系土器が、8G、9F、9G、10F、10Gグリッドより条痕文系土器が集中していることが認められた。前者をA地点、後者をB地点とした。この2地点の他に8H、9Hの谷部で稀薄ではあるが、遺物が確認された。しかしこれらの遺物は台地上の9G、10Gに集中している遺物の流れ込んだものと判断した。

8月からは、確認調査の結果に基づき、縄文時代包含層の本調査を実施した。最初に、遺物の密度も濃く分布範囲も広いB地点より行なうこととした。B地点では、まず遺物密度の濃い10F、10Gグリッドから作業を着手し、しだいに密度の薄くなる9G、8Gグリッドへと進めて行なった。出土遺物数量は、予想をはるかに上回るもので、鶴ガ島台式土器や石鉗、黒曜石の剝片・碎片類が多量に出土し、それに対して遺構数は少なく炉穴1基、陥し穴状土壙2基、性格不明土壙1基が検出されたのみであった。B地点の作業は2月中旬で終了した。このB地点の作業に並行して12月下旬より1月下旬にかけてA地点の本調査を、1月から3月まで先土器時代の確認調査とそれに基づく本調査を行なった。A地点での縄文時代の遺構は検出されず、遺物として田戸上層式、下層式土器と剝片の集中がみられた。

先土器時代のものとしては、5ヵ所の炭化物片集中地点が検出され、うちの2ヵ所からは剝片類が出土したが、数量的に少なものであった。8E59グリッド周辺から出土している炭化物及び剝片の広がりは、この出土地の南側がすでに立川ローム層下部近くまで削平されており、地形的みてむしろ削平された部分にその主体があったものと考えられる。この他の先土器時代の遺物として、A地点の縄文時代調査時に第II層中より切出形石器が1点出土した。確認のため、その周辺の掘り下げ、拡張を行なったが、他の遺物は認められなかった。

この先土器時代の調査終了近くに、遺跡の航空写真撮影を実施した。また、層序の観察と重鉱物分析の試料採取のため、8E38グリッドと8G55グリッドを下末吉ローム層相当の白色粘土層まで掘り下げ、土層観察、記録を行なった。試料採取は、土層堆積状態の良い8E38グリッドで行なった。この作業を最後として、3月末にすべての作業を無事終了した。



第2図 No.14遺跡発掘調査区域図

第2章 遺跡とその環境

第1節 遺跡周辺の地形

No14遺跡の位置する成田市周辺は、千葉県北部に広がる広大な下総台地と呼ばれる洪積台地上に在る。

成田市周辺の地形は、西は印旛沼、北は利根川、東は太平洋により区画されており、南は房総丘陵となっている。そして大小の河川により台地は浸食され複雑な地形を呈している。河川は、北部には天神峰、東峰地区に水源地をもち佐原市西部を経て利根川に注ぎこむ大須賀川、尾羽根川、取香川が流れ、また取香地区に水源地をもち成田市のはば中央を経て利根川に注ぎこむ、根本名川が流れている。西部には、印旛沼に注ぐ江川、高崎川が流れ、東南部には、高谷川、多古橋川が支流を集め栗山川に合流し太平洋へと注ぎこんでいる。このように成田市周辺の河川は、利根川、印旛沼、太平洋へと注ぎこむ3つの水系に分けられ、No14遺跡の位置する新東京国際空港周辺は、利根川、太平洋に注ぎこむ河川の水源地にあたる。言いかえるならば、利根川水系と太平洋水系の分水嶺に位置していると言える。このため開析の顕著な周間に比べ、この地域は平坦な台地が広がる点が特徴的である。標高は40mと高く、ここから印旛沼、太平洋に向かって緩く低下してゆく。

No14遺跡の位置する台地は、以上のような地形の中に在る。台地の東部は、根本名川の源流である取香川により開析が奥深くまで進んでおり、「コ」の字状の形状を呈している。この開析谷により台地は北側と南側に大きく分けられている。また台地の付け根にある南部は、高谷川の支流が入り込んでいる。まさにNo14遺跡は、利根川水系と太平洋水系の境界に位置していると言える。しかし、この台地は第1次調査後の大規模な工事のためにかなり地形が変わってしまっており、昔の面影はほとんどみられない。今回の調査対象地は、「コ」の字状台地の北側台地の第1次調査時の未調査区域で、北側に取香川の支流の1つの水源地となっている谷が接し、南側はすでに工事により地形が変わってしまっているが、やはり北側と同じように谷が入りこんでおり、この2つの谷にはさまれ部分にあたる。なお北側の谷には、湧水による小さな池があり、今日でも鳥獣の安息の場となっている。

第2節 周辺の遺跡

新東京国際空港周辺は、遺跡の密度が濃く、1970年から1971年にかけて行なわれた第1次調

前回に実施された分布調査により23ヵ所の遺跡が確認された（「三里塚」1971）。その後の分布調査や1976年より行なわれている第2次調査により、新たに10ヵ所近い遺跡が確認されている（第3図 第1表）。

第2次調査で確認された遺跡は、第1次の時と同様に、先土器時代、縄文時代早期の遺物包蔵地が主体をなしており、その他、弥生時代から歴史時代までの遺構、遺物を埋蔵している複合遺跡が多い。

先土器時代の遺跡として、第1次調査時に関東ローム層黒色帶より楕円形石器を伴う石器群が検出されていることは周知のことであるが、第2次調査においても第Ⅵ・Ⅶ層より遺物の出土がみられ、No.61遺跡では、大形の打製石斧、刃部磨製石斧を有する規模の大きな石器群が検出されている。No.62遺跡でも、黒曜石を母岩とした規模の大きな石器群が検出されている。この他の遺跡でもⅦ層からⅢ層までのローム層中より多くの石器群が検出されている。

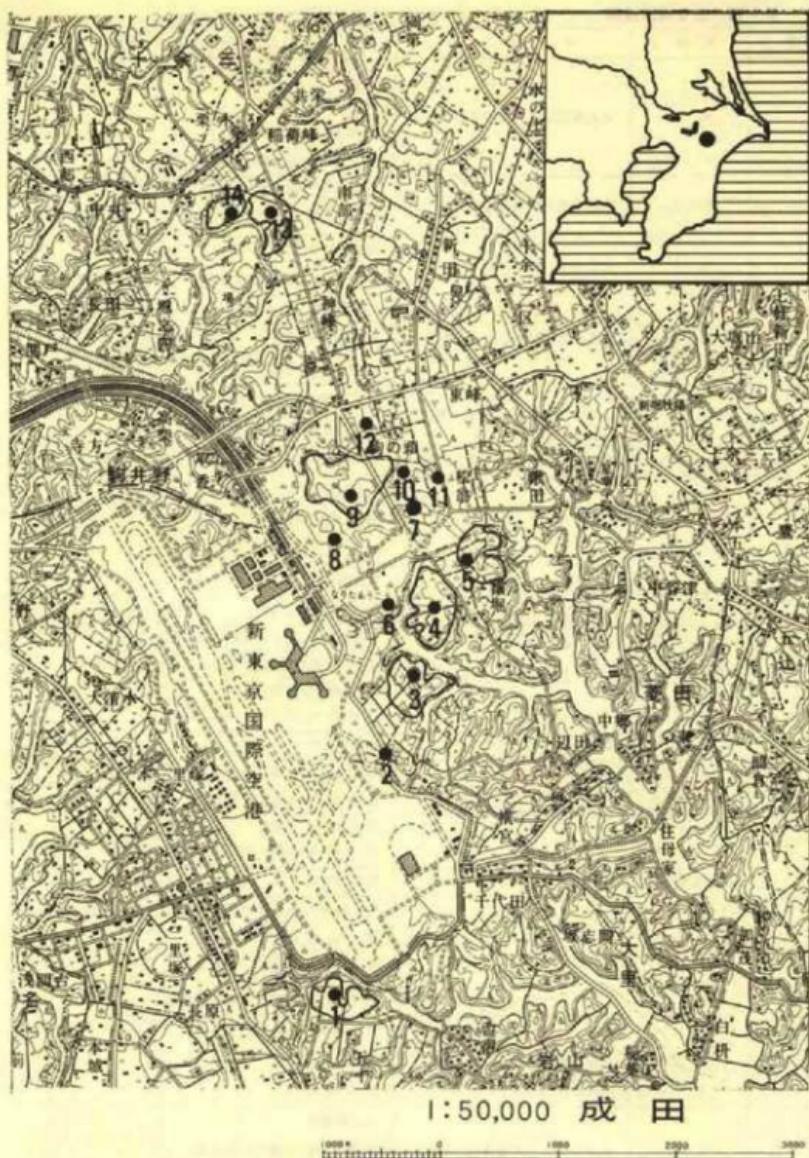
縄文時代では、早期前半の撫糸文土器、沈線文土器を多量に出土したNo.6遺跡、No.7遺跡、No.60遺跡がある。これらの遺跡からは、撫糸文期の住居跡も検出されている。早期後半の沈線文土器、条痕文土器は、No.61遺跡、No.62遺跡、No.67遺跡で多量に出土している。No.67遺跡では、沈線文期の住居跡が検出されている。No.10遺跡は、遺物の出土量は少ないと同時に穴状土壤が70基近く検出されている。以上の縄文時代の遺構、遺物が多量に検出されている遺跡はNo.14遺跡と同様に平坦な広い台地上に位置しているが、遺跡の時期、性格は少しづつの相違がみられる。

弥生時代としては、No.60遺跡、No.61遺跡、No.62遺跡より、遺構、遺物が検出されている。No.61遺跡においては、弥生時代後期の住居跡群が検出されている。

古墳時代以降の遺構、遺物が検出されている遺跡としては、No.2遺跡、No.7遺跡、No.60遺跡、No.61遺跡、No.62遺跡がある。これらの遺跡からは、鬼高期、真間期、国分期の小規模な住居跡群が検出されている。このうち国分期の住居跡群の特徴として、住居跡中より、多量の鐵滓、砂鉄が検出されているものがあり、その中には小鍛冶炉をもつたものも見られる。これらは製鉄に関連した遺構と考えられる。このうち、No.60、No.61遺跡の台地南側斜面より、大規模な製鉄跡遺構が検出されており、前者を取り巻き製鉄遺跡、後者を御幸畠製鉄遺跡と呼称されている。この遺跡以外においても、鐵滓の出土が多く見られることから、この周辺で製鉄の作業が昔盛んに行なわれたことがうかがえる。

第3節 遺跡の概要

No.14遺跡は、1970年から1971年に実施された第1次調査と今回の第2次調査の2度にわたる発掘調査が行なわれている。（第2図）



第3図 道路の位置と周辺主要遺跡

—この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図(成田)を使用したものである—

第1表 主な周辺遺跡

番号	遺跡名	所 在 地	主な時代および遺物
1	No. 2	山武郡芝山町岩山字中袋2016他	先土器時代(ナイフ形石器) 縄文時代(撫糸文) 古墳時代(鬼面) 歴史時代(国分期、鉄津、砂鉄)
2	No. 5	成田市木の根東古217他	先土器時代(細石器、尖頭器) 縄文時代(撫糸文)
3	No. 6	成田市木の根192他	先土器時代(スクレイバー) 縄文時代(撫糸文、沈線文)
4	No. 7	山武郡芝山町香山新田地先	先土器時代 縄文時代(撫糸文、沈線文、条状文) 古墳時代(鬼面)
5	No. 10	山武郡芝山町香山新田106他	先土器時代 縄文時代(撫糸文、条痕文)
6	No. 13	成田市吉込朝日丘地先	縄文時代
7	No. 14	成田市吉込字吉込6他	先土器時代(切出形石器) 縄文時代(沈線文、条痕文) 歴史時代(鉄津)
8	No. 22	成田市天浪	先土器時代(尖頭器) 近世(馬込跡)
9	No. 60	成田市取手字和田戸711他	先土器時代(ナイフ形石器、船器、尖頭器) 縄文時代(撫糸文、沈線文、条状文) 弥生時代(後期) 歴史時代(国分期、鉄津、砂鉄)
	取手製鉄跡	成田市取手字和田戸711他	歴史時代
10	No. 61	成田市東峰字御幸郷89他	先土器時代(石斧、ナイフ形石器、尖頭器) 縄文時代(沈線文、条痕文) 弥生時代(後期) 歴史時代(真間~国分期、鉄津、砂鉄)
	御幸郷製鉄跡	成田市東峰字御幸郷89-1他	歴史時代
11	No. 62	成田市東峰地先	先土器時代(ナイフ形石器、スクレイバー、尖頭器) 縄文時代(沈線文、条痕文) 弥生時代(後期) 歴史時代(真間~国分期、鉄津)
12	No. 63	成田市東峰字並峰25-2他	先土器時代 縄文時代 歴史時代
13	No. 67	成田市十余三字福向峰151他	先土器時代 縄文時代(沈線文、条痕文) 歴史時代
14	No. 68	成田市十余三字福向峰151他	先土器時代 縄文時代(沈線文、条痕文)

第1次調査

調査の対象地は、「コ」の字状台地の北側台地部で未買取地を除いた全域の調査が行なわれた。南側台地については、遺物の散布状態が稀薄であったため調査の対象地外とされている。北側台地は、地形により台地基部より14地区、55地区、56地区の3地区に分けられ、それぞれの調査を行なっている。現在ではこれらの地区は、工事のためすでに削平されているため、当時の地形、環境の面影はみられない。

No.14地区は本調査前に台地縁辺部に、ほぼ台地の長軸に沿ったNo.103トレーニングを設定し、さらにこのトレーニング北側に平行にはしる109トレーニングを設定し確認調査を行なっている。この両トレーニングの位置は、第2次調査で設定した発掘区の10E、10F、10G、11E、11F、11Gグリッドにあたる。遺物の出土状況は、103トレーニングから鶴ヶ島式土器が密に出土している。一方の109トレーニングからは、遺物の出土はみられず、遺物の分布範囲はこのトレーニング以南にあると報告されている。しかしこの109トレーニングは第2次調査区域の南側とほぼ接する位置にあり、第2次調査でのこの地点は、最も遺物分布の濃い地点であることから、109トレーニングから遺物出土が無いことをどう解釈すべきであろうか。むしろ出土遺物やその出土状況からみて第1次調査と第2次調査で確認された遺物分布範囲は1つのまとまったものと考えられる。遺構としては、鶴ヶ島台期の竪穴住居跡3軒、炉穴3基、竪穴2基が検出されている。遺物は、鶴ヶ島台式を主体とした土器と石器を主体とした石器類、そして黒曜石を主体とした剝片類が多量に検出されている。

55地区は、浅い谷を境に14地区と分けられており、第2次調査の9C、9D、10C、10Dグリッドにあたる。この地区から検出された遺構、遺物として炉穴2基、土壙2基と、稀薄ではあるが田戸下層式土器が検出されている。また関東ローム層黒色帶より楕円形石器を伴う石器群と炭化物片集中地点が検出されている。

56地区は、本台地の最西端部分にある。検出された遺構は、田戸上層期の竪穴住居跡1軒、炉跡2基、遺物は、井草式土器、田戸上層式土器が稀薄であるが検出されている。

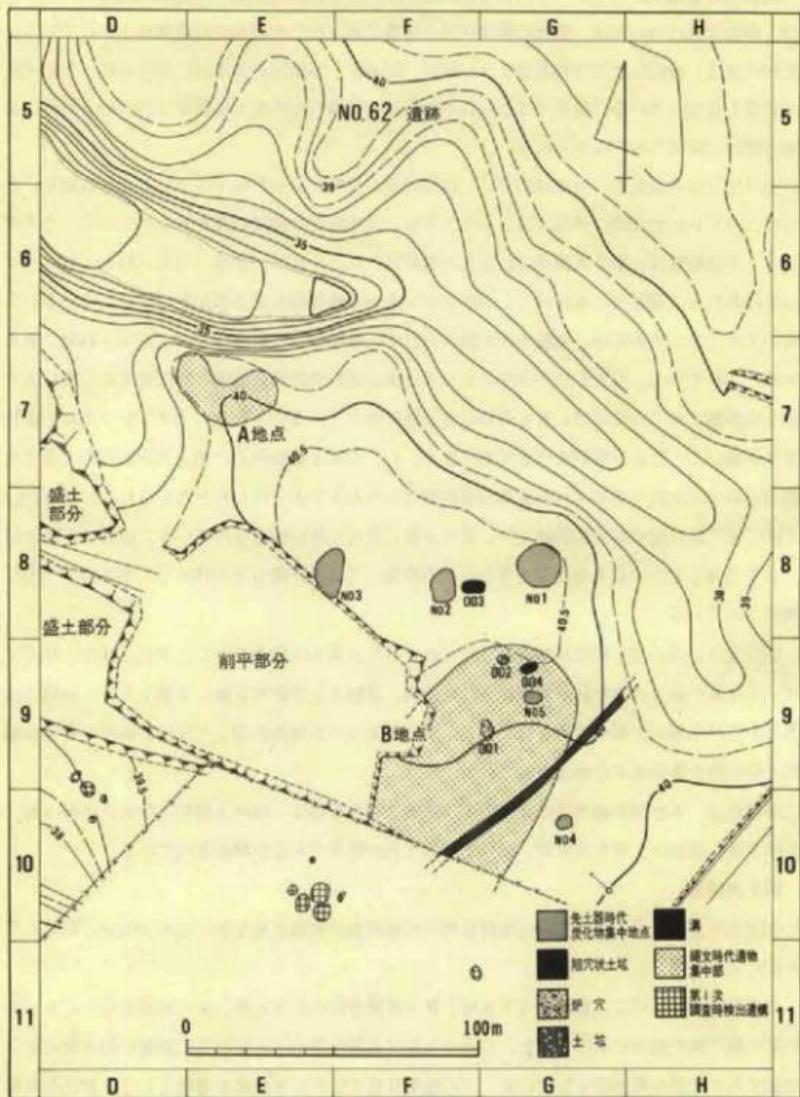
第2次調査

今回の調査は、第1次調査時に未買取地のため調査が実施されなかった20,800m²に対し行なわれた（第4図）。

先土器時代としては、VII層から1カ所、IV-VI層中位から2カ所、IV-VI層上位から2カ所の炭化物片集中地点が検出された。このうちIV-VI層中位の2カ所の炭化物集中地点周辺から少量であるが剝片類が出土している。この他第II層下位から単独出土遺物として、切出形石器が出土している。

縄文時代は、遺物集中地点が2カ所検出され、それをA地点とB地点に分けた。

A地点は、この台地の北側に深く入り込んでいる谷の先端部の台地上にあり、早期の沈線文



第4図 遺構分布図

系土器が集中して出土している。遺構は検出されず、土器の分布状態もそれほど密ではなく数個体分の土器片が散在している状態である。石器類は石鏃が3点出土しており、その他は細かく砕けた礫片が散在している。

B地点は、A地点より北東へ150m程離れた第1次調査時の14地区の北側部分に位置する。この地点は、台地の北側と南側に入り込んでいる谷の谷頭部に挟まれた部分である。遺物の広がりは、ほぼ全域にわたっているが、南側に密度が濃く北側にいくにしたがい稀薄になっている。検出された遺構としては、炉穴1基、陥れ穴状土壙2基、土壙1基である。出土した遺物は、遺構から出土した遺物数は極くわずかであり、ほとんどの遺物は第II層中より出土している。そして土器は、鶴ヶ島台式土器がほとんどを占め、その他前期、中期、後期の土器が少量検出されている。また石器においては、石鏃が石器組成の中で70%程を占め、また石材として、黒曜石が80%を占めている剝片・碎片類も多量に出土している。このような遺構、遺物の検出状況から、このB地点（14地区も含めて）は、縄文時代早期の鶴ヶ島台期の単一時期の遺跡と考えられる。

その他の時代の遺構、遺物として、鉄滓が数点、古銭が50数点出土している。またB地点東側に南北にはしる近世の溝が検出されている。

第4節 基準層序

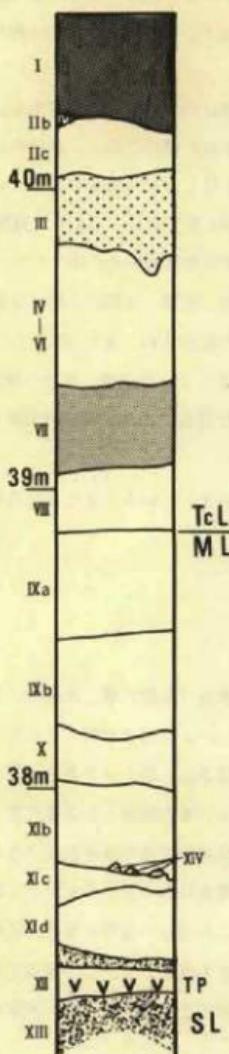
No.14遺跡は、下総台地の上位面に位置し、砂層の成田層上に下末吉（常総）層、武藏野、立川ローム層が堆積している。ローム層の厚さは、下末吉から立川ローム上面まで約3.5mで、このうち先土器時代遺物の包蔵が確認されている立川ローム層の厚さは、約1mである。同じローム層の堆積がみられる相模野、武藏野台地と比べ、非常に薄く、また鍵層となる黒色帶、始良丹沢バミスなど地域によって不鮮明な部分が多いため、下総台地での基準層序が確立されていない。このため肉眼による層序区分が主となっている遺跡の調査において、少なくとも新東京国際空港周辺の遺跡の調査での層序の混乱を避けるために、この周辺の遺跡の層序を比較し、また武藏野台地の層序とも比較検討し、また重鉱物分析結果をも踏まえて、この周辺で比較的明瞭に確認でき、鍵層となりうる層（新期テフラ層、始良丹沢バミス層、黒色帶、東京バミス層）に、統一した層序番号と名称を与えた（第5図）。

第I層 表土擾乱層 耕作と削平等により再堆積した層、調査区全域に及んでいる。

第IIa層 暗褐色土層 耕作、削平により台地平坦部ではほとんど確認できないが、谷部において20~30cmの堆積がみられる。

第IIb層 橙色土層 いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層であり、縄文時代以降の土層において鍵層となるものである。耕作、削平がこの層まで及んでいるため遺存状態の良い地

8E-38



点で20cm程の厚さが確認できたが、大部分の地点では、10cmたらずの堆積状態である。

第II c層 黒褐色土層 調査区のはば全域で認められ、20~30cmの厚さであるが、傾斜地においては、第II b層および下層の第III層が混入して色調も淡くなり、厚さも薄くなるため、肉眼による区分が困難である。

以上の第II b、II c層は、縄文時代の遺物包含層であり、本遺跡から多量に出土した沈線文、条痕文土器は、第II c層から第II b層にかけて出土しており、その主体は第II c層にある。また中期後半以降の遺物は第II b層から第I層にかけて出土している。

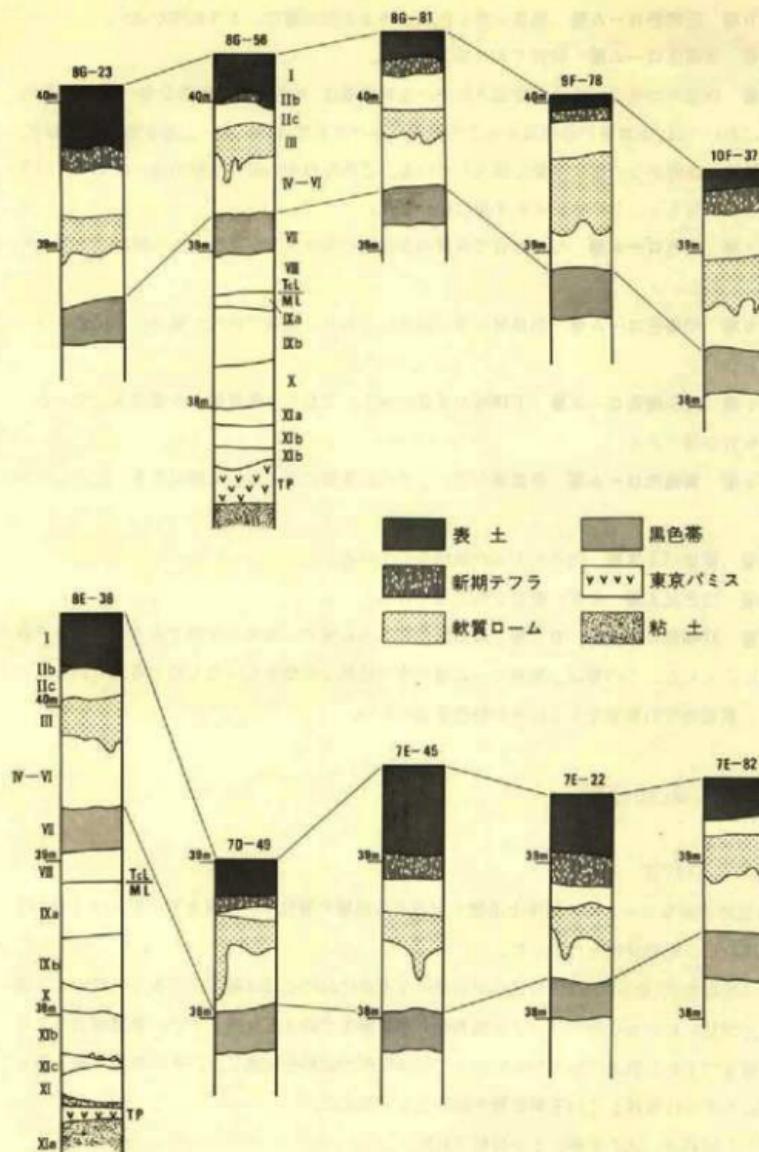
第III層 黄褐色ローム層 立川ローム層軟質部、「ソフトローム」と呼ばれる層である。台地平坦部では30cm程の厚さで、50cmを越す地点もあるが、傾斜地では薄くなっている。

第IV-VI層 黄褐色ローム層 立川ローム層硬質部 クラックの発達が著しい。本台地では肉眼による区分ができる、1つの層としてとらえたが、本来この層は、3つの層に区分できる層である。第V層は、武藏野台地の立川ローム層第1黑色帶に相当する層と考えられるが、現在のところこの地域で肉眼的観察による確認はされていない。しかし、重鉱物分析の結果では、第IV-VI層の中位に、この層が位置するものと考えられる。第VI層は、姶良丹沢バニス層である。周辺台地では、明瞭に確認できる層であるが、本台地においては、ガラス質のものが含まれているのは確認できたが、1つの層として区分することはできなかった。しかし谷部において、ブロック状に堆積しているのが確認され、第IV-VI層の下部に位置する層である。

第VII層 暗褐色ローム層 立川ローム層第1黑色帶に相当する層である。色調は、武藏野台地で確認されるほど濃くなく、明瞭な層ではない。赤褐色のスコリアを多量に含む。

第VIII層 暗褐色ローム層 立川ローム層最下部層である。色調は、第VII層と似ているが、赤褐色のスコリアをほとんど含んでいない。

第IX a層 褐色ローム層 武藏野ローム層最上部層。クラックがよく発達し、軟質で粘性が強い。



第6図 遺跡土層断面図

第IX b層 灰褐色ローム層 第IX a層と色調以外よく似た層で、より粘性が強い。

第X層 淡褐色ローム層 硬質でスコリアを含む。

第XI層 周辺の台地で今まで確認されている第X層は、褐色のやや軟質な単一層であるが、本台地においては、第X層の堆積後からこのX層にかけて不整合的にローム層が堆積しており、下層の第III、XII層がこの層に多量に混入している。このためその混入状態の違いにより、以下のようにこの層をa、b、c、dの4層に細分した。

第XI a層 褐色ローム層 やや軟質で少量の赤褐色のスコリアを含む。この層は、下層の影響が及んでいない。

第XI b層 明褐色ローム層 第X層が多く混入しており、硬質で粘性が強い。赤褐色スコリアを少量含む。

第XI c層 淡灰褐色ローム層 第XII層が多量に混入しており、第XIII層も少量混入している。非常に軟質な層である。

第XI d層 黄褐色ローム層 第X層がブロック状に多量に混入し、第XIII層も多く混入している。

第XII層 東京バミス層 凹凸をもった堆積をしている。

第XIII層 白色粘土層 非常に緻密な粘土層である。

第XIV層 緑褐色ローム層 XI b層とXI c層の間にに入る層で、非常に少量であるがブロック状の堆積がみられた。この層は、関東ローム層の中で特異な性格をもつたものと考えられるものである。重鉱物分析結果をもとにその特徴を述べたい。

第5節 鉱物分析

1. 試料と分析法

No.14遺跡の関東ローム層の層序と遺物を包含する地層の層位学的性質を明らかにする目的で試料を採取し、鉱物分析を行なった。

試料の採取地点(第6図)は、台地の平坦部の本遺跡におけるほぼ最高点であり、周辺より遺物の出土が見られた8 G 38グリッドを地表から第XIII層まで約3.5m掘り下げ、第XIII層上面より第II c層まで下から数えてNo.1からNo.28まで10cm間隔で試料を採取した。その後XI b層とXI c層の間にわずかに堆積している第XIV層をNo.29として加えた。

採取した試料は、次の手順により分析された。

- (1) 水分を含有した生の試料100gを超音波装置を用いながら傾斜法にて粘土分を除去した。
- (2) 使用した試料の乾燥重量を求めるため、恒温乾燥器で105℃で5時間、乾燥後水分を測定。

(3) 乾燥後 $\frac{1}{4}$ mm (60mesh) と $\frac{1}{2}$ mm (120mesh) の篩を用いて $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ mmの粒土の砂分だけを抽出した。

(4) $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ mmの砂分を秤量後、テトラブロムエタン（比重=2.96）を重液に用いて重鉱物を分離した。

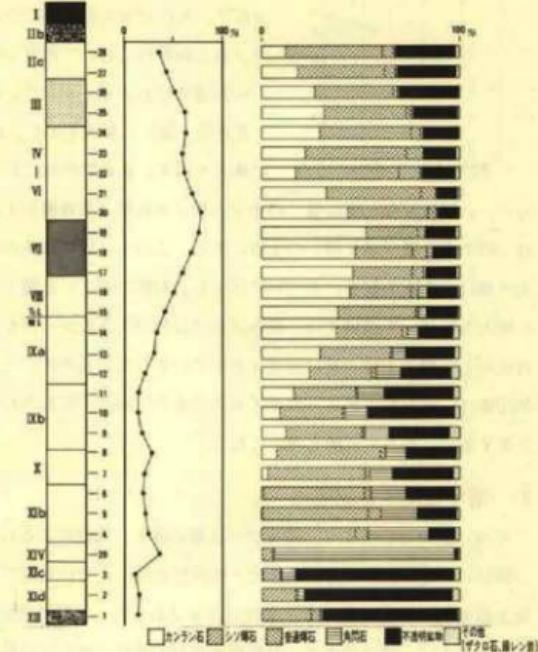
(5) テトラブロムエタン中に沈んだ重鉱物を秤量後プレパラートを作製し、顕微鏡下にて300個体程度観察しそれぞれの鉱物の比重を考慮して重量比による鉱物組成を算した。

2. 分析結果

今回の重鉱物分析によって、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、角閃石、緑レン石及びザクロ石の透明重鉱物、磁鐵鉱を含む不透明鉱物が観察された。

$\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ mm砂中の重鉱物量の割合は、滑らかな曲線を描いて変化しており、大まかに全体をながめるとNo.20を頂点として、下位は増加傾向にあり上位は減少傾向にあるといえる（第7図）。

このような重鉱物組成のある方は、No.6以降の試料において武藏野台地・相模野台地のローム層と対応できるもので

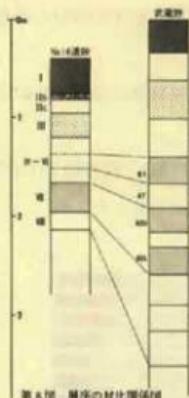


第7図 重鉱物組成図

ある。No.6下位の試料が特異な分析結果を出したのは、No.29を除いて不整合による層の混乱によるものと考える。またNo.29は、角閃石が90%を占め、また黒雲母も多く含まれており、関東ローム層において特異な組成をなしている。このNo.29について、群馬大学の新井教授は、グリース状火山灰に同定できるとされた。グリース状火山灰は、静岡県沼津市から富士市にかけての地域で報告されているが、火山灰の分布や給源火山など不明な部分が多い火山灰である。しかし広範テフラの可能性を充分にもつものと考えられるものである。

3. 他地域との対比

重鉱物分析の結果、No.14遺跡における関東ローム層が、武藏野台地、相模野台地のものと対応されるという結果を得た。そこで、本遺跡と、下総台地に隣接し、関東ローム層の研究が進



第8図 層序の対比関係図

んでいる武藏野台地と、調査時の肉眼による観察と分析結果に基づき、遺物が確認されている立川ローム層について対比してみる。

立川・武藏野ローム層の層位を判定するのに、もっとも有効的なものは、カンラン石とシソ輝石、普通輝石の量比と火山ガラスの含有量であるとされている（杉原重夫 1974）。今回の分析で、火山ガラスの有無については行なわなかったが、カンラン石と両輝石において充分な結果が得られた。

No14遺跡において、カンラン石はNo.19（第III層中位）とNo.25（黒色帯上限）に極大を示し、両輝石はNo.22（第IV-VI層中位）に極大を示す。武藏野台地において、カンラン石の極大は、立川ローム層軟質部（第III層）の中位と第2黑色帯（第VI層）上部にある。そして両輝石の極大は、第1黑色帯（第V層）の上限にある。このように両地域の対比で、カンラン石の量比の極大点層は、肉眼的観察に基づいて区分し、対応させている層と一致する。つづいて両輝石の量の極大点層は、本遺跡では、発掘区内では確認できなかったが周辺台地で確認されている姶良丹沢バミス層の上位の層に位置する。このような姶良丹沢バミス層と両輝石量の極大点の位置的関係は、武藏野台地と一致するものであり、No.22が採取された層が、武藏野台地第1黑色帯（第V層）に相当する層と考えられる。

4. 層序に関する問題点

今回の鉱物分析により、関東ローム層の薄く、肉眼によるいくつかの層区分が困難であるこの地域の台地においても、武藏野・相模野台地と充分に対応できるものと言える（第8図）。先土器時代の研究において、遺物包含層であるローム層の研究は、大きな役割を果してきている。たとえば、環境の復元、石器群の相対的年代、そして石器群の分析、研究、また他の地域との比較に重要な位置をしめているものと言える。本遺跡では、調査時に確認できなかった関東ローム層中で特徴をもち键層となっている第1黑色帯相当層も、鉱物分析により認められた。しかし、今回の鉱物分析のみにより、この層の存在をこの地域で認めることは性急すぎる結論かもしれない。本遺跡ではこの層の遺物は検出されなかったが、今後、この問題をより明らかにして行くには、他の遺跡で検出されている遺物によって層序を含めた考古学的見地による先土器時代の研究が必要なことと考える。

層位に依存することの多い先土器時代の調査・研究は、1つの台地または地域で統一された層位に基づいて行なわれることが望ましいと思う。しかし肉眼的観察による層序の把握が難しい下総台地においては、自然科学、考古学の研究により、層位を統一、確立していくことが、今後の先土器時代の研究を進めていくうえで、大きな課題になるものと思われる。

第3章 遺構と遺物

第1節 先土器時代

先土器時代の遺跡において、住居跡等の構築物が検出されることは極く稀なことであり、多くの場合、石器・剝片類が集中あるいは単独で検出される。このような遺物の出土状態を「石器群」、「ブロック」、「ユニット」と呼称して、先土器時代の研究の中で、当時の人の行動様式を把握するうえでの単位としてとらえられている。この「石器群」、「ブロック」、「ユニット」と呼称されている石器・剝片類の集中部に礫群、配石、焼土、炭化物片などが伴う例も多くみられ、人の行動様式をより具体的にしている。

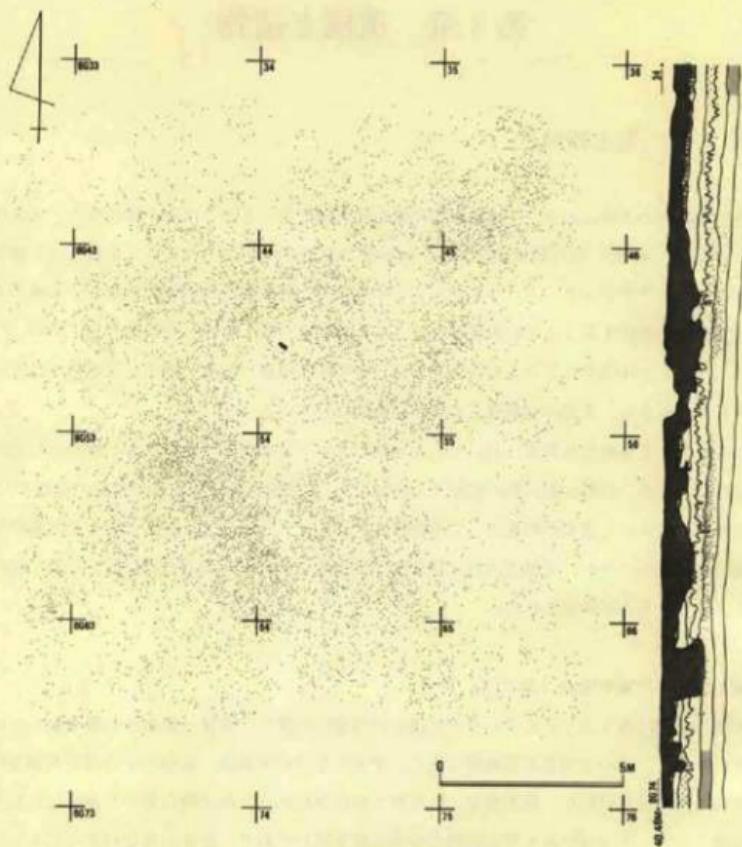
本遺跡の先土器時代の調査において、炭化物片をローム層中よりかなり多く検出した地点が確認されたため、石器・剝片類の広がりのみでなく、炭化物片の分布状態や性格の把握のため、炭化物片の広がりも調査の対象として発掘作業を進めた。その結果、石器・剝片類の集中地点は検出されなかったが、5地点の炭化物片集中部が検出され、うち2地点には、石器・剝片類が2、3点であるが検出された。

No.1 炭化物片集中地点（第9図）

台地の北側に浅く入り込んでいる谷に接した地点に位置し、第IV-VI層から第VII層にかけて分布がみられ、その主体部を第VII層に置く。平面的な分布状態は、集中の中心部から径5cm、長さ20cm程の炭化材片が、数本重なった状態で検出されたが、炭化物片集中の密度はむしろ周辺が濃く、ドーナツ状にかなり広範囲の分布状態を呈しており、数本の炭化材を中心とし、炭化物片が散在している状態である。遺物の出土は無い。

No.2 炭化物片集中地点（第10、14図 図版4）

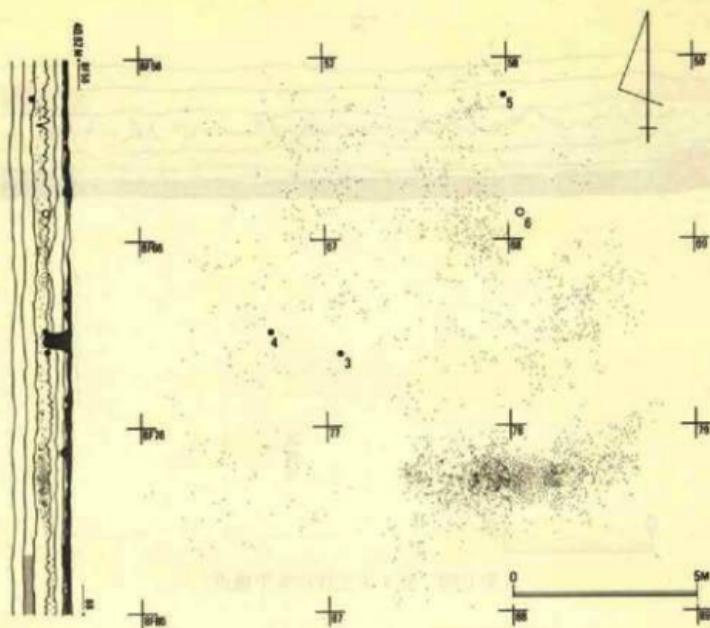
No.1 炭化物片集中地点より、東へ約30m離れた台地平坦面に位置し、第IV-VI層中位に主体部を置く。平面的分布状態は、8F77-78グリッドにかけて6×4m程の密な集中部がみられ、さらに北側へ広がりを持つこの集中地点からは、剝片3点（3～5）、礫1点（6）が検出されている。これらの石質はいずれも安山岩であり、3は背面に礫面を残している縦長剝片で、打面、打瘤も残っている。4は一部に礫面を残し、背面には数条の剥離痕があり、縦長剝片剥離した両設打面をもつ残核片といえるものである。打面には、わずかに調整剥離が施されている。



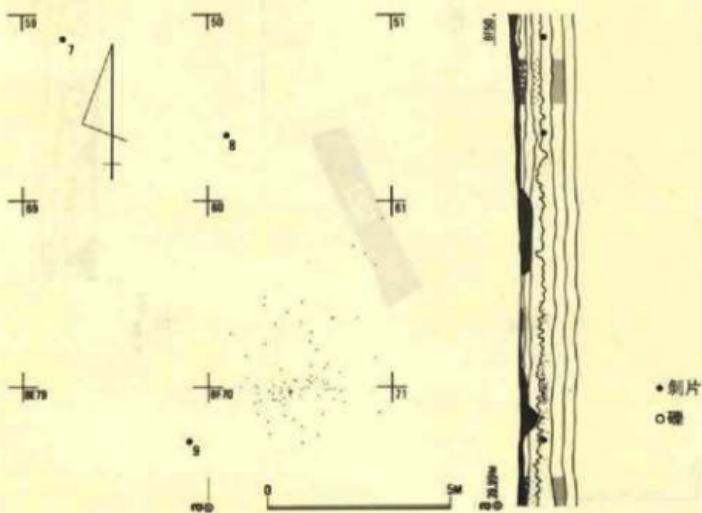
第9図 No.1炭化物片集中地点

No.3炭化物片集中地点（第11、14図）

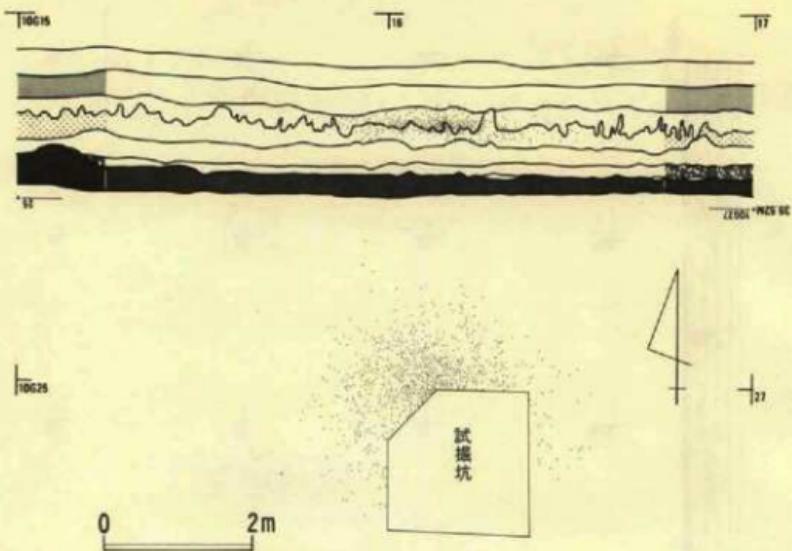
ほぼ台地の中央部に位置し、第IV-VI層上部から検出されている。平面的分布は、集中部と言うほどの密な部分ではなく、わずかに散在している状態であるが、この集中地点の南側はすでに立川ローム層最下部近くまで削平されており、地形による立地を考えると主体部はむしろ削平部にあったと考えられる。また3点の遺物が検出されているが、その分布も南側に主体を置いたものと考えられる。遺物は、剝片2点(7、9)と調整加工がわずかに施された剝片1点(8)でいずれも頁岩製である。



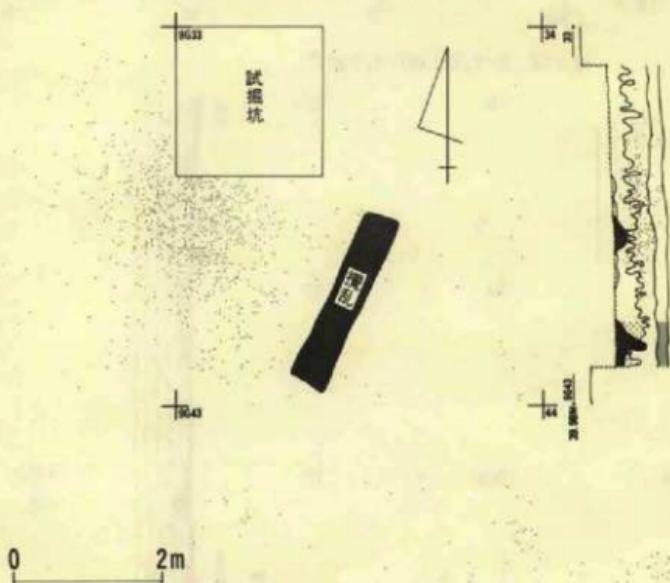
第10図 No. 2 炭化物片集中地点



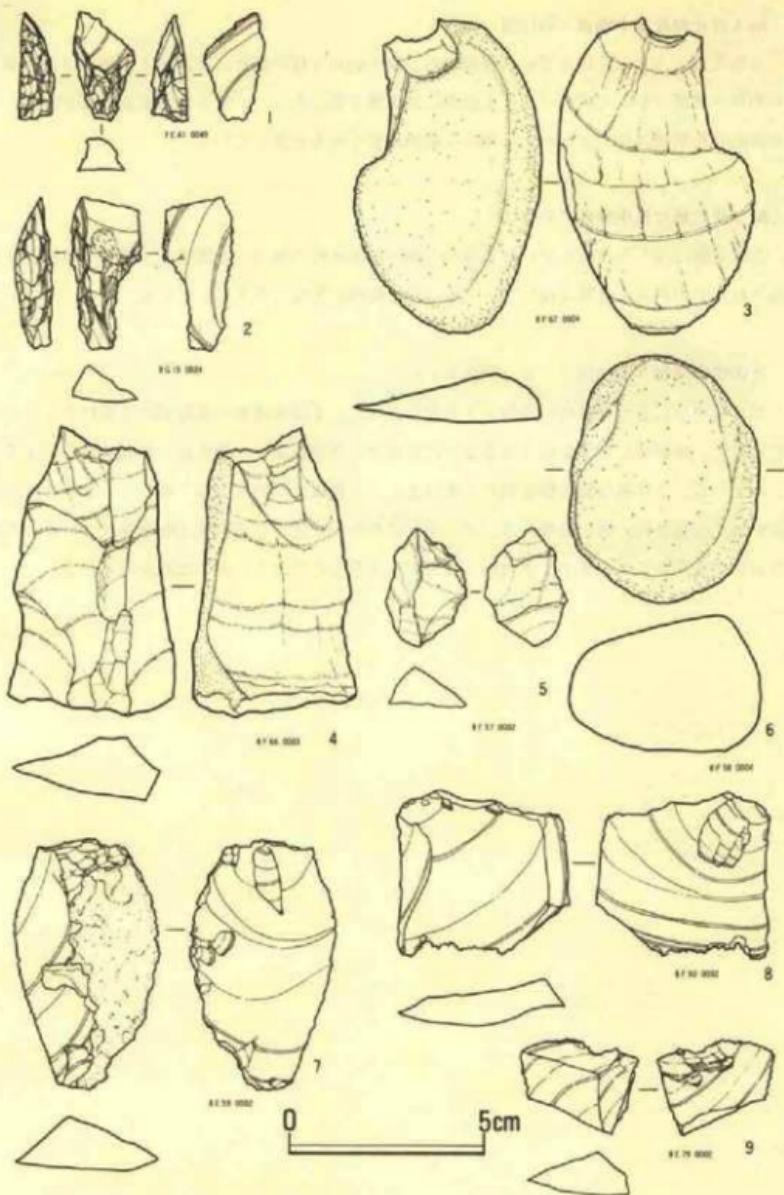
第11図 No. 3 炭化物片集中地点



第12図 No.4 炭化物片集中地点



第13図 No.5 炭化物片集中地点



第14圖 先土器時代出土遺物

No.4 炭化物片集中地点（第12図 図版5）

台地北側に浅く入り込んでいる谷頭から、南へ約40m程の地点に位置する。層位は第III層から第IV-VI層にかけて検出され、主体部は第III層下部にあり、レンズ状の垂直分布がみられる。平面的分布状態は径約2.5mと小規模な範囲に密な分布を呈している。

No.5 炭化物片集中地点（第13図）

台地北側に浅く入り込んでいる谷頭から西へ約30m程の地点に位置する。第IV-VI層より検出され、平面的分布状態は径約2mと小規模な範囲に密な分布を呈している。

その他の遺物（第14図1、2 図版6）

第II層中から先土器時代の遺物が2点検出された。1は瑪瑙製の横長剥片を素材とした切出形石器で、両側縁に剥片を切り取るように裏面からの調整加工が施され、背面の基部にまでおよんでいる。2は瑪瑙製の横長剥片を素材とし、一侧縁には剥片を切り取るような裏面からの調整加工が施され、他の側縁には、ノッチ状にやや切り込んだ調整加工が施されている。刃部は剥片の鋭利なものをそのまま用い、直刃的形状を呈しており、刃こぼれが見られる。

第2節 繩文時代

1. 遺構

今回の調査で検出された遺構は、いずれもB地点からのものであり、が穴1基、土壙1基、陥し穴状土壙2基と遺物の出土量に比べ非常に数が少ない。また時期については、陥し穴状土壙は、繩文時代といった漠然としたものしか今回の調査ではつかめなかつたが、が穴、土壙については、このB地点の出土遺物の主体となる鶴ヶ島台期のものと考えられる。

001遺構（第15図 図版11）

この遺構は、B地点の台地のはば中央の平坦部に位置するが穴跡である。形状は、が部と足場部の境がくびれたやや歪んだひょうたん形を呈している。さらに、北側に浅い楕円形の掘り込みがあるが、が穴の埋没後に掘り込まれたもので、時期の異なった落ち込みであり、その性格は不明である。が穴の底面は平坦な足場部からが部に向って緩く傾斜している。足場部は、遺構検出面から約10cm掘り込みで、底面はそれほど踏み固められていない。が部は、遺構検出面より約40cm掘り込まれ、多量の焼土が検出された。底面はかなりの熱を受けた状態で、ローム層がボソボソの状態になっている。また、が部西側にテラスが設けられている。遺物は、土器片9点、剝片類3点と少量で、いずれも小破片であり、底面からかなり浮いた状態で検出されているため流れ込んだものと思われる。土器はいずれも条痕文のみが施文されたものである。

覆土

- 第1層 暗褐色土層、ローム粒、焼土粒を多く少量含む。
- 第2層 黒褐色土層、ローム粒、焼土粒を少量含み、堆積にしまりがある。
- 第3層 黒褐色土層、ローム粒、焼土粒を多量含む。
- 第4層 暗褐色土層、焼土粒を多量にローム粒を少量含み、堆積にしまりがない。
- 第5層 黒褐色土層、焼土粒を多量にローム粒も多く含む。
- 第6層 茶褐色土層、焼土ブロックが多く含まれ、また熱を受けたローム粒も少量含まれて、堆積にしまりが少なくバサバサした状態である。
- 第7層 黄褐色土層、ロームブロックが多量に含まれ、堆積にしまりがある。
- 第8層 暗褐色土層、ロームブロックを多量に含み、焼土ブロックを少量含む。
- 第9層 黑褐色土層、ローム粒、ブロック、焼土粒、ブロックを多量に含み、炭化物片も少量含む。
- 第10層 褐色土層、ローム粒を多量に含み、焼土粒を少量含む堆積にしまりがない。
- 第11層 黄褐色土層、が床面で熱を受けたロームブロック層であり、ボソボソした堆積状態である。
- 第12層 暗褐色土層、ローム粒を多量に含み焼土粒も若干含まれる。堆積にしまりがある。
- 第13層 暗褐色土層、第12層に比べローム粒が多く含まれ、焼土粒は全く含まれていない。
- 第14層 暗褐色土層、ローム粒、焼土粒を多量に含む。

002遺構（第15図 図版12）

この遺構は、B地点の包含層遺物集中分布範囲の北端に位置している。形状は長軸70cm、短軸50cmのやや歪んだ楕円形を呈する。長軸の断面形は西側壁より緩く傾斜し、テラス部を経て底部となる。底部はややオーバーハングしており、固くしまっている。遺構検出面から底部まで約35cmの深さである。この遺構の平面、断面の形態は、炉穴跡を思わせるものである。また底部周辺の覆土中より多量の炭化物が検出されているが、焼土は全く検出されず、壁面、底部に熱を受けた痕跡が認められなかったので、土壤としてこの遺構をとらえた。遺物としては、土器片が4点検出されているが、いずれも条痕文のみの小破片土器で、底面からかなり浮いている。

覆土

第1層 黒褐色土層、第2c層の影響を強く受けた層である。

第2層 黄褐色土層、ローム粒、ブロックが主体となった層であり、部分的に炭化物片が集中して検出された。

第3層 楔色土層、ローム粒、ブロックを多量に含み炭化物片を極く少量含む。

第4層 暗褐色土層、ロームブロック、炭化物片を多量に含む。

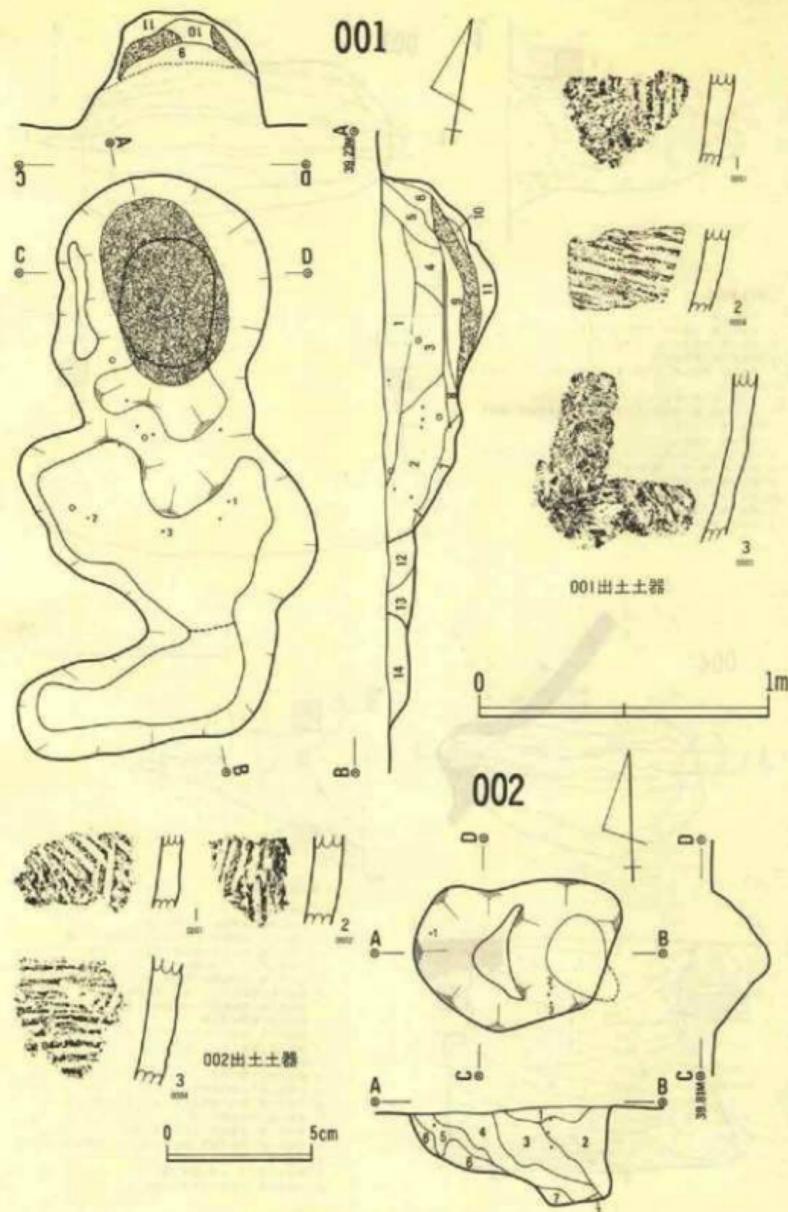
第5層 楔色土層、ロームブロック、炭化物片を少量含む。

第6層 黄褐色土層、ローム粒、ブロックを多量に含み、堆積にしまりがある。

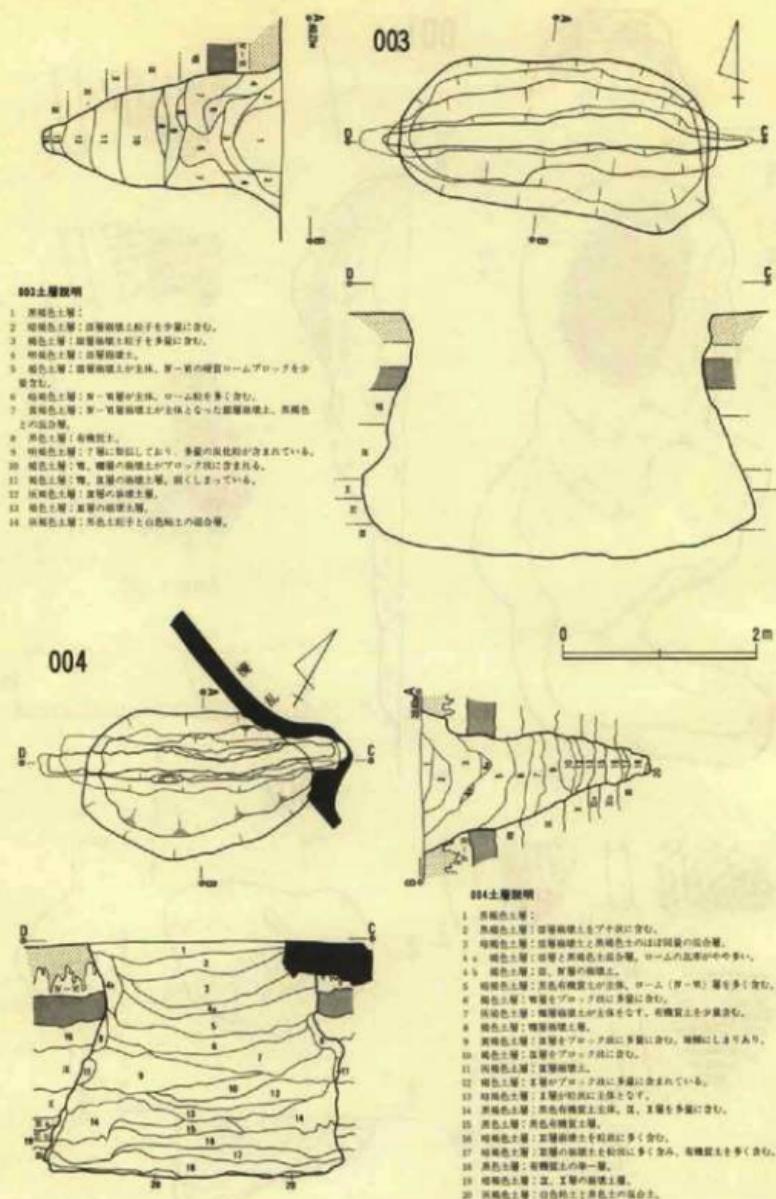
第7層 黄褐色土層、壁上部のローム層の崩壊土層。

003遺構（第16図 図版13）

この遺構はB地点の北側の包含層遺物集中分布範囲から離れた地点に位置する陥し穴状土壤である。形状はE-Wに長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部長軸3.2m、短軸1.6m、底部长軸4m、短軸0.3m、深さ2.5mと大形のものである。長軸の断面形は袋状に下部が広がり、オーバーハングして底部に至る。底面は平坦であるが両端部が緩く上がり、弓状の形態を呈する。短軸の断面形は、開口部より緩いくびれを途中にもちながら徐々にすぼまりながら底部に至っている。覆土の堆積状態は、ほぼレンズ状堆積であるが、第10層以下はローム層の2次堆積したものであり、壁部の崩壊したものがかなりの短時間で堆積したものと考えられる。しかし第10層においては、非常に固くしまっており、ほぼ水平に厚く堆積していることから、この層については人為的な堆積も考えられる。また、第14層は有機質土の堆積層である。



第15図 001、002遺構（遺物1/2）



第16図 003, 004造構

004遺構（第16図 図版14）

この遺構は、003遺構と同様に陥し穴状土壙と呼ばれるものである。形状はN-60°-Eに長軸をもつ橢円形を呈する。規模は開口部長軸2.5m、短軸1.4m、底部長軸3m、短軸0.2m、深さ2.4mと003に比べやや小振りであるが、平面形、長短軸の断面形はよく似ている。覆土の堆積状態もレンズ状のものであり、下位のものは壁部の崩壙土が主体となったものである。底部付近には、有機質土の堆積がみられる。

本遺跡で陥し穴状土壙の検出例は、第1、第2次調査において今回の2例しかなく、遺物の出土例もないため、時期の判断は困難であるが、周辺の遺跡からの検出例から縄文時代の前半のものと考えてよいと思われる。そしてこの2基の陥し穴状土壙は、覆土堆積状態において多少異なっているが、形状等ほぼ同じであることから、同一時期のものと考えられる。陥し穴状土壙は、その形態においていくつかに分類されているが、その性格、構造については不明な点が多い遺構である。本遺跡のように広い面積に対し、わずか2例という稀薄な分布や003遺構にみられた覆土堆積状態や底部付近にみられる有機質土層などは、この土壙の性格、構造を把握するうえで、1つの手掛かりとなりうる資料と思われる。

2. 遺 物

包蔵層の出土遺物は、A地点とB地点の2地点に集中して確認された（第4図）。遺物はいずれの地点も早期のものが主体をなし、後期までのものが出土している。このうち土器については、大別すると以下の5群に分類できる。

第1群土器 縄文時代早期沈線文系土器。田戸下層式、田戸上層式など。

第2群土器 縄文時代早期の条痕文系土器。鶴ヶ島台式が主体となる。本遺跡においてこの土器群が主体となっており、土器総出土量の95%以上を占める。

第3群土器 縄文時代前期後半の土器。

第4群土器 縄文時代中期の土器。五領ヶ台式、阿玉台式、加曾利E式など。

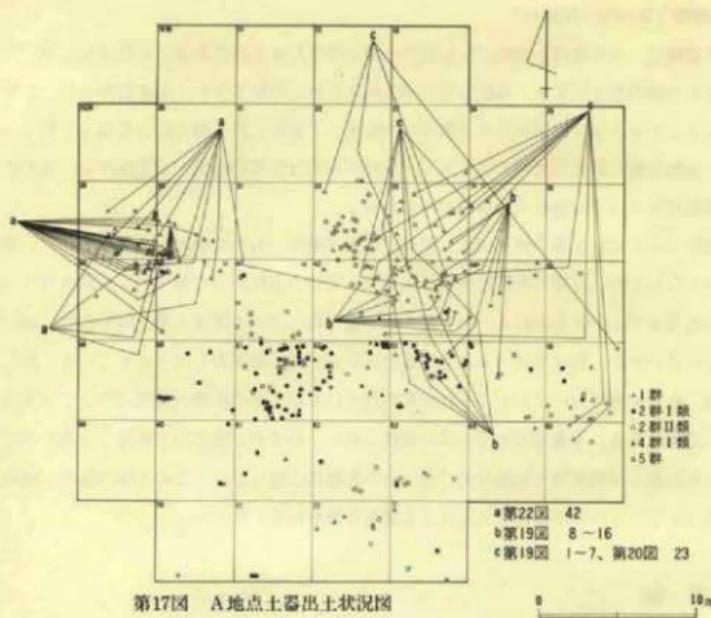
第5群土器 縄文時代後期の土器。

以上のように大別した訳であるが、各土器群はさらに細分することができる。この他に石器・剣片類の出土量も多く、それらを地点ごとに順をおって述べることにする。

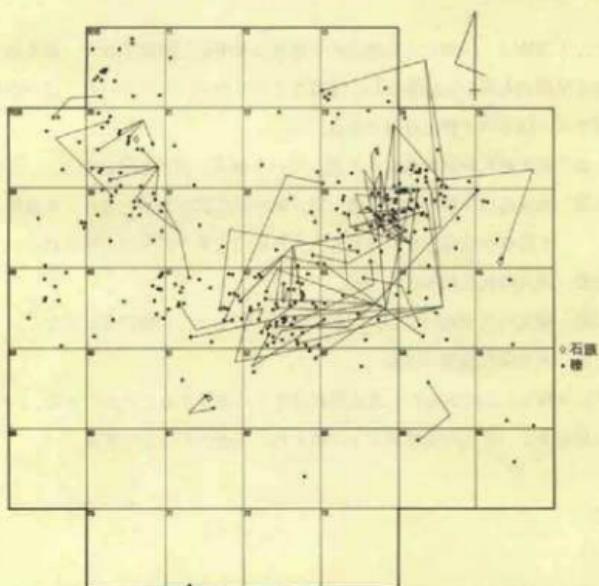
(1) A地点

台地の北側に入り込んでいる谷に接した北西に、緩く傾斜する地点に位置する。

発掘区の面積は約1,000m²で、遺物は第II b・II c層から検出され、その主体をII c層に置



第17図 A地点土器出土状況図



第18図 A地点石器・礫出土状況図

く。平面的分布は、いくつもの集中部をもった分布状態であるが、同一個体土器、同一母岩が破損、粉碎した状態と考えられるものである（第17、18図）。また、土器の分布状態と石器類の分布状態は、重ならずわざかにずれている。

ア. 土 器

出土総数約500点であり、そのうち5個の完形、半完形品が復元できた。

第I群土器

早期中葉沈線文系土器であり、その中でも主として田戸下層、上層式に比定されるものである。

第I類土器（第19図1～7、第20図22～23 図版8、9）

田戸下層式土器を本類土器とした。土器の内外面を研磨した上に、沈線文、貝殻腹縫文による文様が施されたものである。22は口縁は平縁であり、口唇部が丸味を帯びたものである。器形は、胴部にややふくらみをもつ尖底土器で、文様は、平行沈線文と爪形状文により構成されている。口縁部には、2条の平行沈線が廻り、胴部には、縦位に押捺による爪形状文が施され、この土器を6分割しており、その爪形状文間を2～4条の平行沈線により、菱形状に結んでいる。このような文様構成は、田戸下層式土器の典型的なものと言える。23は口縁部、口唇部の形状、器形は、22とはほぼ同様のものと言える。しかし文様は平行沈線の代りに、アナグラ属の貝殻腹縫文を文様要素として多用しており、その他に爪形状文、沈線がわずかにみられる。ただ資料が、いずれも断片的なためはっきりとした文様構成は把握できないが、ほぼ22と同様なものを考えられる。口縁部には、貝殻腹縫文を平行に連続的に押捺し、胴部では爪形状文の間を菱形状に結ぶようにかなり密な状態で貝殻腹縫文が押捺されている。またこの貝殻腹縫文の輪郭を定めるような沈線が施されているものもみられる。

第II類土器（第19図8～16、第22図 図版8、9）

田戸上層式土器を本類とした。土器の内外面を研磨した上に沈線、貝殻腹縫文により文様が施されたもので、胎土中にわずかに纖維が含まれている。8～13は、同一個体の土器と考えられるものであり、器形は42と同じような口縁部に緩いくびれをもつ大形の土器と思われる。口縁のくびれ部には、波状沈線をはさんだ平行沈線が横位にはしり、その下部に逆三角形状の区画状文が施され、その中央部に沈線による円形文とこれを中心とした貝殻腹縫文による弧状の充填文が施されている。この円形文と区画状文との交叉部には、刺突文が押捺されている。また胴部には、平行沈線による弧状文が連続して引かれており、この平行沈線の間に貝殻腹縫文が押捺されている。42は半完形品の土器であり、口縁は平縁又は波状か不明であるが、口縁部には1段の緩いくびれを有し、やや胴部にふくらみをもち、丸底の底部へとづく大形の土器である。口唇部の両端には刻目をもち、断面形は角ばっている。口縁部の文様構成は、口縁に沿って2条の平行沈線が廻り、この平行沈線とくびれ部の間には平行沈線による鋸歯状

文と孤線文描出され、さらに貝殻腹縁文が充填文として押捺されている。くびれ部には、2条の平行沈線が緩く曲線を描きながら廻っており、その間にも貝殻腹縁文が押捺されている。胴部は、上位、中位、下位に横位にはしる平行沈線により、2段に文様部を区画され、その区画内には独特な波状文が連続して描出され、さらに充填文として貝殻腹縁文が押捺されている。そして底部は、無文となっている。14~16は平行沈線文内に刻目が施されているものである。

この他に、本群に属する底部が2点出土している。(第21図37、38)

第2群土器 (第19図17~21 図版8)

広義の茅山式土器を本群とした。いずれも小破片であり、条痕文のみにより施文されている。

第4群土器 (第20図24 図版9)

胴部下半部から底部にかけての土器片であり、上部は無文帶となっており、そこから無節の結束羽状縄文が、縱位方向に施文されている。これは五領ヶ台式土器の特徴的な文様といえる。

第5群土器 (第21図34~36 図版10)

いずれも把手の破片であり、縄文時代後期初頭のものである。

その他の土器 (第20図25、第21図26~33 図版9、10)

26~33は同一個体の深鉢土器片であり、これと25はいずれも粘土中に小礫を含み、焼成状態等も類似している。また器面調整においても、内外面に顯著な磨きがかけられ、そして口縁は平縁で、やや角張った形狀を呈している。口縁部は、22は緩くくびれ、25は比較的強くくびれ段を有する。26~33は荒い格子目状沈線文が施文され、25は無文土器であるが、口縁上面から見た形狀が、隅丸方形を呈している。この2つの土器は、資料例が少なく時期の判断が難しいが、第5群土器に属するものと考える。

イ. 石 器

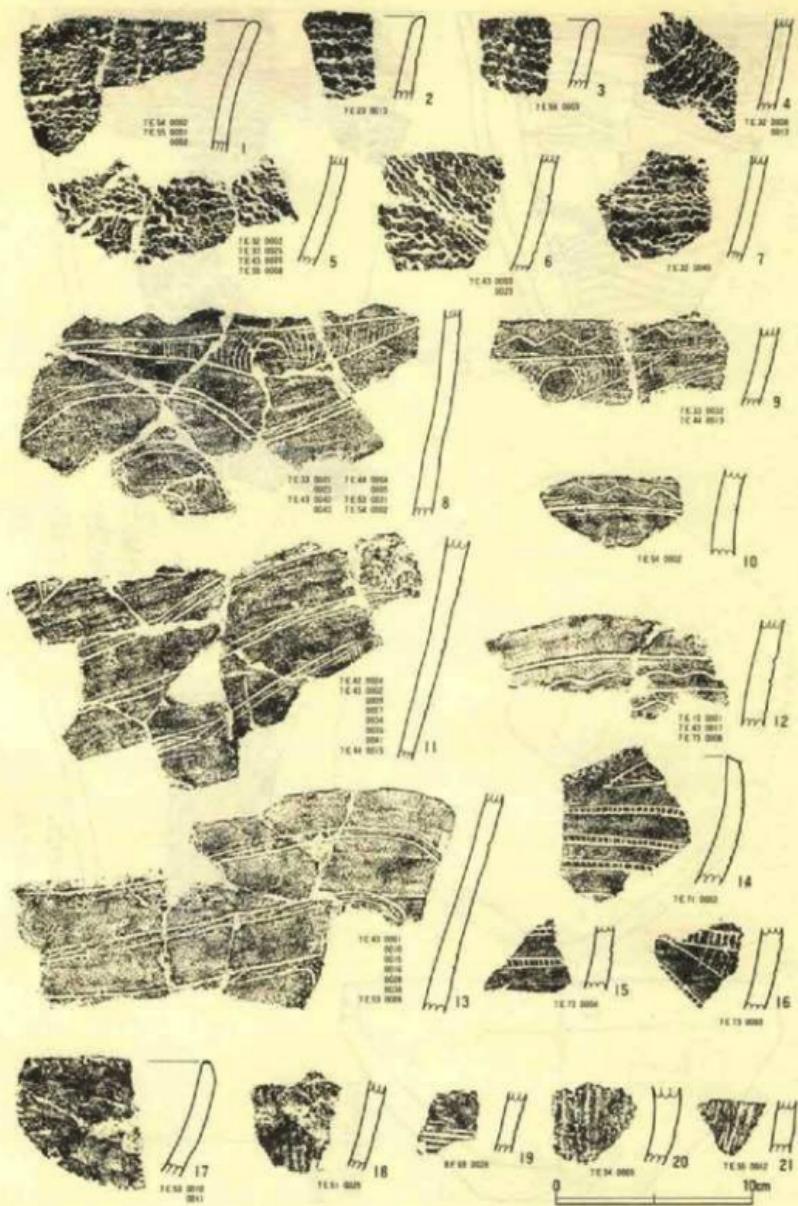
出土総数313点、その内訳は石鋸3点、礫片310点と定形的な石器は少なく、礫片がその主体をなす石器組成と言える。

○石鋸 (第21図39~41 図版9)

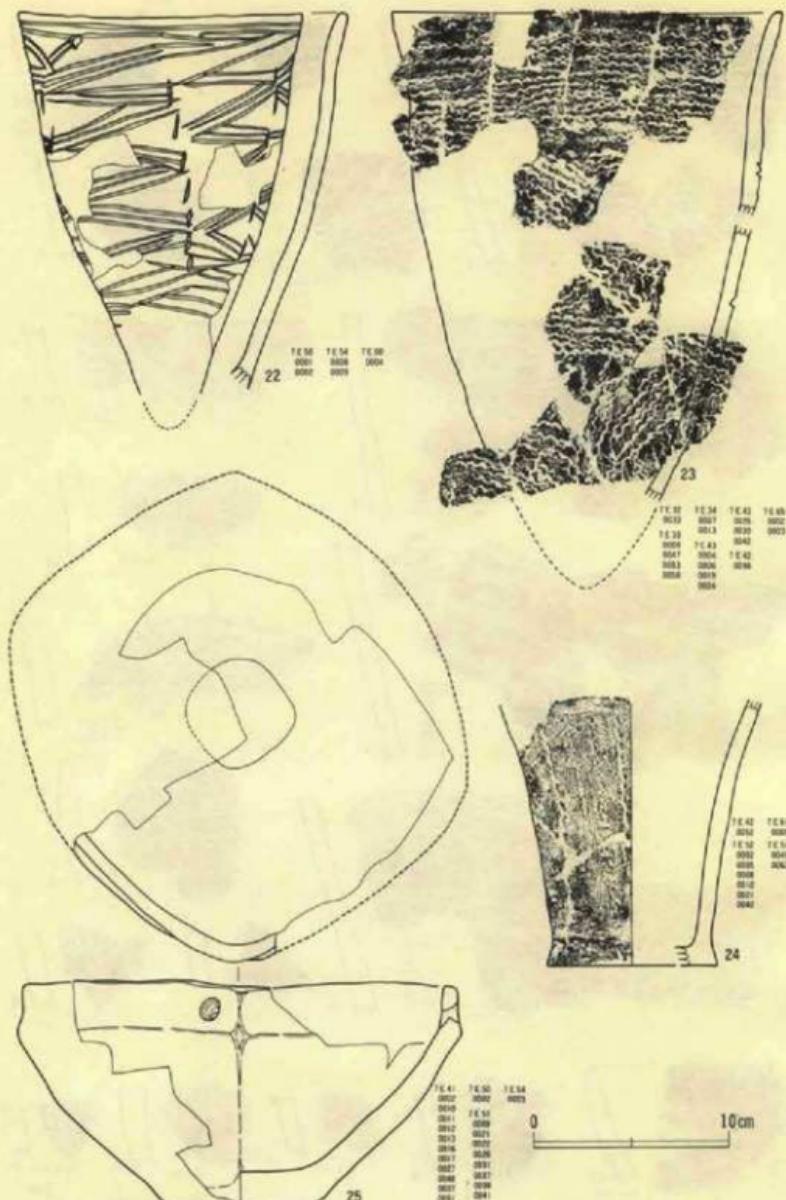
39は黒曜石製のもので脚が破損している。40は珪岩製の三角鋸である。41は砂岩製の完形品である。これらの時期的な決定は難しいが、後に述べるB地点出土の石鋸と比較して縄文時代早期後半のものと思われる。

○礫片

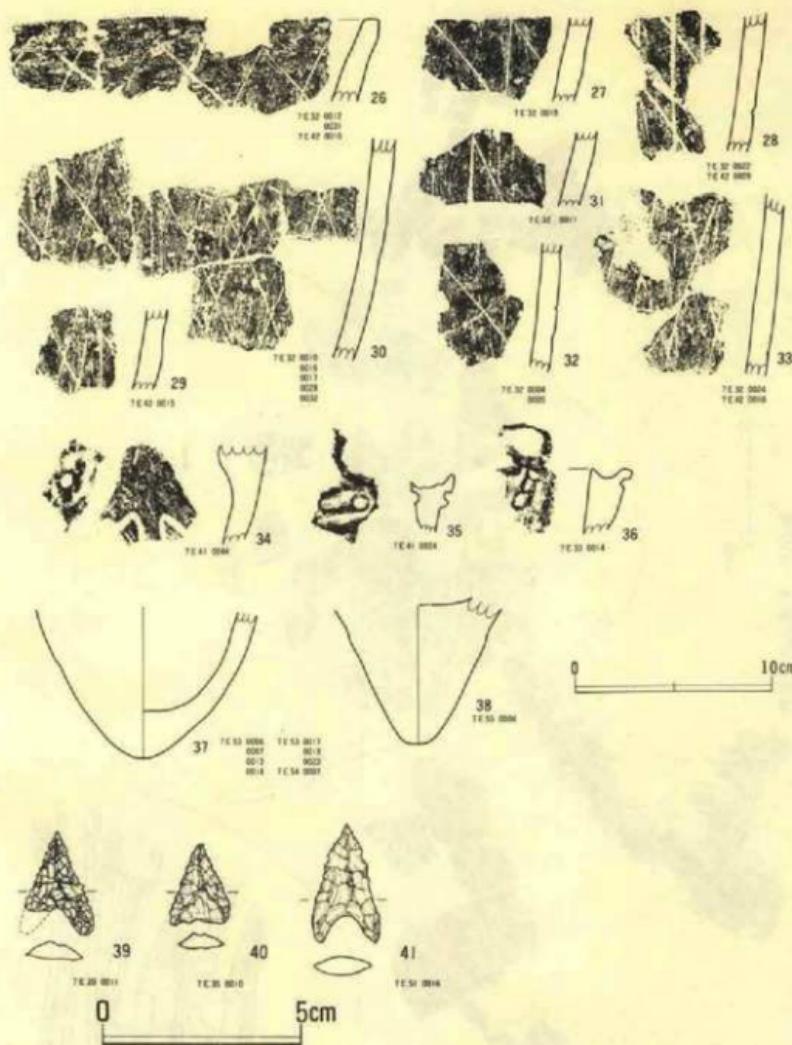
礫片はいずれも拳大のものがいくつかに破損し散在している状態のものであり、またその2割近くのものに熱を受けた痕跡がみられる。これらを石質別にみると、珪岩107点、砂岩63点、石英斑岩53点、流紋岩35点の順であり、さらに安山岩、ホルンフェルス、凝灰岩、石英、シリカ岩などが少數みられる。これらの礫片の分布は、ほぼ同一時期のものと考えられるもので、沈線文系土器の分布に關係をもつものと思われる。



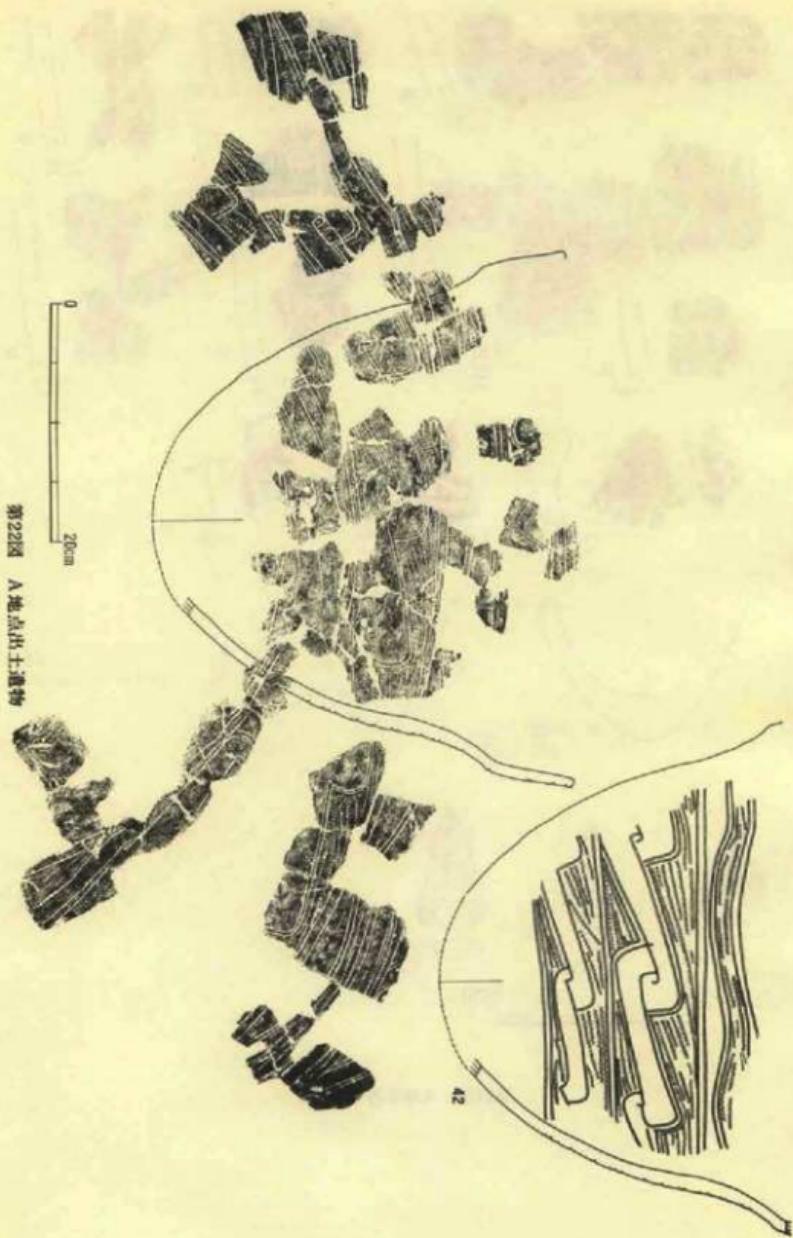
第19圖 A地点出土遺物



第20図 A地点出土遺物



第21図 A地点出土遺物



第22図 A地点出土遺物

(2) B 地点

この地点は、台地の中央に入り込んでいる谷に接した第1次調査時の14地区の北側につづく台地平坦部に位置する。

発掘区の面積は約10,000m²であり、出土遺物としては、土器類約16,000点、石器・剝片類約5,200点、その他鉄滓、古錢が少量出土している。土器類は繩文時代のもので「条痕文系」のものがその主体をなし、石器・剝片類もこれと同様のことが言える。これらの遺物は、第II b・II c層からの出土であり、その主体はII c層に置くものであるが、近年の耕作、削平により、かなりの擾乱を受けているため表土層中からの出土数も多い。遺物の平面的分布状況は、発掘区の南側に行くに従い密な分布となり、この西側はすでに削平されているが、分布は、それほど西側へ伸びるものと思われず、南北に長く伸びる分布状態である。土器類の分布は密度の濃いもので、多くの個体別の土器が破損、粉砕し、散在している状態であり（付図1）、時間差による分布の違いは認められない。石器・剝片類の分布状況も土器類のものとは重なるものであるが、いくつかの集中部が見られる（付図2）。

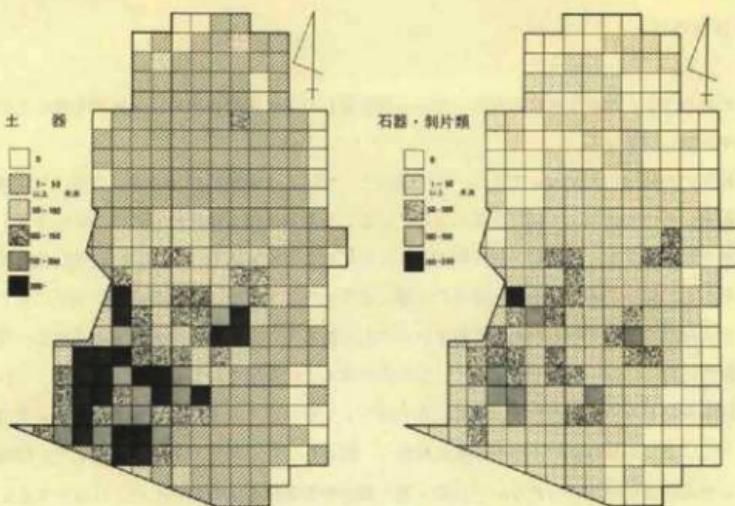
ア. 土 器

第2群土器

本群の土器は、鶴ヶ島式土器が主体となった広義の茅山式土器群であり、B地点より出土した約16,000点の土器の95%以上を占めている。出土層位は、第II c・II b層に渡り、その主体を第II c層に置く。さらに第I層からも多量に出土しており層位による型式分類は困難であるが、器形、施文部位、施文方法、施文具等により、以下に述べるようにさらに分類できるものである。なお、遺物の説明を進めるにあたって、鶴ヶ島式土器の特色である区画状文は、文様帶を縦位に分割する区画状文と、さらにそれをタスキ状またはそれに近い形で文様帶を細分割する区画状文とにより構成されているが、これらは性格の異なるものと考えるために、前者を縦位区画状文、後者を横位区画状文と分けて便宜的に呼称する。そして単に区画状文と呼ぶ時は、両方のものを表わす。

第1類土器（第24図1、2 図版17）

9点の出土例がみられ、いずれも小破片のため土器の器形等を知ることはできないが、いずれも2条の太い隆起線文により縦位区画状文が施こされ、その上には刻目が加えられている。横位区画状文は沈線によりタスキ状に描出されているものと思われる。充填文は横位区画状文と同じ施文具によると思われる沈線を縦位方向に施こしている。本類は、野島式土器に比定されるものである。



第23図 B地点縄文時代グリッド別遺物出土図

第II類土器（第24、25図3～42 図版17、18）

本類土器は、鶴ヶ島台式土器の初期段階に位置するものであり、前段階の野島式土器のもつ特徴と鶴ヶ島台式土器のもつ特徴をもった、いわば両型式の過渡期的な土器と考えられるものである。これらはさらに、縱位・横位区画状文の施文方法の違いによりA～C種に細分できる。

A種（3～10）

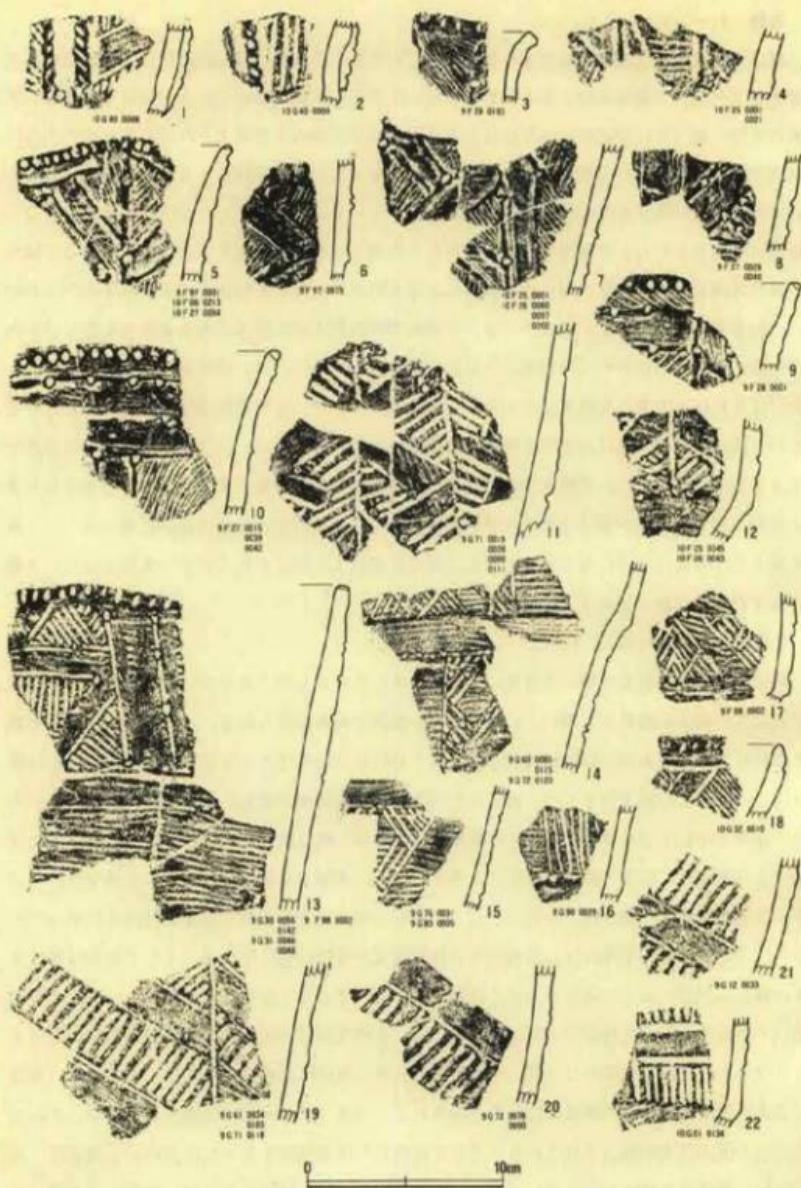
縱位・横位区画状文が隆起線文により描出されているものである。充填文は、いずれも串状の施文具による細い集合沈線が断面状に配されている。そして縱位区画状文上と縱位、横位区画状文の交叉部に不規則に円形竹管による刺突文が押捺されている。3は把手部であり、横位区画状文は描出されておらず、細い集合沈線により縱位区画状文間を充填している。5～7は同一個体土器で、口縁は波状を呈する。この縱位区画状文は、波頂部と波頂部間の中央部から1条垂下し、文様帯を8分割している。そして横位区画状文はタスキ状を基調として抽出されている。10は口縁部に横にはしる1条の隆起線文を施してその上には等間隔に刺突文が押捺されており、口縁部の無文帯を広くもつ。

B種 (11~22)

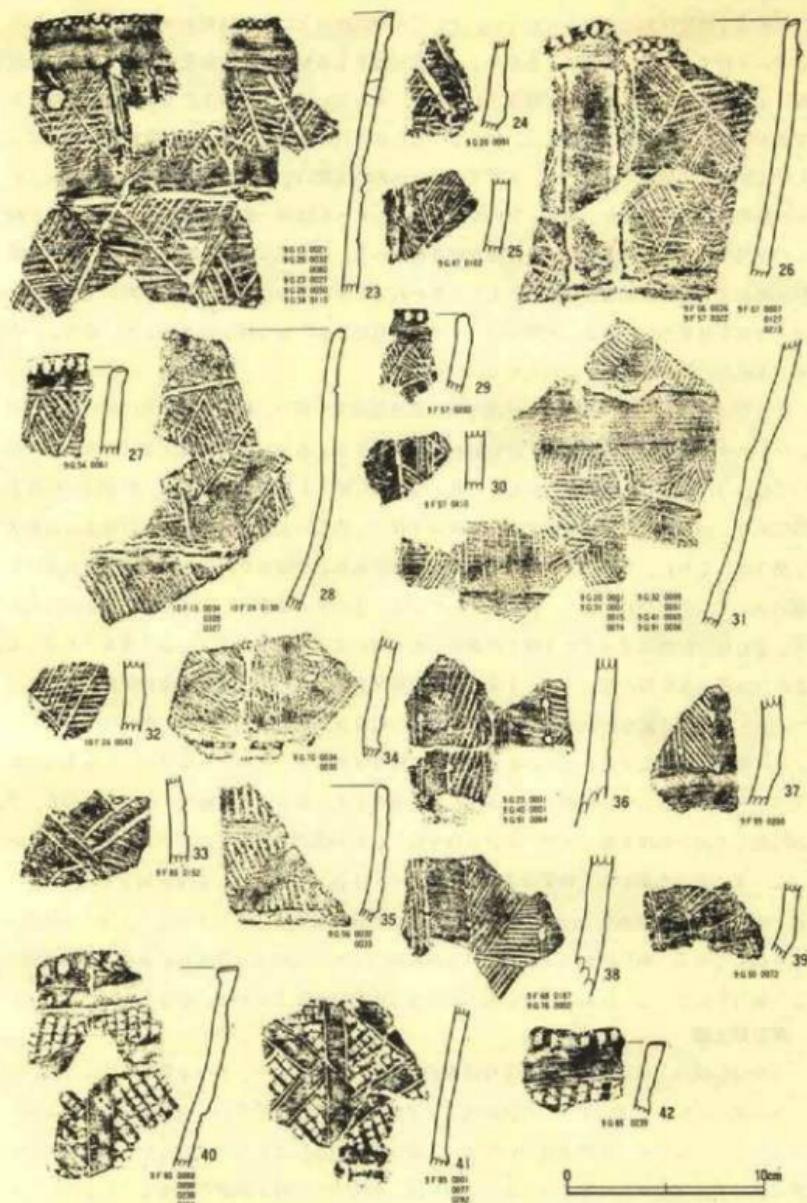
縦位・横位区画状文が沈線により抽出されているものである。11、12は縦位・横位区画状文と充填文が同一の施文具によると思われる太い沈線により抽出されている。11は1条の縦位区画状文間に縦方向に鋸歯状に交互にはしる2条の横位区画状文が施文されている。この土器片は胴部から底部にかかる部分であることから、かなり幅の広い文様帯をもった土器と思われる。13は口縁が緩い波状を呈し、口唇部は丸みを帯びている。波頂部からややすれて3条からなる縦位区画状文が斜行して描出され、タスキ状を基調とした横位区画状文がこれに加わる。縦位・横位区画状文と充填文は同一の施文具によるものと思われ、充填文は対応する区画内において方向を変え鋸歯状に施文されている。区画状文間の無文部は地文である条痕文が磨り消されている。また器形においては胴部にくびれが全くみられない。14、15は同一個体土器であり、14にはそれほど顯著なものではないがくびれがあり、これにより文様帯は2段に分かれている。この2段の文様帯における縦位区画状文の位置は一致していない。18は緩く内反する口唇部が丸みを帯びた口縁部で、充填文は細い沈線により施こされている。また胎土中に白色土粒を多く含む。19~21は同一個体土器片と思われるもので、1条の太い沈線の縦位区画状文と、これを境として左右に交互になるよう斜行状に横位区画状文が施こされている。充填文は太い多截竹管またはヘラ状工具により施文されている。

C種 (第25図23~42)

縦位・横位区画状文が細い沈線文により描出されているものであるが、23~26のように縦位区画状文に細い隆起線状文を用いているものも少数例であるがみられる。5、6は同一個体土器と思われるものであり、口縁は波状を呈し緩く外反し口唇部は丸みを帯びている。口縁部は磨り消しによる広い無文帯をもつ。縦位区画状文は、比較的細い沈線により1条施文されているが、途中で切れており文様帯を完全に縦割していない。横位区画状文は、細い深く刻まれた沈線により鋸歯状に描出されているものと考えられる。充填文も同様の沈線により施文されている。区画状文間は、磨り消しが行なわれているが、地文である条痕文を完全に消すに至っていない。この文様帯の下部には、比較的太い隆起線文が横位に廻っている。そして器形は外反する口縁から胴部にふくらみをもち緩く底部へすばまっておりくびれはみられない。31は2段の緩いくびれをもち、文様帯を2段に分けている。上段文様帯の区画状文の構成は明確にとらえられないが、下段文様帯とはほぼ同じものと思われる。縦位区画状文としては、9条の細い沈線による。横位区画状文の構成には特徴がみられる。つまりタスキ状に区画された中に、さらに楕円状の区画状文が施こされている。そして楕円状の区画状文をもった区画内の充填文は、同心円状の曲線的沈線文が施文されており、また楕円状の区画状文をもたない区画内の充填文は、直線的沈線文による。区画文の交叉部刺突文は、楕円状区画状文の1部と横位区画状文の1部に見られる程度で、刺突文自体も鮮明なものではない。36~38は同一個体土器でありこの土器



第24図 B地点第2群I・II類土器



第25図 B地点 2群II類土器

には明確な横位区画状文がみられない。そして縦位区画状文には2種類あり、非常に細く彫りの深い平行する2条の沈線によるものと、比較的幅をもち軽くなじた程度の平行する2条の沈線によるものとが、ほぼ交互に施文されている。そしていずれの沈線上にも、ほぼ等間隔に刺突文が押捺されている。充填文は、軽くなじた程度の浅い沈線により、縦位区画状文間に縦位方向に鋸歯状に施文されている。充填文の無い区画状文間は、顕著な磨り消しが行なわれている。器形は不明であるが、緩いくびれがみられる。40~42は同一個体土器であり、口縁は平縁でやや外反し、ヘラ状工具により押捺がなされている。口縫部は丸みを帯びている。縦位・横位区画状文とも同様施文工具によるものと思われる2条の沈線による。横位区画状文の構成は、タスキ状を基調としている。充填文は、ヘラ状工具による丁寧な押し引きによる。器形は、不明であるが、胴部に緩いくびれをもつ。

23~26は先述したように、縦位区画状文に細隆起線文を用い、横位区画状文に細い沈線を用いたものであり本種においては、特異的な文様構成と言えるが、縦位区画状文以外の文様においては、ほぼ共通した特徴がみられるため、今回はC種としてとらえた。23、24は同一個体土器であり、24は23の下位に位置する。口縁は平縁で、内削け状になっている。口縫部には顕著な磨きが行なわれ、これにより口縁に平行して微隆起線状の陰線が作られている。文様帶は胴部の緩い2つのくびれにより2段に分かれている。上段の文様帶は、2条の垂下する細隆起線文による縦位区画状文とタスキ状を基調とした沈線による横位区画状文により構成されている。また口縫部と文様帶の境には、1条の細隆起線文が廻っている。下段の文様帶は、上位のくびれ部との境に細な太い沈線を廻らしており、縦位区画状文はみられず、鋸歯状に平行する2条の横位区画状文を廻らしている。上下段の横位区画状文、充填文を描出している沈線文は、太さが一定しておらず、区画からはみ出しているものもあり非常に細な施文がなされている。25、26は同じく同一個体土器であり、波状口縁を呈し、口縫部は丸みを帯びている。胴部にくびれはなくすんどうな器形で文様帶は1段である。その上部、下部には、細隆起線文を廻らして区画している。縦位区画状文は、波頂部分に2条の細隆起線文を垂下して上部、下部の細隆起線文を結んでいる。横位区画状文は、タスキ状に描出され、充填文は構造状の非常に細い沈線により施こされている。区画状文交叉部の刺突文は円形竹管により明確に押捺されている。

第三類土器

本類は、縦位・横位区画状文の文様構成が安定したものとなり、また多彩なものとなる。この区画状文の安定に伴いすべての区画状文交叉部に刺突文が押捺され、文様要素の大きな部分を占めるようになる。充填文については、沈線、押し引きによるものであるが、施文具とその使用法に多様化が見られるようになる。器形は、胴部のくびれが強調されるようになり、これにより明確な1段ないし2段の文様帶をつくる。そして大形土器も多くみられるようになる。口縁は、平縁と波状のものとがあり波状のものは、波頂部が強調されるようになり、またこの

時期の特徴的な把手も現われる。口縁の断面形は、内削ぎ状のものが多く占める。このように本類の土器は、鶴ヶ島台式土器の典型的な特徴をもつものと言える。そしてその特徴の主となる区画状文の描出方法の違いにより以下のように分類できる。

- A種 楓位・横位区画状文が、細降起線文または、微降起線状文によるもの。
- B種 楓位・横位区画状文が、沈線によるもの。そして例は少數であるが、沈線による楓位区画状文に代わって疊帶文を施し横位区画状文に沈線を用いたもの。
- C種 楓位・横位区画状文が、細い沈線によるもの。

以上3種に分類を行なったが、さらに各種において、楓位・横位区画状文の文様構成の特徴を主として以下のように細分した。

- a. II類に示めしたように、楓位・横位区画状文が直線的な文様により描出され単純な構成となっている。そして、文様帶内における楓位・横位区画状文の相互関係が明確である。
- b. 楓位・横位区画状文の文様構成は基本的にはaと同じであるが、特に横位区画状文において、文様が複雑化し、曲線的文様も多く用いられる。また楓位・横位区画状文の相互関係が不明瞭なものもみられるようになる。つまり、楓位・横位区画状文のそれぞれの文様において、また双方の構成において、多彩なものとなる。器形においては、波状口縁、くびれの発達が強著なものが多い。

以上のように各種を2つに細分した。このように2段階(Aa, Ab, ... Ca, Cb)の分類に従い土器の説明を行う。

Aa種 (第26図43~55、第28図76~80 図版19, 21)

43~55は充填文が沈線によるものであり、76~80は充填文が押し引きによるものである。43は口縁が内削ぎ状の波状を呈し、波頂部より3条からなる楓位区画状文が垂下する。横位区画状文は文様帶を2分するかのように横位にはしるものとタスキ状のものとにより構成されている。そしてすべての区画状文交又部には刺突文が押捺されている。器形において胴部のくびれはみられない。46, 47は楓位区画状文に太い降起線文を用い、その上に押捺による刺み目が加えられている。またくびれ部も同様の刺み目が横位方向に施されている。49は胴部に強いくびれをもち、口唇部は丸味を帯びている。横位区画状文は、本群土器の特徴的文様の1つである曲線的に描かれた「へ」の字状の文様がみられる。50~55は充填文が太い沈線によるものであり、52の楓位区画状文は4条描出されている。76, 79の充填文は押し引きというよりも、刺突に近い施文方法によるもので、特に79は2本の細い竹管を並行にして使用したものと考えられるもので、いわゆる「二連式押し引き文」と呼べるものである。76は波頂部に突起を有するものでこの部分に粘土を貼り付けさらにその中央に細降起線文を垂下し、その上に刺み目を押捺し楓位区画状文をつくり出している。しかし下段の文様帶には貼り付けによる楓位区画状文は至たっておらず、ややすれた部分に3条の細降起線文によるものが施文されている。78は

胸部に2段のくびれがみられ、上段のくびれ状態が非常に強い。この土器の胎土中には、3～5mm程の小礫が多く含まれ、器面がザラザラしている。

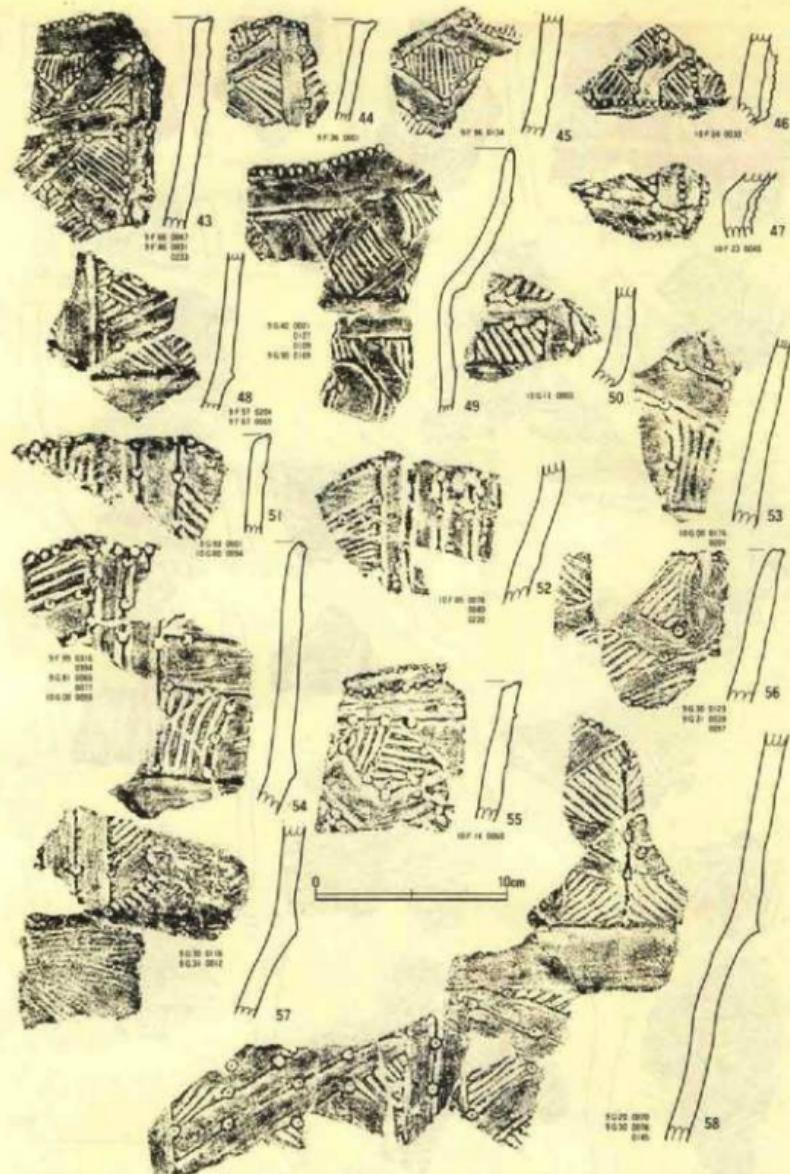
A b 種 (第26、27図56～75、第28図81～86、第38図262 図版19、20、21、30)

56～75は充填文が沈線によるものであり、70～75は太い沈線による。81～86、262は押し引きによるものである。

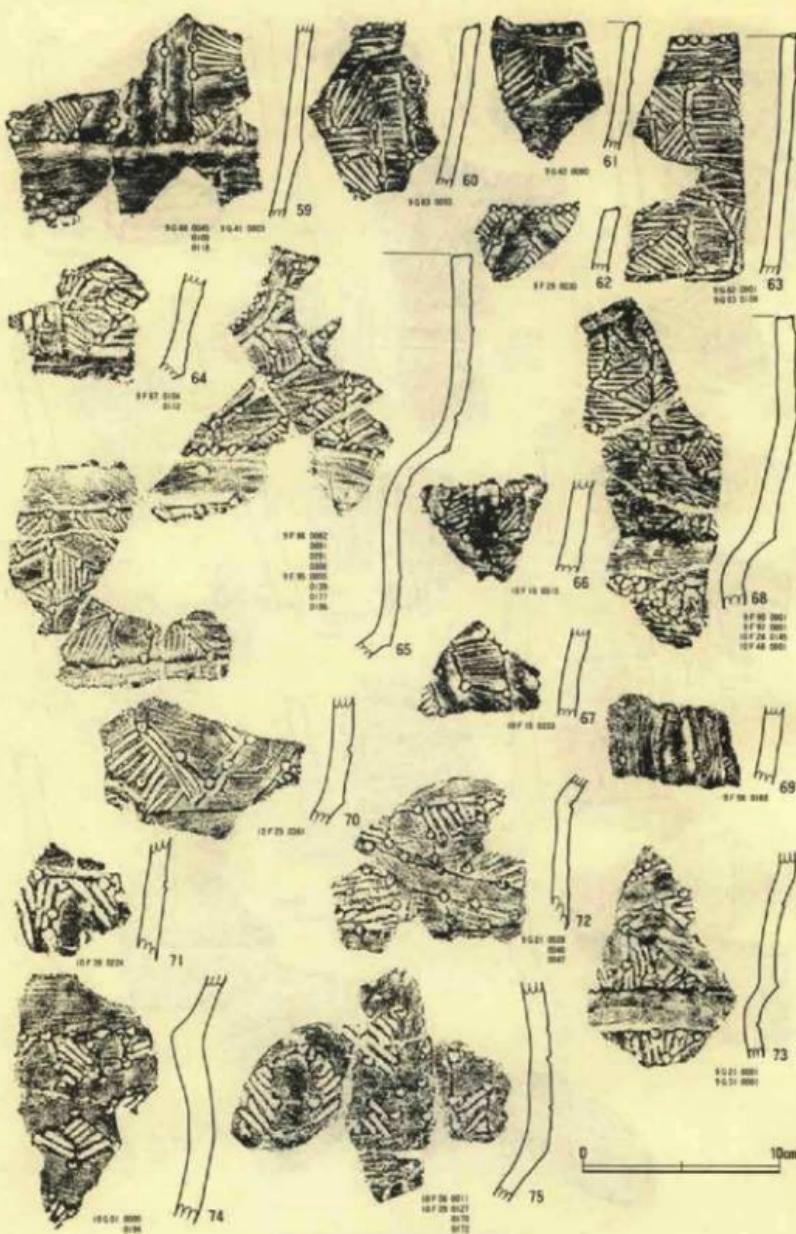
56～58は同一個体土器であり、口縁は液状を呈し胸部には2段の強いくびれを有し2段の文様帯をもつ、区画状文はその施文方法と構成に特徴がみられる。上段の文様帯における擬位区画状文は、1条の太い隆帯によるものと、それにより大きく区画された内をさらに、両側を磨くことにより粘土を盛り上げる特徴的な施文方法でつくり出された3条からなる微隆起線状文の区画状文により文様帯を縱割りしている。横位区画状文も2～3条の微隆起線状文のものによりタスキ状に描出されている。下段の文様帯には太い隆帯はなく、すべて微隆起線状文による。

59～62は区画状文が比較的直線的に描出されているが、区画状文の区画が細かく複雑な文様構成となっている。いずれの区画文間に磨り消しが施こされているが、60のように地文である条痕文を完全に消しきれていないものもある。59はくびれが強いものではないが、幅の広いものとなっている。

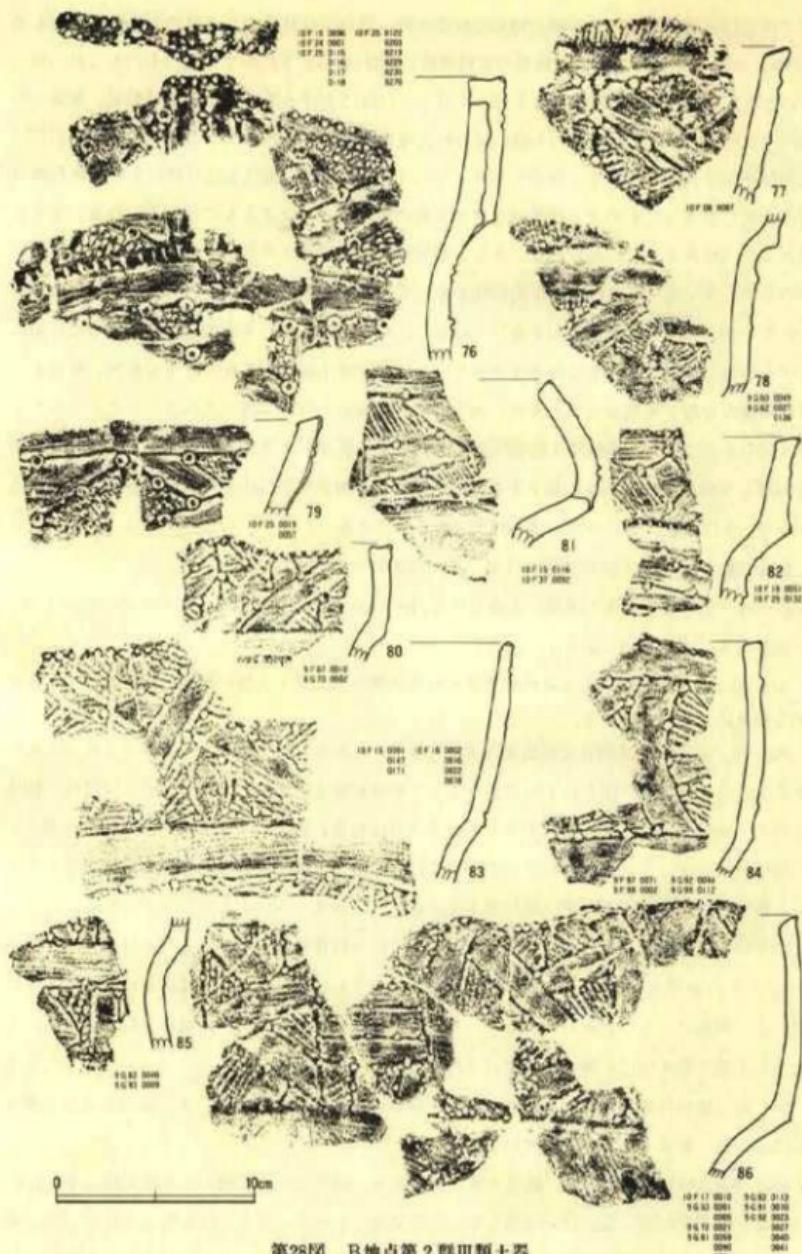
63～75、81～86、262は擬位・横位区画状文に曲線的なものをおり混せて、変化に富んだ文様構成をなしている。65、68は非常に発達した波状口縁を有し、65では液状が8つあると思われ、大形のものが4つそしてその間に小さな突起状のものが施こされ、大形の液状は内側によじれた状態となっている。文様帯は2つの強く屈曲したくびれにより2段に区画され、双方の区画状文は同様の構成によるものと思われる。擬位区画状文は、それぞれの波頂部から1条の隆起線文が垂下し、横位区画状文は基本的にはタスキ状に描出しているが、タスキ状の区画内をさらに直線的、曲線的な区画状文をおりませて幾何学的文様をつくりあげている。充填文はていねいな沈線文が施文されている。区画状文間の無文部やくびれ部には入念な磨きもが行なわれている。68は上段と下段の文様帯における文様構成が異なっているもので、下段文様帯は隆起線文が等間隔に垂下しているだけのもので、充填文はみられない。これは文様構成の簡略化と考えられるものである。69は小破片のため全体の文様構成は把握できないが、低い細隆起線文が紡錘状に描出され、そして同心円状に細く浅い沈線文による充填文が施文されている。74、75は同一個体土器で胎土中に1～3mm程度の小礫と金雲母を多く含み、器面がザラザラしている。81、82はくびれが非常に強く、幅の広いものとなっており82にはくびれ部に横にはしる3条の細隆起線文が施こされ、その上に等間隔に刺突文が押捺されている。口縁はいずれも内削げ状のもので、81は内反、82は外反している。充填文はいずれも細い押し引きによるが、81は1つの単位が長く、押しが浅いため沈線文に近いものとなっている。82、83、84、262は、区画状文の文様構成がさらに複雑なものとなっており文様帯は、83、262では強い2つのくびれ



第26圖 B地点第2群Ⅲ類土器



第27図 B地点第2群Ⅲ類土器



第28図 B地点第2群陶器

により2段に分かれている。82、84もこれと同様に強いくびれにより2段の文様帯をもつものと考えられる。上段と下段の文様帯の文様構成の関係は、262で把握でき他のものもこれに近いものと考えられる。262は非常に大形の土器で、口縁に把手を有する。把手の数量、配置は明確につかめないが、波状口縁の土器に見られた波頂部と縱位区画状文との密接な関係と同様に縱位区画状文を配する上で、把手が基点となっている。縱位区画状文は2種類あり、隆起線文を直線的に垂下したものと、括弧状とタスキ状の組み合わせによるものとがみられる。まず後者により文様帯を4つに縱分割し、そして横位区画状文はタスキ状のものだけでなく、平行線状のものも多く用いてそれが規則性をもって複雑に描出されている。84、86には把手はみられないが、小さな2つの突起を有している。このように、この4点の土器の、上段文様帶における縱位・横位区画状文は複雑化するとともにAa種土器にみられたような縱割、横割といった単純な分離が困難なものとなり、両方の区画状文を1つの文様の流れとしてとらえられるようになる。このことは縱位・横位区画状文の発達（崩壊）と考えられる。一方下段の文様帶における文様構成は、1条の垂下する縱位区画状文と崩壊状に描出された横位区画状文によるもので、上段に比べむしろ簡略化の傾向にあると言える。

Ba種 (第29図、第31図128~133、第37図260、団版22、24、31)

87~97、260は充填文が沈線によるもので、98~105は太い沈線によるものであり、128~133は押し引きによるものである。

87~90、94は2条ないし3条の垂下する縱位区画状文とタスキ状の横位区画状文による単純な構成によるものである。

91~93、95は縱位区画状文の施文方法に特徴がみられるもので、2条の平行する沈線を走らせることにより、その間をわずかに盛り上げて細隆起線文を描出している。91、92は同一個体土器で、矮い2段のくびれを有する。上段文様帶は数条の縱位区画状文とタスキ状を基調とした横位区画状文により構成されているが、下段文様帶は上段のものと同様の文様構成をもつ部分と横位区画状文がみられず、單に垂下する縱位区画状文のみによる部分がみられる。しかしこの2つの文様構成がどのような関連をもって下段文様帶を構成しているのかは把握できない。93は2条の細隆起線文により縱位区画状文が施文され、横位区画状文は沈線により施文されている。胴部にはくびれがみられない。充填文は沈線により施文方向は縱位となっている。またこの土器の胎土中に小礫が多量に含まれている。

96、97は横位区画状文が直線的でなくやや曲線的に描出されている。また焼成も良好で無文部には入念な磨り消しが施されている。

102、260は口唇部の刻み目、縱位・横位区画状文、刺突文が、同様のヘラ状工具（多截竹管）により施文されている。103~105も単一の施文具によりすべての文様を施文されたものと考えられるもので、切断面の不揃いな円形竹管を器面に垂直に当てたまま引いたものと思われる。

102、260の脛部にくびれはみられず、1段の文様帶となっている。102には補修孔を開けようとした痕跡が残っている。260は上面から見た口縁の形状が方形を呈し、各コーナーに波頂部をもつ波状口縁となっている。しかしながら方形の形状も脛部では円形となっている。文様構成においては、施文方法が非常に難であり、縦位区画状文は4条を基本とするものと思われるが、一定していない。横位区画状文はタスキ状を基調としているが、区画内よりはみ出したり、沈線の間隔も一定していない。また区画状文交叉部の刺突文は、タスキ状文様の交叉部のみに押捺されている。そして地文である条痕文の磨り消しは、全く行なわれていない。

128~133は充填文が押し引きによるもので、130、133は比較的太い竹管を工具とし、丹念に押し引かれている。131は、細い施文具により、連続刺突文状に施文されている。

B b 土器 (第30図、第31図134~138、第38図263 図版23、24、30)

本種の土器は文様構成において、個々に特徴をもったものが多く、変化に富んだものとなっている。充填文は、106~119では沈線文により117、119では太い沈線文による。106、114は刺突文が区画状文の交叉部のみでなく充填文上にも押捺されている。115は充填文の間に1列の刺突文が配され、沈線文による横位区画状文の代わりとなっている。107、108、110の横位区画状文の文様構成に新しく円形状のものが加わっている。107は、口縁が緩い波状を呈し、波頂部より垂下する3条の縦位区画状文により6分割され、その間を横位区画状文は菱形状に配され、その中心部に円形の区画状文を描出している。充填文は円形文から放射状に配されている。111、112は小破片のため明確な文様構成はつかめないが、タスキ状の横位区画状文がやや曲線的に描出され、また無文部には入念な磨り消しが行なわれており、1部の区画状文がそのため消されてしまっている。この磨り消し手法は、後述する指頭、ヘラ状工具によるナゾリ手法に近いものと思われるものである。112には補修孔が見られ、裏面にはさらに孔を開けようとした痕跡が残っている。106、109、117、119は区画状文と充填文の区別が不明瞭なものである。つまり、同様の施文工具を用いて、同一方向に施文されている。また刺突文の押捺も難であり、省略されているものもある。

135~138は充填文が押し引きによるものである。135、136は同一個体土器で、幅の広い入念な磨り消しの行なわれなくくびれ部をもつ、くびれ部には細い起線文が横にはしりその上には刻みが施されている。上段文様帶は緩い波頂部より貼り付けによる3条の隆線文を垂下し、その中央のものは口唇部まで伸びている。そして隆線文の上部、下部には、指頭またはそれに類した工具により押捺痕が施され、その間には刻みが施されている。この縦位区画状文は下段文様帶には至っていない。横位区画状文は135を見る限り、タスキ状を基調とした文様構成であるが、縦位区画状文内部にまでその文様が施されている。136では半円形状のものから1条の沈線が垂下して、縦位区画状文を構成している。充填文は細い円形竹管を2連にして押し引いている。またこの土器の断面には口縁部とくびれ部の接合状態が明確にわかる。137の充填文は

多截竹管を器面に対して垂直に押捺したもので、その断面形が良好に残っている。また区画状文にも同様の施文具が用いられている。138の充填文は間隔のあいた雑な沈線とさらにその間に円形竹管による刺突文が施されている。

118、121～125、127、263は上段文様帶もしくは下段文様帶に沈線による格子状のみの文様が描出されているもので、118の上段文様帶はタスキ状の横位区画状文による構成となっているが、下段文様帶に格子状の文様のみが施文されている。121、125は同一個体土器であり、121では充填文を有する横位区画状文と格子状文が同一文様帶内に併用されている。また125の格子状文は線がとぎれとぎれで完全な格子状となっていない。この土器の胎土中には、金雲母と小礫が多量に含まれている。127、263は同一個体土器で、胴部に1段の顯著なくびれを有し、その段上には押捺による刺目が施文されている。文様帶は1段であり、格子状の文様のみにより構成されている。格子状文の交叉部には不規則に円形竹管による刺突文が押捺されている。口唇部は内削げ状に整形されている。また127の口縁部に補修孔がみられる。以上の土器のうち118、124は地文である条痕文を入念に磨り消した後に格子状文が施文されているが、他は地文をそのまま残している。

126は口縁部に無文帶を広くもち、口唇部が丸みを帯びている。縱位区画状文はみられず、一定の間隔をもつ数条の沈線を1単位として斜位に走らせ、隣り合う単位と直角に交わるよう施文されている。また地文が顯著に残っている。

120は口縁がかなり外反し、口唇部は丸みを帯びている。くびれは1段と思われ、くびれ部は粘土を盛り上げており突き出ている。文様は口縁から浅く幅の広い押し引きによる垂下した文様が等間隔に施され、その上に円形竹管による刺突文が押捺されている。

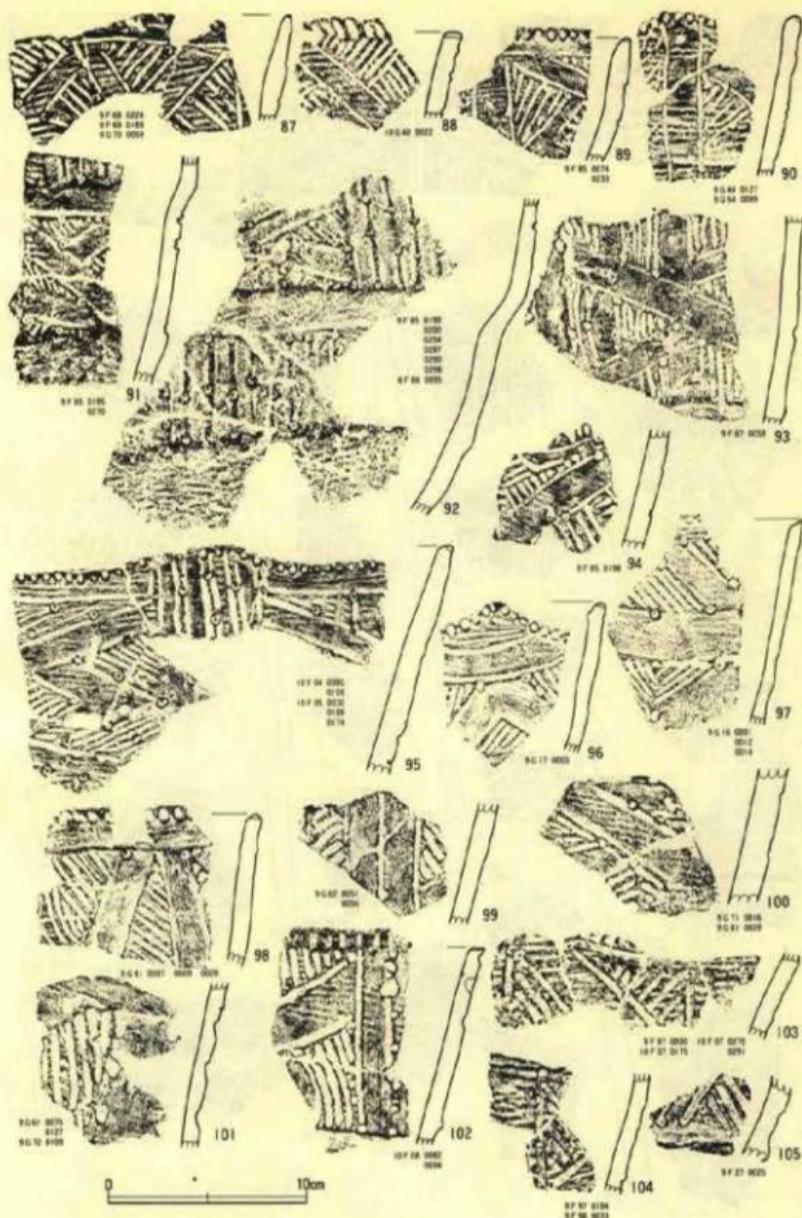
C a 種 (第32図146～152、第37図258、259、第38図264、第39図265 図版25 30、31)

146～152、265は充填文が沈線によるものである。146～148は2段のくびれを有し、文様帶は垂下する複数の縱位区画状文とタスキ状を基調とした横位区画状文から成る。146、148では上段と下段の文様構成は、ほぼ同様と考えられるが、縱位区画状文の位置は一致していない。

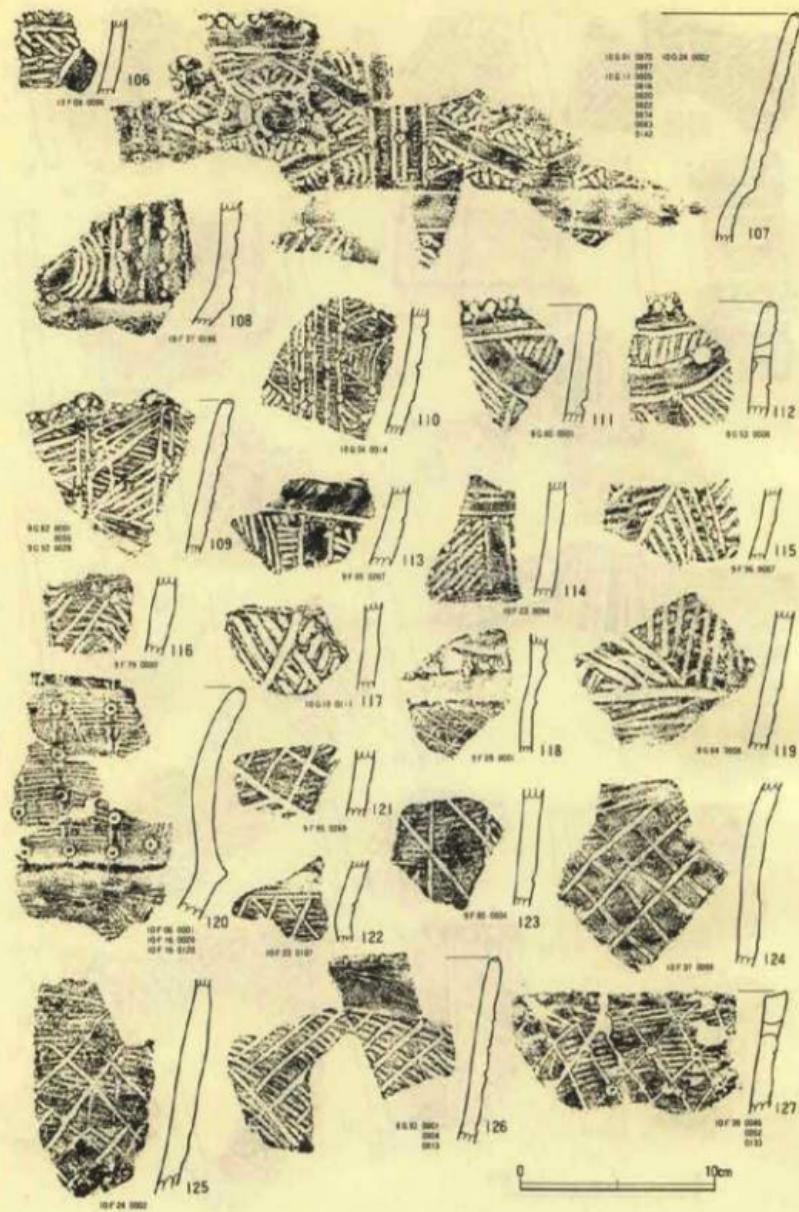
152は太い沈線による充填文が雑に施文されている。265は完形に近く復元できた資料で、文様構成などがよく把握できる資料である。口縁は4つの舌状の突起をもち波状を呈する。胴部は2段のくびれを有し、2段の文様帶をもつ。文様帶の幅が広いため器形は縱長の円筒形に近いものとなっている。2つの文様帶の上部には細隆起線文が横にはしり、その上に刺目が押捺されている。文様構成は上段、下段ともほぼ同様のものとなっており、波頭部から3条の縱位区画状文が垂下し、横位区画状文は直線的に描出されたものと曲線的に「へ」の字状に描出されたものとにより構成されタスキ状を基調とし、さらに細かな区画がなされている。

C b 種 (第31図139～145、第32図153～166、第38図 図版24、25、30)

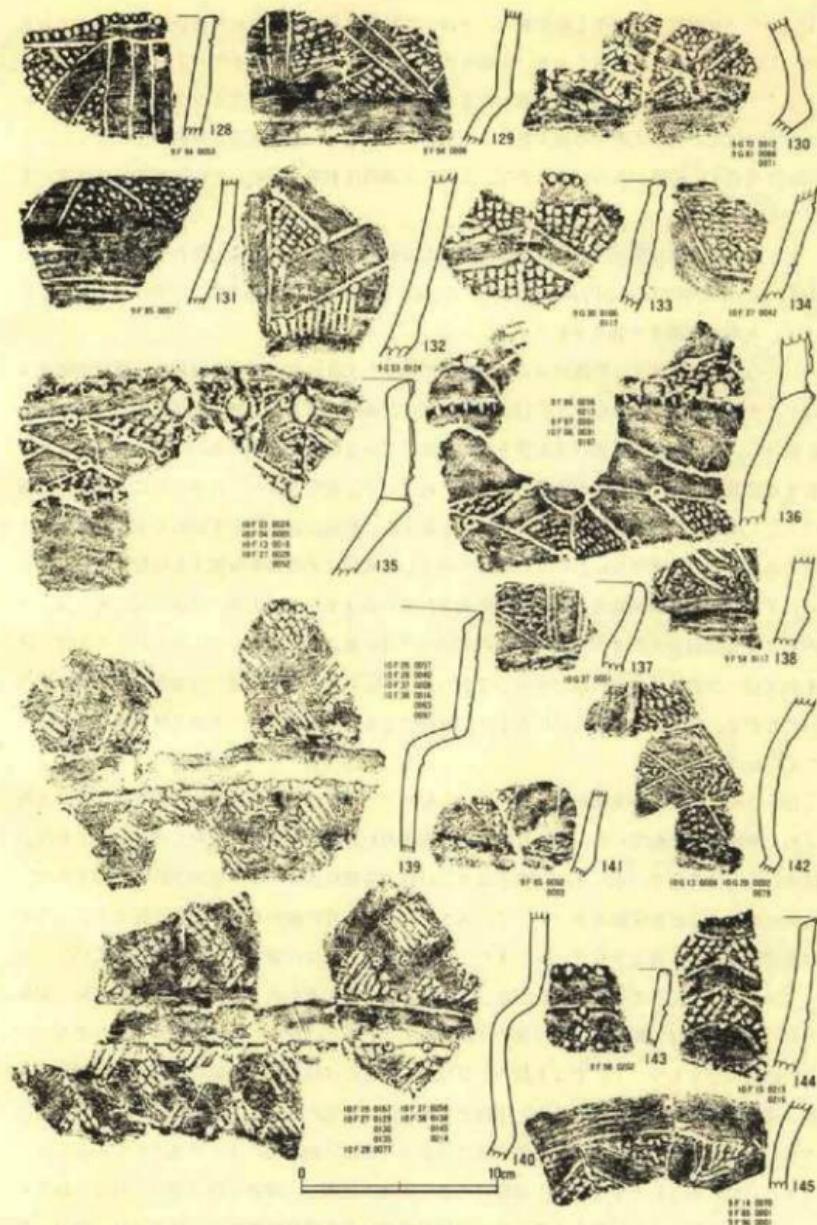
153～166は充填文が沈線によるものであり、139～145、261は押し引きによるものである。



第29図 B地点第2群田類土器



第30図 B地点第2群陶類土器



第31図 B地点第2群田類土器

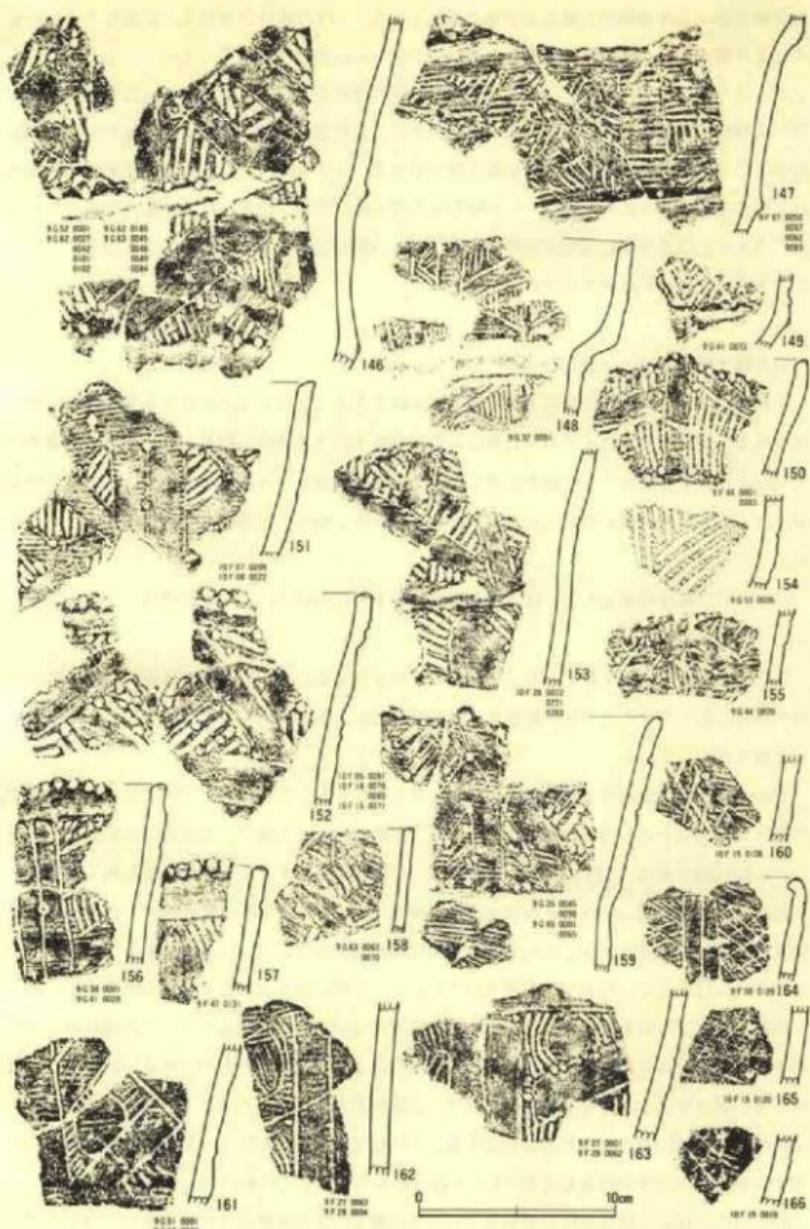
153はくびれが緩く無文帯も幅が狭い。下段の文様帶に弧状に描かれた横位区画状文がみられる。155は区画状文が粗雑であり、小破片のため全体の文様構成は不明であるが、浅い沈線によるタスキ状を基調としたものと思われるが沈線がとぎれたり刺突文も交叉部からされている。また区画状文と充填文が同様施文具によるものと考えられ、その区別が不明瞭となっている。156は充填文に特徴がみられるもので、上位の区画内は刺突文状の、下位区画内は沈線文の充填文である。

157、161～163は横位区画状文内に円形または弧状の区画状文が描出されているもので、157、162、163は充填文が同心円状に施文されている。161は円形の区画状文に直角に交わるように上下、左右の充填文が施文されている。

158、159は区画状文に特徴がみられるもので、158は口縁部の小破片で、横位区画状文はタスキ状に施文された中をさらに小さく折状に区画されており、無文部には顕著な磨り消しが施され、それにより区画状文が消されてしまっている部分が多くある。そしてタスキ状の斜行する沈線に沿って刺突文が連続して押捺されている。充填文はヘラ状の工具による太い沈線である。159は口縁に突起をもち緩い波状を呈する。胴部には1段のくびれを有し文様帶は1帯である。その文様構成において口縁より垂下して縱位に文様帶を分割する縱位区画状文はみられず、斜行する区画状文のみにより区画されている。またこの土器の区画状文、充填文、区画状文交叉部刺突文がすべて同様の肉の薄いヘラ状の施文具によるものと思われるもので、区画状文はヘラ状工具の肉の部分を用いて引いたと考えられ、充填文はヘラの部分をそのまま用いたもので、刺突文は他に見られるような押捺によるものではなく、ヘラ状工具を押しひねつづくられている。

160～166は格子状の文様が施文されているもので、いずれも縦位・横位区画状文により区画された中に施文されている。160は雑な施文方法のため格子状文も乱れたものとなっており、区画内からはみ出している。164は格子状文と斜行する横位区画状文が併用されているもので、3条の垂下する縱位区画状文によって区画された右側は目の細かな格子状文が施文され、左側は横位区画状文が施文されている。またこの土器の口唇部は内側にやや折り返されている。

139～145、261の充填文は押し引き、またはそれに類するものである。139、140は同一個体土器であり、口縁は顕著な内削け状の平縁を呈する。胴部は屈曲の強い2段のくびれを有し、2段の文様帶をもつ。139では上段のくびれ部の断面には口縁部と胴部の接合状態が観察できた。文様帶の文様構成において上、下段とも縦位区画状文がみられず、上段はタスキ状に描出された横位区画状文が、下段には鋸歯状に描出され横位区画状文により構成されている。さらにそれらに区画された中を158と同様に小さく折状に区画し、顕著な磨り消しが行なわれている。142は2段目の文様帶の土器片で、細い起線文による縦位区画状文が描出され、横位区画状文は半截竹管（3截）により格子状に施文されている。充填文は相い対する区画内に施文さ



第32図 B地点第2群Ⅲ類土器

れ半截竹管による連続的な刺突文が施こされている。144は横位区画状文が鋸歯状と弧状のものにより構成され、無文部に顕著な磨り消しが施され区画内にまで至っている。261は口縁を上から見た形状が方形を呈し、各コーナーに舌状の突起をもつ、胴部のくびれは1段で、文様帶の文様構成は縦位区画状文が各コーナー部では、突起部から垂下する1条の貼り付けによる隆起線文により描出され、さらに隆起線文間の中央部には3条の沈線による縦位区画状文が施され文様帶を概に8分割している。なお隆起線文の上には刻みが加えられ、3条の沈線のうち中央部のものには等間隔に刺突文が押捺されている。横位区画状文はタスキ状を基調とし、さらにその内部を細かく区画されている。

第IV類土器（第33～35図167～236 図版26～28）

本類の土器は、口縁部より垂下する縦位区画状文とタスキ状または鋸歯状を基調とした横位区画状文、及び充填文によるII・III類にみられた基本的文様構成が崩れ、区画状文、充填文の省略などが多く見られ、また新たに押し引きによる区画状文や指頭またはそれに類似した施文具によるなぞりの手法が用いられたものなどが現われ、個々に特徴をもった文様構成をもつものが多くのなる。

167～187は細隆起線文もしくは微隆起線状文による区画状文により文様構成がなされているものである。

167～169は同一個体土器であり、2段のくびれを有する。上、下段の文様帶はほぼ同様の文様構成によるものと考えられ、鋸歯状の細隆起線文による区画状文を横に2列はしらせ格子状の文様を描出している。

170～174は横位区画状文が曲線的に描かれたものである。170～172、174は同一個体土器で、口縁は緩い波状を呈し内削げ状となっている。胴部くびれは1段で、文様帶は1帯となっている。縦位区画状文は、174に見られるように、口縁から垂下する1本の太い隆起線文とそれを直径とした2つの同心円状の区画状文により構成されている。そして隆起線文の中央部には指頭状工具による圧痕文が加えられている。横位区画状文は171、172にみられるようにコンバス文状の文様構成となっており、充填文はそれに沿って押し引き文により施文されている。そして円形竹管による刺突文が規則性をもって押捺されている。この刺突文すべてに同様の2ヶ所の小さな傷痕がみられることから、1つの施文具により押捺されたものと考えられる。この傷痕をもつ刺突文は173にも押捺されており、土器胎土も同じものであることから、この2つの土器は、同時期に製作されたものと言える。173は文様帶の幅も広く、胴部のくびれも緩いもので、縦位区画状文の構成も前者のものと違ったものとなっている。

175～181、184、185は微隆起線状文または隆起線文により区画状文が施文されているもので、その文様構成において縦位・横位区画状文の区分は不明瞭なものとなり、また充填文は全く施

文されていない。

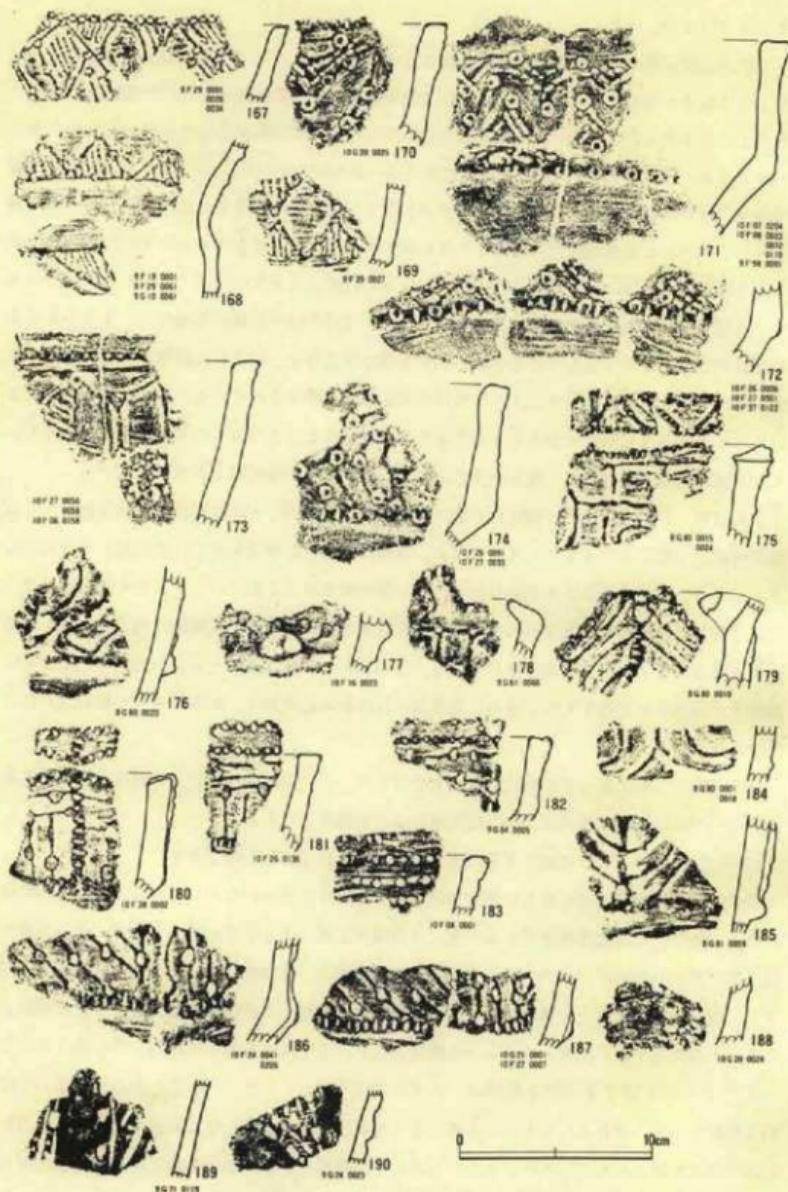
177はくびれ部の土器片で、隆起線文による縦位区画状文とくびれ部の交叉部に指頭状工具による圧痕文が施され、横位区画状文には微隆起線状文による曲線的なものが施文されており、その上に從来見られた竹管による刺突文の代わりにハイガイの殻頂部分を押捺したものが加えられている。178の口縁部内側に突き出た片口状の突起がみられる。180、181は同一個体土器であり、緩い波状口縁を呈し波頂部から刻み目をもつ太い隆起線文が縦位区画状文として施され、これに対して横位区画状文としては口縁に沿ってはしる2本のものとそれに等間隔に垂下する微隆起線状文により構成されている。さらに区画状文交叉部にはハイガイまたはサルボウの貝殻頂部による圧痕文が押捺されている。186、187も同一個体の土器片で、4条からなる縦位区画状文とこれに集合するように斜行する横位区画状文とにより文様構成され、そしてその上には、ハイガイまたはサルボウの殻頂部の圧痕文が押捺されている。この土器の器形においては、上面から見た形状が方形を呈するものと思われる。また破片のため不明ではあるが、くびれ部の無文帯において、縦位区画状文の延長上に1本の隆起線文が垂下している。

175、176、179、185は同一個体の土器と思われ、176、179、185は縦位区画状文部、175は横位区画状文部にあたるものと考えられる。口縁は発達した波状を呈し、波頂部には穿孔がなされている。この波頂部より刻み目をもつ太い隆起線文が1本施され、これを直徑として3つの同心円状の区画状文が施文されている。横位区画状文は、縦横に直線的に施され、さらにその中を曲線的なものにより細分されている。この175の口縁は厚みをもち口唇部は内削げ状に調整され鶴冠状の突起をもつ、さらに從来見られた刻みに代わり、刻み目をもつ隆起文が貼り付けられている。

182、183は口縁に沿って平行に区画状文がはしり、その上には竹管による刺突文が押捺されている。182は微隆起線状文、183は沈線による区画状文である。

189～198、200～210は沈線による区画状文が施文されているものである。

191～197は区画状文間に新たな施文技法であるなぞり手法が行なわれている。191、192は同一個体土器で、口縁は波状を呈し波頂部には指頭状工具による圧痕が施こされている。文様帶は1帯と思われ幅の広いものとなっている。文様構成は、波頂部より2条の縦位区画状文が垂下し、横位区画状文はその構成において、文様帶の上半部と下半部に分離できる。上半部は、2本の区画状文が緩く曲線を描きながら横にはしり、下半部は鋸歯状の区画状文が施文されている。この上半部と下半部との境は、わずかではあるがくびれしていることから、從来の2帯の文様帶が1つに合わされたものとも考えることができる。こうした区画状文内にさらに円形の区画状文が加えられているが、大方のものは、区画内をさらに細分する区画状文は省略され、押し引きによる充填文が鋸歯状に配されている。この充填文間にはなぞり手法が加えられている。また区画状文交叉部の刺突文は、不規則に押捺されている。193、194、196もほぼこれと



第33図 B地点第2群IV類土器

同様の文様構成によるものと思われるが充填文は沈線によるものである。194の口縁はかなり強く外反している。193はなぞり手法が顕著で、区画状文がかなり済み、また充填文は細い竹管を2連にして引いたものである。また区画状文交叉部の竹管は区画内、外にも不規則に押捺されている。195は2段のくびれを有し、上段文様帶は弧状、円形状の区画状文により構成され、下段文様帶は直線的な継位・横位区画状文の比較的明確な文様構成による。197は充填文に区画によって多截竹管による刺突文と串状工具による刺突文が施文されている。

198は口縁から垂下する区画状文が省略され、押し引きによる充填文のみにより描出されている。

200は文様帶の幅が広く、文様構成は波頂部間の中央部に口縁からくびれ部に垂下する2条の沈線とその中央に押し引きによるものが加わる3条の継位区画状文により文様帶を縦に5分割している。その各区画内は帯状の横位区画状文がはしり、その上部は波頂部より垂下するものと半円形状の区画状文により文様構成がなされ、下部は鋸歯状の文様が施文されている。これは191に見たように1つの文様帶に從来見られた上段、下段の文様構成が集約されたものと考えられるものである。

202、203は同一個体土器であり、口縁は極端に内反し、胴部には緩いくびれを有している。区画状文は沈線による2条の口縁部から垂下するものがほぼ等間隔に施文されており、横位にはしるものは見られない。充填文は押し引きによるもので、区画状文に沿って垂下するように施文されている。なお203には1条の沈線による充填文が見られる。

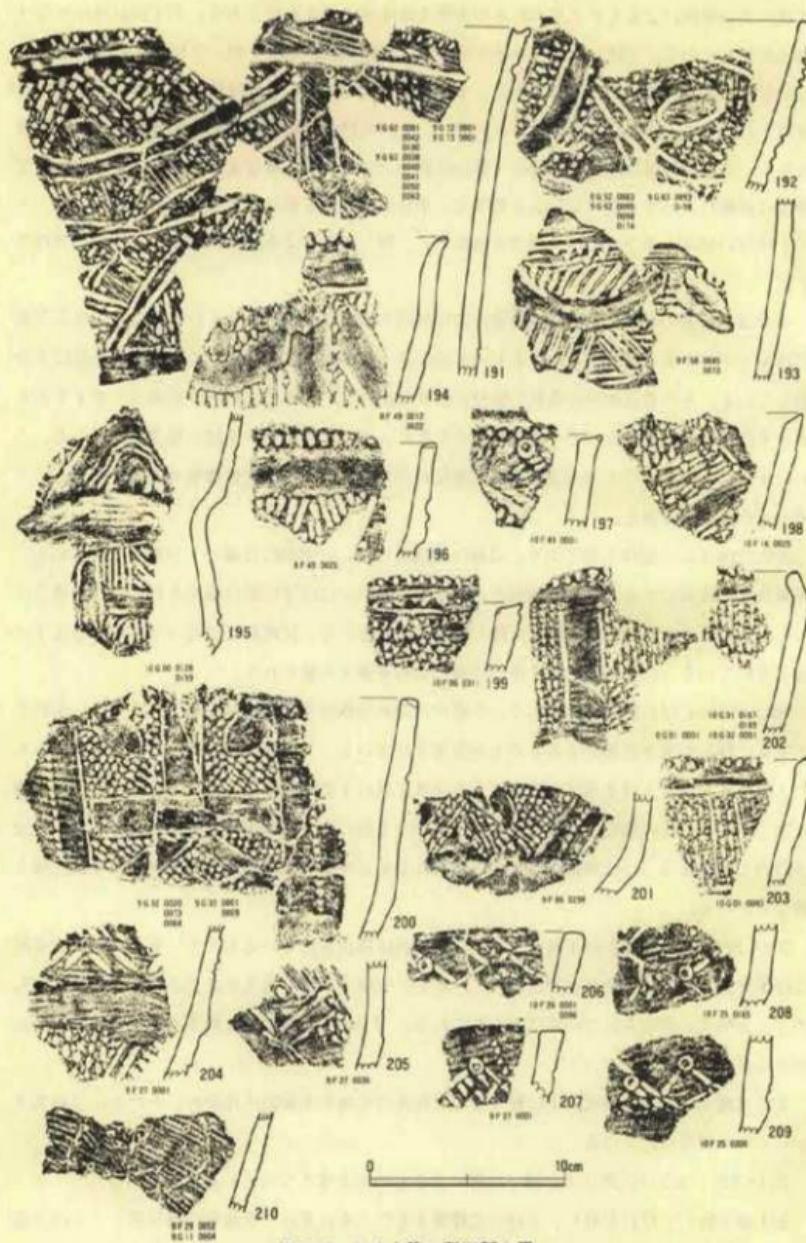
204、205はくびれ部の破片であり、小破片のため全体の文様構成は不明であるが、いずれも充填文に押し引きと沈線によるものとが併用されている。204は2段の緩いくびれを有するものと思われるが、上段文様帶の下部にもヘラ状工具による調整によりわずかながらくびれを作り出している。この部分には太い沈線が2本づつ1対になって鋸歯状に施文されている。上段、下段の文様構成は、ほぼ類似したものと思われるが、充填文は区画によって押し引き、沈線と異なる。

206～209は区画状文が格子状、もしくは鋸歯状に描出されているもので、それぞれの交叉部には規則性をもった刺突文が押捺されているが、充填文は複数の施文法による押し引きによるもので、充填文が省略されている区画も見られる。また207、208には垂下する刺突状の文様が加えられている。

210は地文である条痕文の上に軽くなじた程度の沈線が曲線的に描かれ、その上には刺突文がいくつか押捺されている。

211～220、223は区画状文が細い沈線によるものが主体となっているものである。

211は2段のくびれを有し、2段の文様帶をもつ。それぞれの文様帶の幅は狭く、上段文様帶は、縦に4分割する口縁から垂下した隆起線文による継位区画状文がそのまま胴部くびれ部



第34図 B地点第2群IV類土器

を横にはしる。この隆起線文の上にはヘラ状工具により刻み目が頗著に押捺されている。隆起線文により区画された内には、細い沈線による鋸歯状を基調とした文様が施文され、充填文は竹管による押し引きである。また区画状文交叉部の刺突文は、ヘラ状工具を押ししねて施文されている。下段文様帶の文様構成は不明であるが、上段と同様のものと思われる。

212、213は縱位区画状文が隆帯によるものである。212はその上に指頭状工具による圧痕文が加えられ、横位区画状文は、ヘラ状工具を軽く押し引いたものであり、充填文は省略されている。213は2条の隆帯が施文され、竹管と指頭状工具による圧痕文が加えられている。横位区画状文は、2条の隆帯の内側ではヘラ状工具による太い沈線によりタスキ状に施文され、その外側では細い沈線により施文されている。充填文は串状のもので軽くつづいた程度のものがみられる。

214~217は同一個体土器であり、口縁は内削げ状でやや外反する。胴部には2段のくびれを有する。縱位区画状文は3条の細隆起線文が口縁から垂下し、横位区画状文は細隆起線文と細い沈線とにより構成され、細隆起線文はタスキ状、鋸歯状に配され、細い沈線によりさらにその区画内を紡錘状に区画している。区画状文交叉部の刺突文は不規則である。充填文は沈線による。

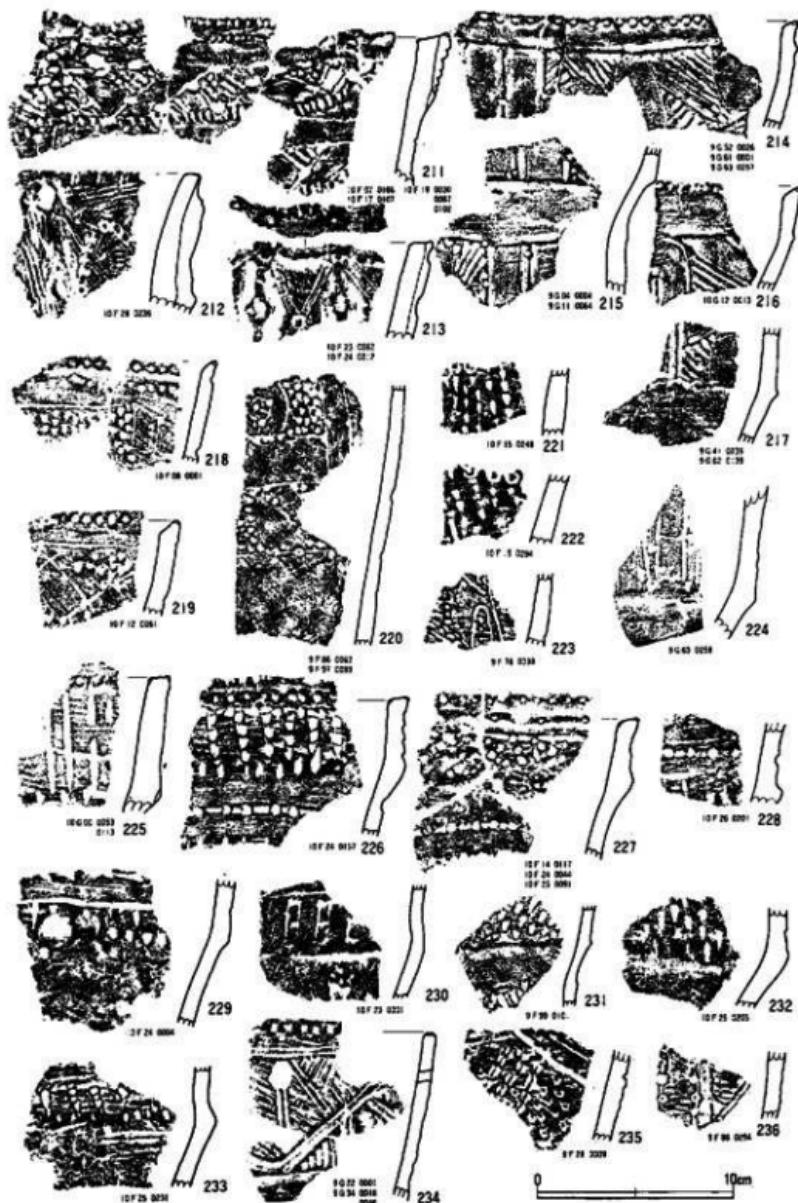
218、220は同一個体土器であり、胴部にくびれが見られず、直線的な器形をなしている。口縁は内削げ状で、口唇部と口縁部に連続刺突文が施文されている。文様帶の幅は広く、3条の縱位区画状文が垂下し、これに直角に接する帯状の横位区画状文と、それにより区画された内に円形、紡錘状の区画状文が施文されている。充填文は竹管による刺突文である。またこの土器の器面調整の条痕文は非常にきめ細かなものである。

224、225、230は区画状文が垂下する沈線のみによるものであり、224、230は平行する沈線とその間に竹管による刺突文が加わったものが、等間隔に施文されている。225は太い沈線により、垂下する沈線と「U」の字が向い合ったような文様とにより構成されている。

199、221、222、226~229、231~233は区画状文が押し引き文によるものである。

221、222は円形竹管による刺突文が横位に配され、そこから雨垂れ状に押し引き文が施文されている。

226~228、229は同一個体土器と考えられるもので、226、227は上段文様帶、228、229は下段文様帶になり、いずれも幅の狭いものとなっている。226は口縁部に間隔をもつ連続刺突文が施文されそれを基点として垂下する押し引きによる文様が施文されている。227は口縁部に横にはしる押し引き文が施され、さらにタスキ状、鋸歯状を基調とした区画状文が押し引きにより施文され、充填文もそれらと同様の工具によるものと思われる押し引き文により施文されている。このように上段文様帶では、2つの異なる文様構成によるものと思われるが、その相互関係は把握できない。一方下段文様帶は横にはしる平行した2条の沈線文にはば等間隔に刺



第35図 B地点第2群IV類土器

突文が押捺された単純な文様構成となっている。またくびれ部には、指頭状の工具による圧痕文が施文されている。

234は区画状文が半截竹管による平行沈線文によるものであり、横位区画状文が鋸歯状に描出されている。またこの土器に補修孔がみられる。

235は区画状文が沈線により施文され、さらにその内を2連の竹管による押し引き文により区画されており、区画状文交叉部の刺突文はみられない。充填文は円形竹管の刺突文による。

第V類土器（第36図237～253 図版29）

本類の土器は押し引き文、なぞり手法により四線文、刺突文、沈線文のうち单一の文様要素のみを用い文様が描かれているものであり、区画状文は文様帯を縱位、横位に区画するといった本来的性質を失い單なる文様として描出されている。区画状文交叉部の刺突文と充填文においては、全てに省略されている。

237～243、247は押し引きにより文様が描出されているものである。

237は胴部に2段のくびれを有し、上段文様帯は平行にはしる2列の押し引き文により口縁から垂下するものと弧状に描出されているものとにより構成され、下段文様帯は2列の押し引き文が垂下するものと横にはしるものとにより構成されている。

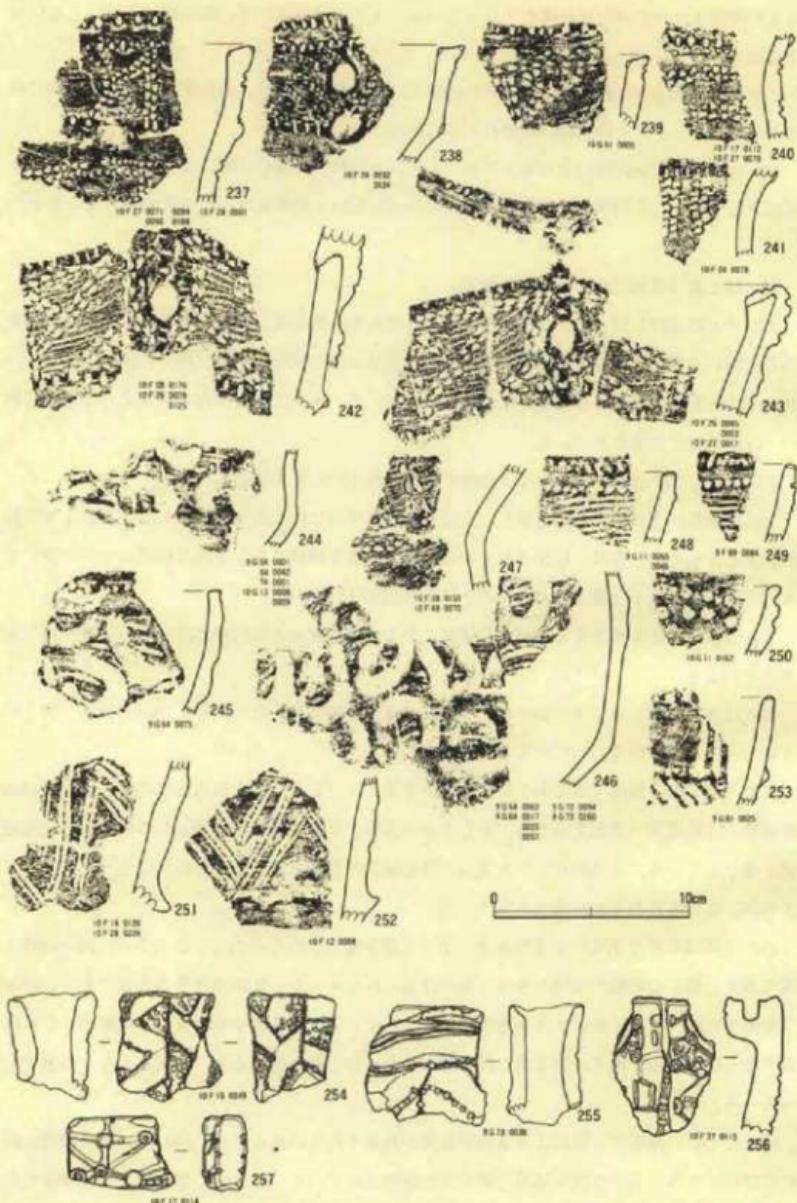
238は波頂部より垂下する指頭状の圧痕文をもつ隆起線文と蛇行状に描かれた2連の押し引き文とによる。

240は2連の押し引き文が横位に、241では縱位に施文されたもので、240では押し引きの方向が途中で180度変わっている部分がみられる。

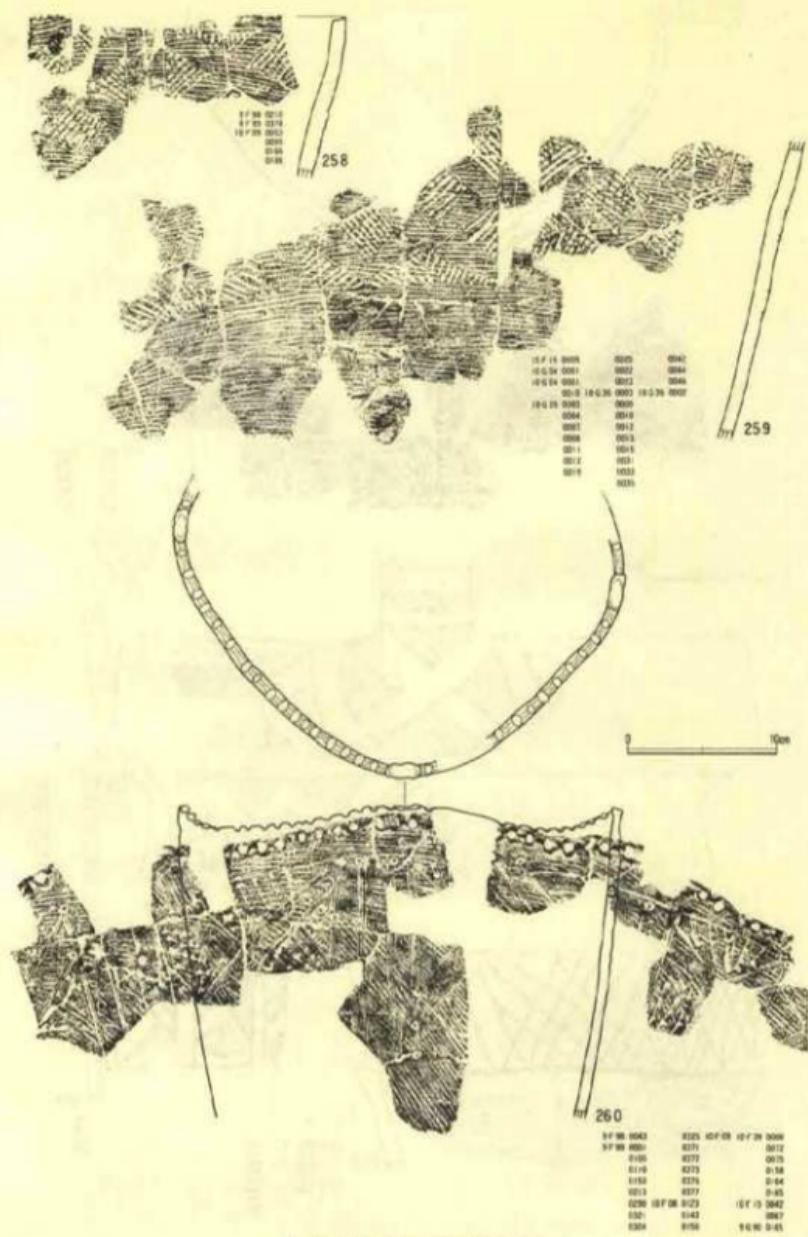
242、243は同一個体土器であり口縁は波状を呈している。242の波頂部は把手を有し、243の波頂部には鶴冠状の突起を有する。そしてその部分より指頭状の圧痕文と刺み目をもつ隆起線文が垂下している。2連の押し引き文は、隆起線文の周囲を巡るものと口縁に沿ったものとタスキ状に描出されたものが施文されている。

244～246はなぞり手法による四線文により文様が施文されたもので、この3点は同一個体土器であり、他にこの種の文様をもったものは見られなかった。比較的薄手の土器であり、四線は指頭またはヘラ状工具により満巻状に施文されている。口縁はやや内反し、胴部のくびれは頗著なものである。地文の磨り消しは表裏に入念に行なわれているが、器面はかなり凸凹をもっている。

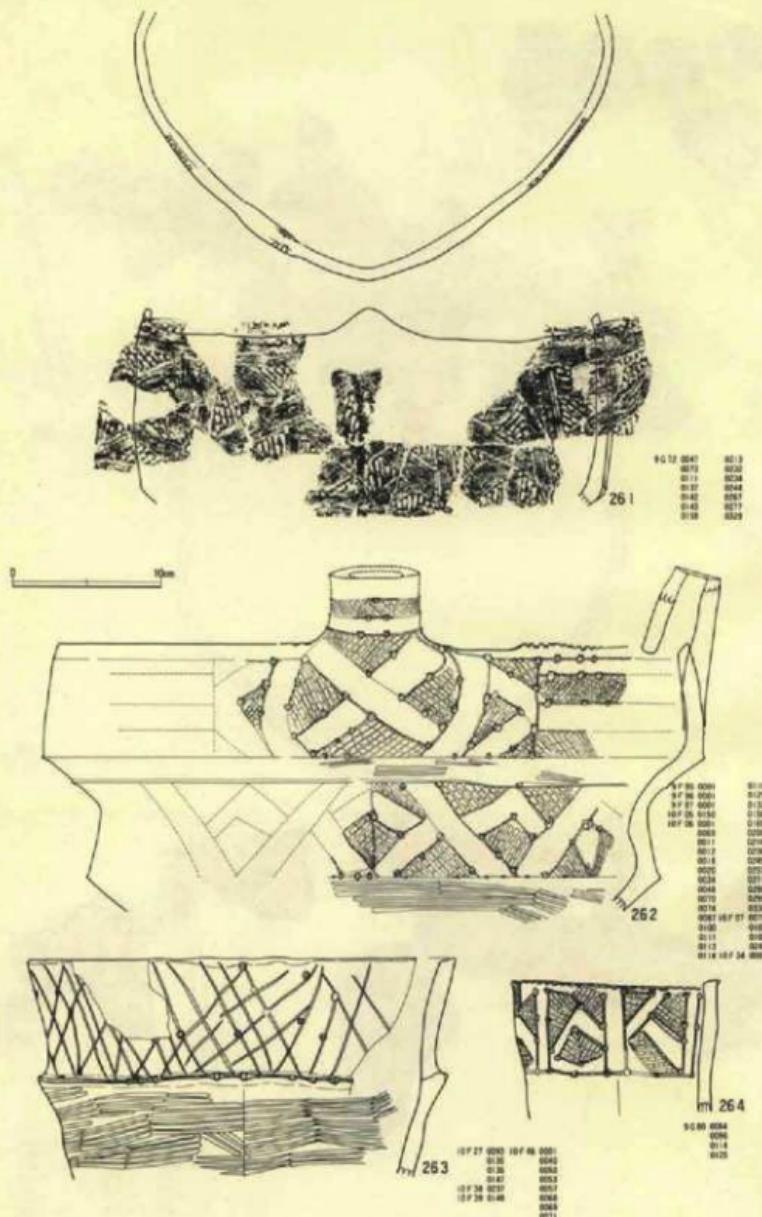
248～250は口縁部に竹管による連続刺突文が施文されているもので、248、249は口縁部に緩いくびれをもち、そのくびれ部分に刺突文が押捺されている。そしてくびれより下には横方向の条痕文が施文されている。250は円形竹管により、2段に押捺されているもので、口唇部は丸みを帯びている。



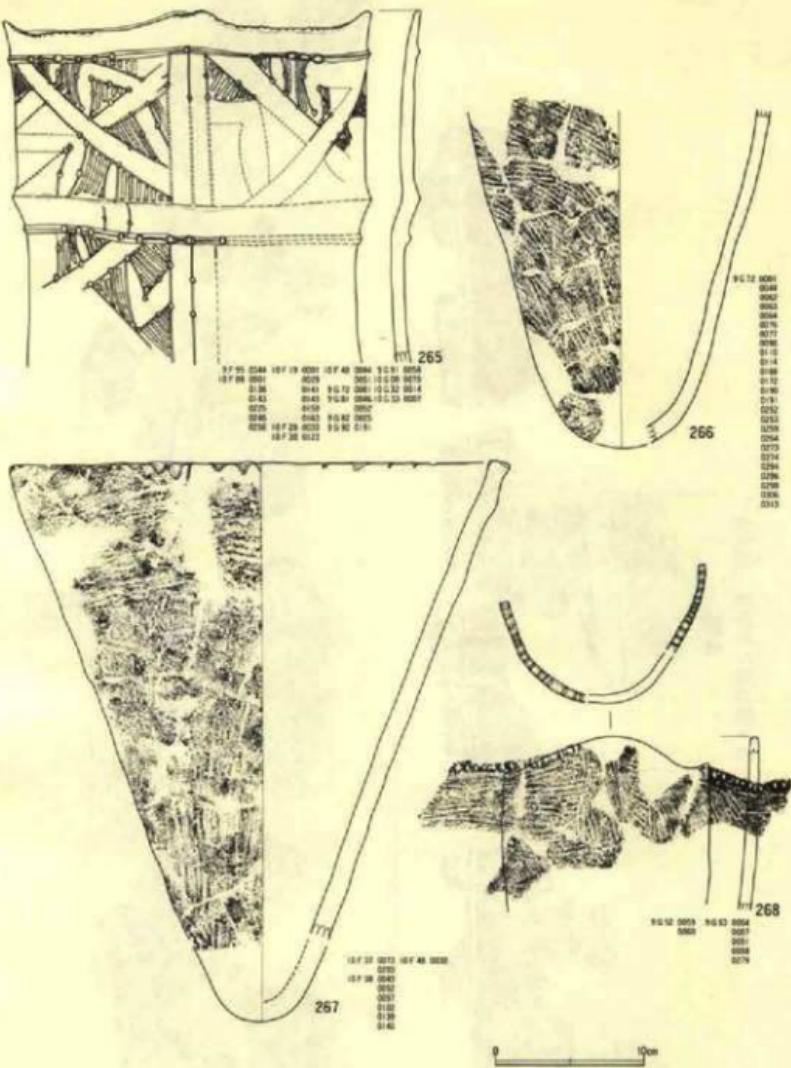
第36図 B地点第2群V類土器および把手



第37圖 B地点 2群田類土器

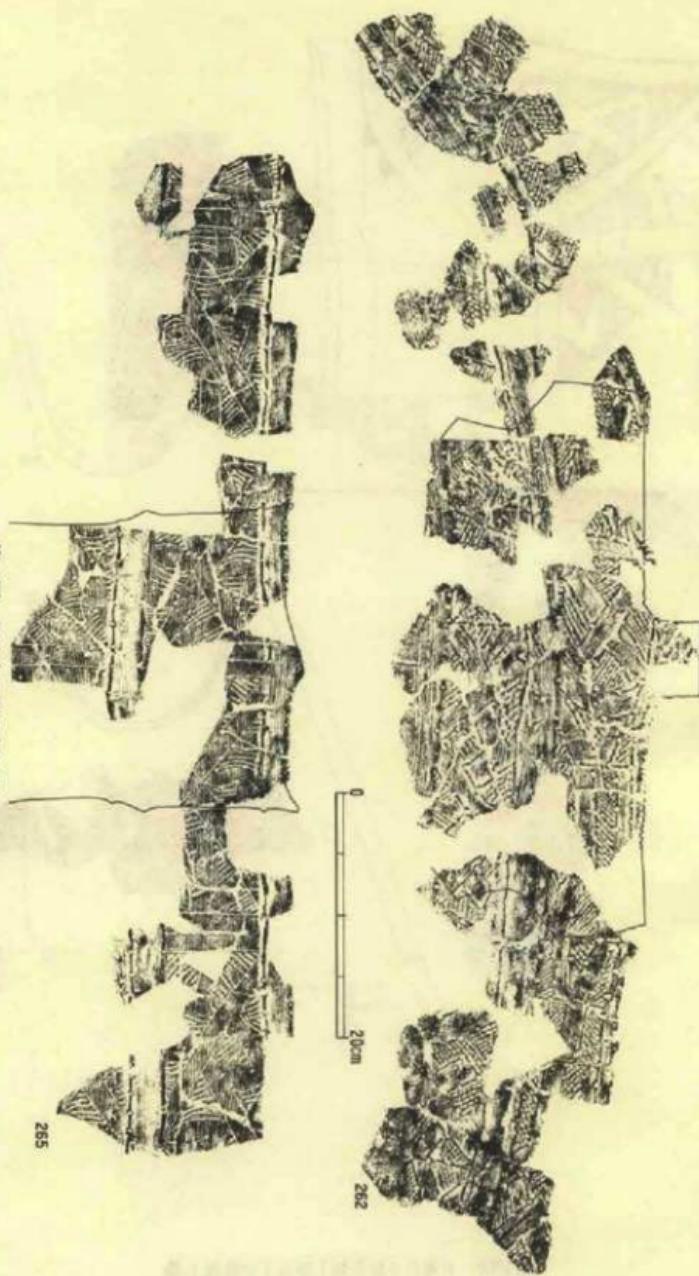


第38図 B地点2群田類土器



第39図 B地点2群III類土器および粗製土器

第40図 B地点2群山類土器



251、252は半截竹管による平行沈線が鋸歯状に幾本か平行して施文されているものであり、いずれも胴部のくびれは顕著なものとなっている。252には沈線の間に凹線が施文されている。

把手（第36図254～257 図版29）

把手は円筒状の比較的大形で口縁の内側に付けられたもの（254、255）と波状口縁の波頂部に粘土を盛り上げ成形されたもの（256、257）とに大きく分けられる。施文される文様は口縁部、胴部に施文される文様要素・構成の縮小化されたものであり、特に文様構成において相互関係をもつものである。

粗製土器（第39図266～268、第41、42図1～50、第43図1～20 図版31～34）

本遺跡より出土した土器の大半は第2群土器であり、その中でも条痕文のみにより器面調整されているいわゆる「粗製土器」と呼ばれるものが主体を占めている。条痕文は、ハイガイ、サルボウなどの凸凹をもつ貝殻の内側の縁辺を施文具として、土器の表裏面に縱、横に引かれたもので、施文具の大きさにより太い条痕、中位の条痕、細い条痕に分けられる。粗製土器の装飾土器との大きな相違点は、器形において胴部にくびれをもたず、底部は尖底となるものが大半を占めている。この粗製土器の特徴がよく把握できる口縁部、底部についていくつかに分類し説明を行う。

口縁部

口縁は平縁のものが大半を占めているが、268、22のように波状を呈するものも少數みられる。口唇部には竹管やヘラ状工具による刻み目が施文されたものが多い。これら口縁部、口唇部の断面形態により6つに分類することができる。

1～11は口唇部が丸みを帯びたものである。10、11には補修孔が施されている。

12～22は口唇部が内削げ状に調整されているものである。22は口唇部の両端に刻みが施文されている。13には補修孔が施されている。

23～30は口唇部の内削げ状の調整が顕著に施され、さらに表面からも調整が行なわれているため口唇部の断面形が尖頭状になっている。

31～40は口唇部が丸みを帯び内反しているものである。40には補修孔が施されている。

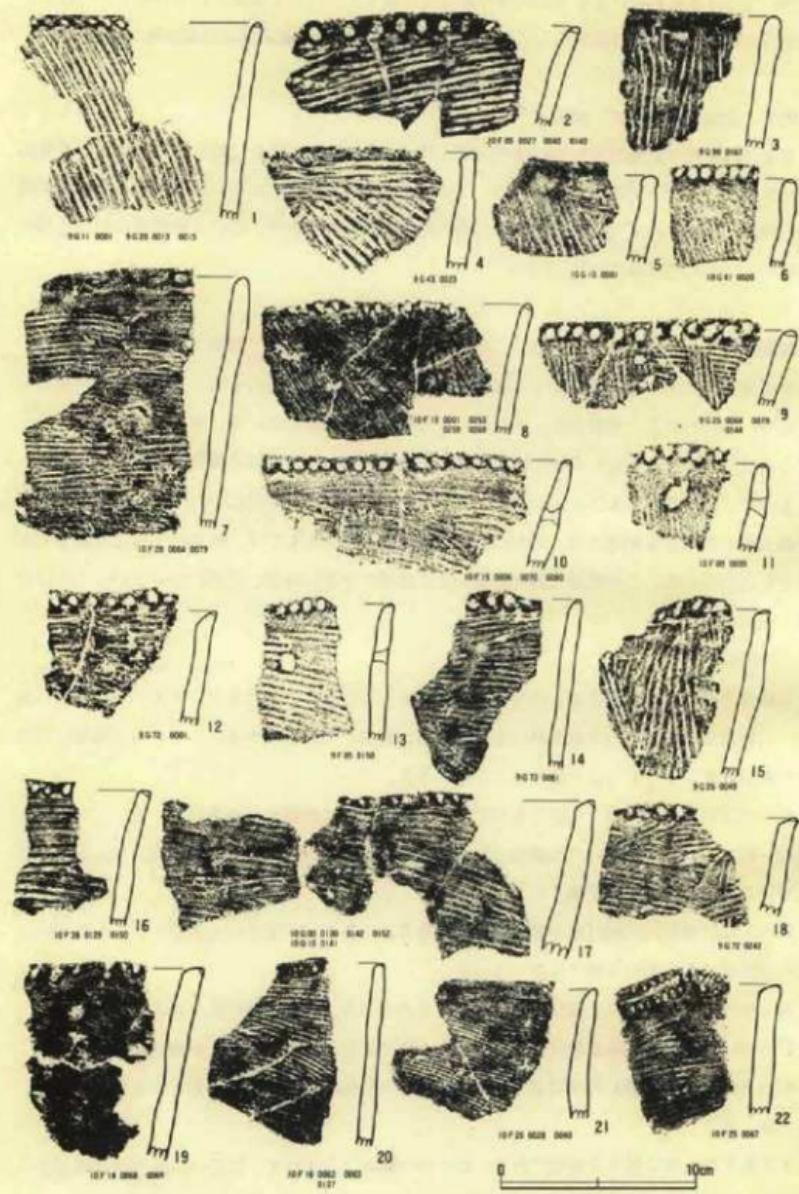
41～46は口唇部が丸みを帯び外反しているものである。46には補修孔が施されている。

47～50は口唇部が緩い内削げ状に調整されその中央部には浅いくぼみを有するものである。

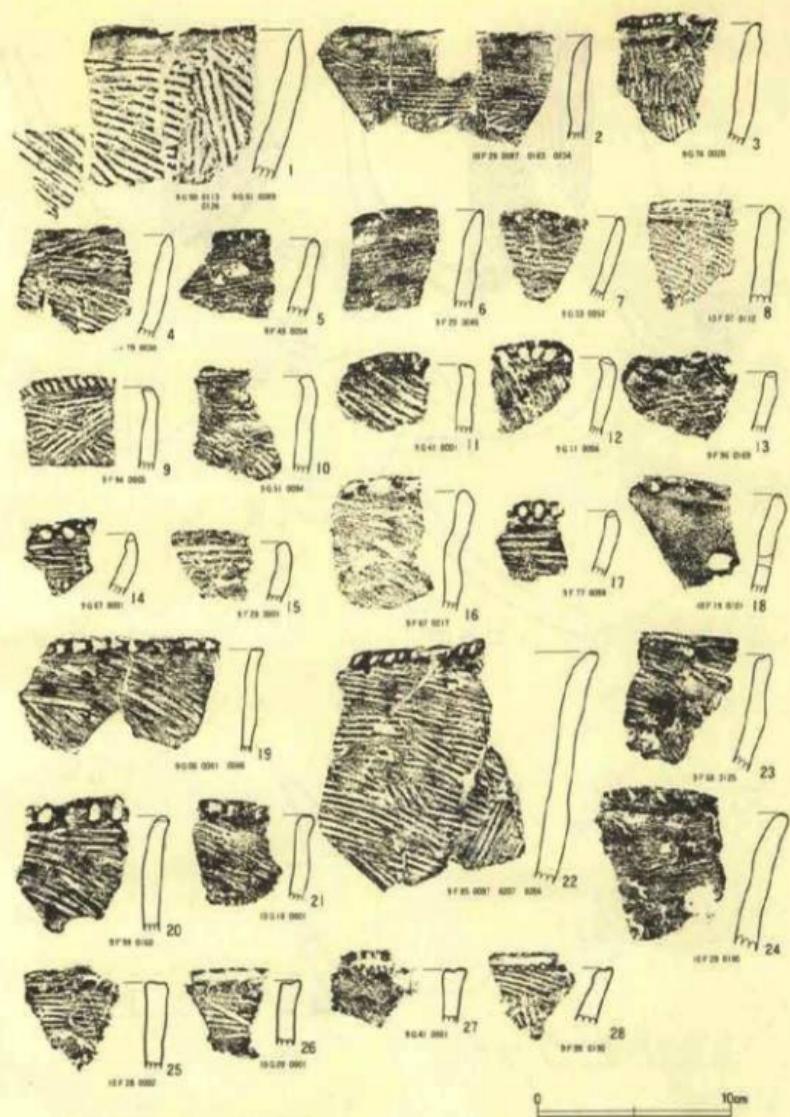
底 部

1は第1群土器に属する底部であり、胎土中に纖維は含まれず、器面には縱方向に顕著なへら削りによる調整が行なわれている。B地点ではこの土器以外に第1群の出土例はない。

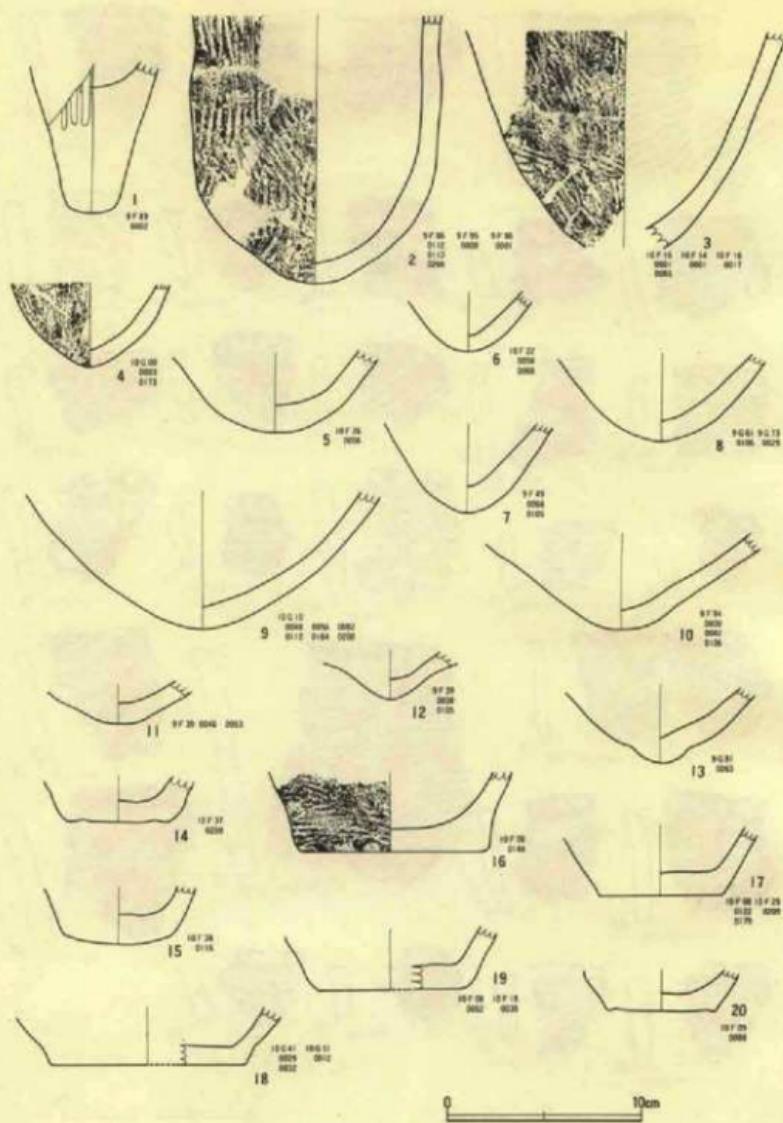
2～20は第2群土器に属するもので、尖底（2～13）と平底（14～20）に大別できる。尖底



第41図 B地点第2群土器口縁部(1)



第42図 B地点第2群土器口縁部(2)



第43図 B地点第1、2群土器底部

は胴部から緩く曲線を描きながらそのまま伸びるもの（266、267、3～9）と底部に緩いくびれをもつもの（2、10～13）とに分けられる。平底は底面がやや丸みを帯びたもの（14、15）と平坦なもの（16～20）とに分けられる。

第3群土器（第44図1～6 図版35）

本群は縄文時代前期後半に比定されるもので、胎土中に植物纖維を含有しないもの（1～4）とするもの（5、6）に分けられる。1、2は沈線文と押捺文により文様が施文されているものであり、1は波状口縁を呈し、口縁部には半截竹管による2条の平行沈線がはしる。胴部には口縁部より等間隔に平行沈線が垂下する。この沈線の頂部には半截竹管による押捺文が1つないし2つ施文されている。3、4は貝殻腹縁により、縱位方向の波状文が施文されている。5、6はRLの繩文が施文されているもので、5には斜行する沈線がみられる。

第4群土器（第44図7～29、第45図1～12 図版35、36）

本群は縄文時代中期に属するものを一括した。さらに3つに細分できる。

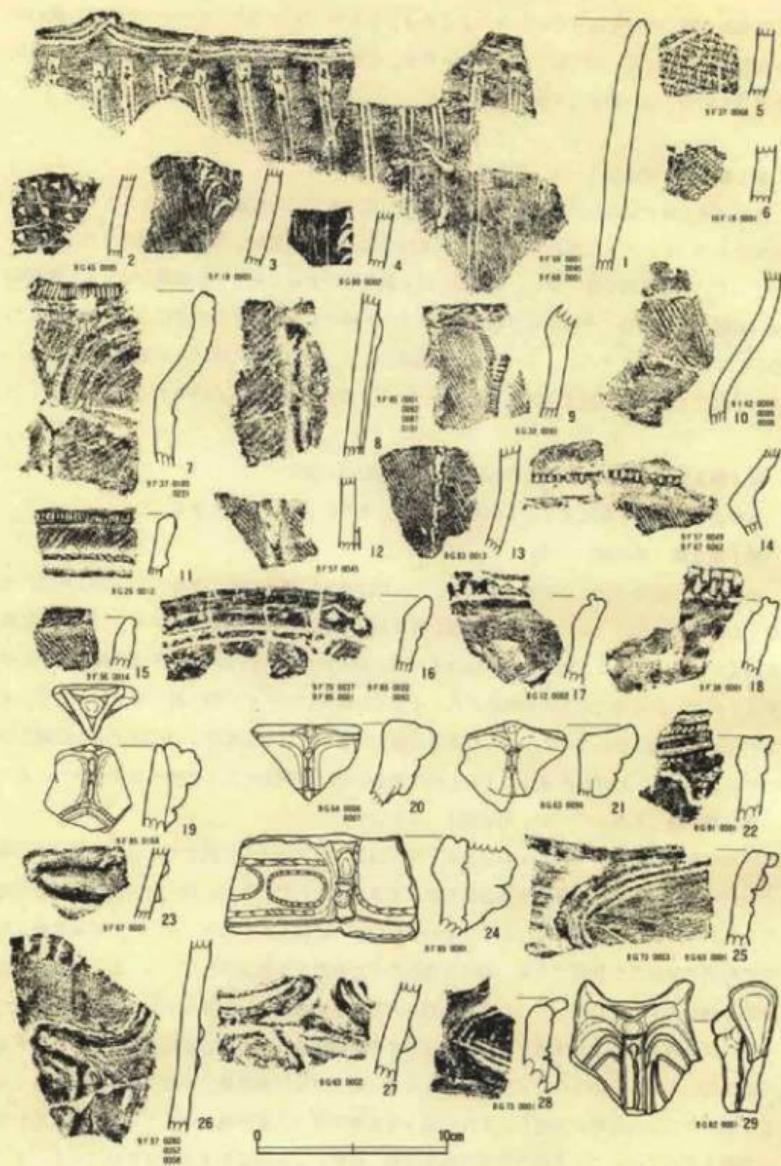
第1類土器（第44図7～18）

中期初頭に位置づけられるものである。7～16は地文に繩文が施文され、17、18は無文の土器で口唇部の内側に「コ」の字状の文様が施文されているだけである。7～9、12は胴部に隆起線文によるY字状文が地文され9にはその上に刻みが付けられている。7は口縁が波状を呈するもので、口唇部には刻みが付けられ、そして口縁部には円形竹管の押し引きによる3～4条の弧線文が施文されている。11、14は隆起線文が横にはしるもので、14にはその上に刻みが付けられている。13は結節繩文によるものである。16は沈線文により文様が施文されている。

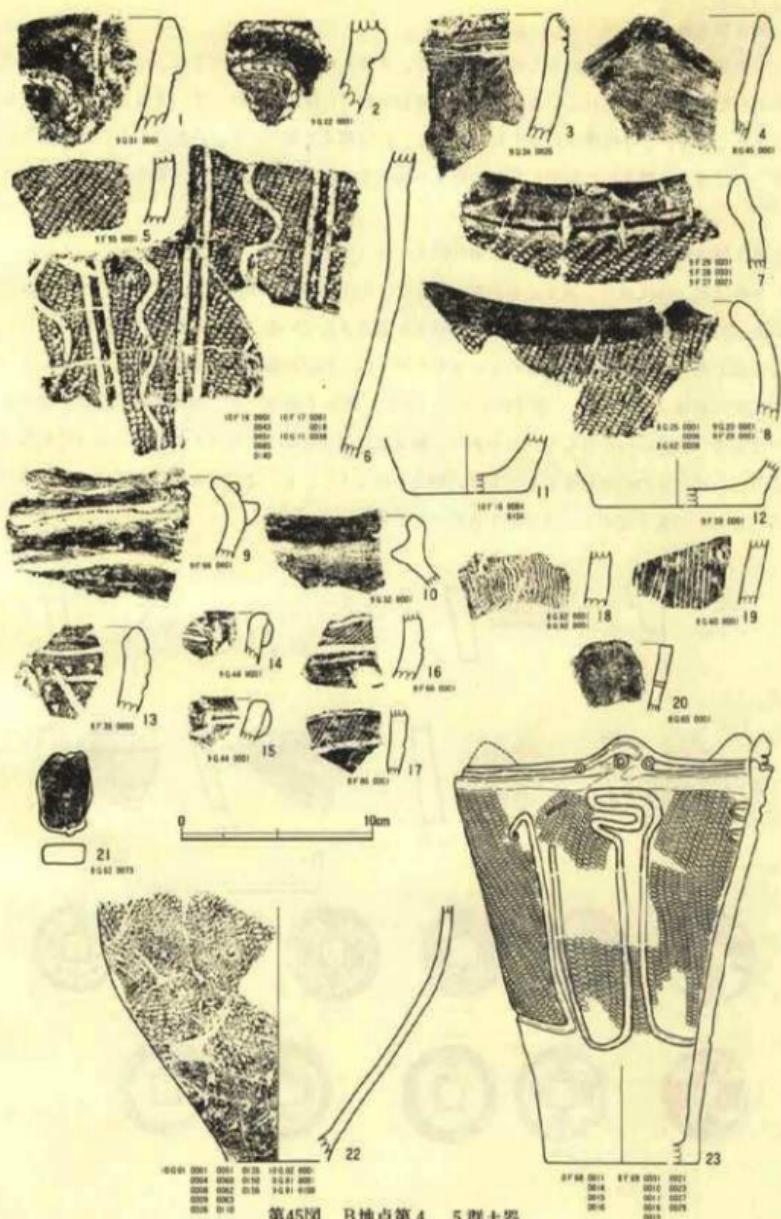
第II類土器（第44図19～29、第45図1～4）

中期中葉に位置づけられるものである。19～24は、阿玉台I-bに属するもので、胎土中に細かい砂をまじえたものが多く金雲母はそれほど多く含まれていない。19～21、24は口縁の突起であり、19～21は粘土棒を芯にして、それを包むように粘土板を付け、その上に刻みを施したこの時期の特徴的な突起である。19には突起の下に角押文が施文されている。22、24は口唇部内側に稜を有するもので、22は口唇部に刻みを有し、口縁部には角押文が蛇行状に施文されている。24は角押文により区画され、さらにその中を梢円形状に角押文が施文されたものである。

25～29、1～4は阿玉台II式に属するもので、胎土中には金雲母、小礫、細かい砂を多く含む。25、27、28は隆線が発達し、それに沿って2条の平行沈線が施文されている。26は蛇行する隆線とそれに沿って1条の角押文が施文され、横位には連続瓜形文が施文されている。1、2はかなり大形の角押文が隆帶に沿って施文されたものである。3、4は無文土器であるが、3は口縁部に3条の平行沈線が施文され、4は口縁が波状を呈し、内側には稜を有するものである。



第44図 B地点第3、4群土器



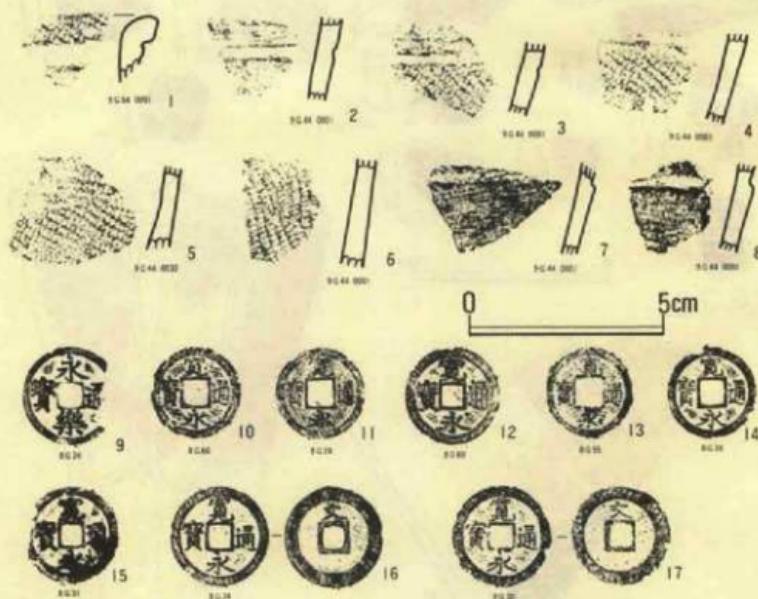
第45図 B地点第4、5群土器

第45図類土器（第45図5～12、22）

中期後半に位置づけられるものである。5、6はLRの縄文が施文され、6には蛇行状と直線的な懸垂文が加えられている。7～10は鉢形土器の口縁部であり、7、8はLRの縄文が施文されている。9は隆帯が付けられたもので、10は無文土器であり、内側に段が設けられている。22は良く研磨された器面にRLの縄文が施文された、非常に薄手の土器である。

第5群土器（第45図13～20、23、第46図1～8 図版36、37）

本群は縄文時代後期に属するものを一括した。出土総数はわずかであり、いずれも小破片である。13は沈線により区画された中に列点文が施文されている。14～17は口縁部に横位にはしる沈線と磨り消し縄文が施文されているもので、14、15には瘤状の突起が付されている。1～8は同一個体土器であり、薄手のもので、RLの縄文を地文とし、口縁部に2条の沈線が横位に走る。肩部には小さなくびれがあり、無文部は顯著な磨きが施されている。23は完形品であり、口縁に3つの突起をもち、LRの縄文を地文とし、その上に6単位の蕨手文が施文されている。この蕨手文の1つは頭部が省略されて描かれている。



第46図 B地点第5群土器および古銭

イ. 土製品（第45図21 図版36）

無文土器の破片の周縁に調整加工を施し、両端に刻みを入れた土鍤であり、土製品の本遺跡からの出土はこの1点のみである。胎土等からみて、第4群II類土器に属するものと思われる。

ウ. 石 器

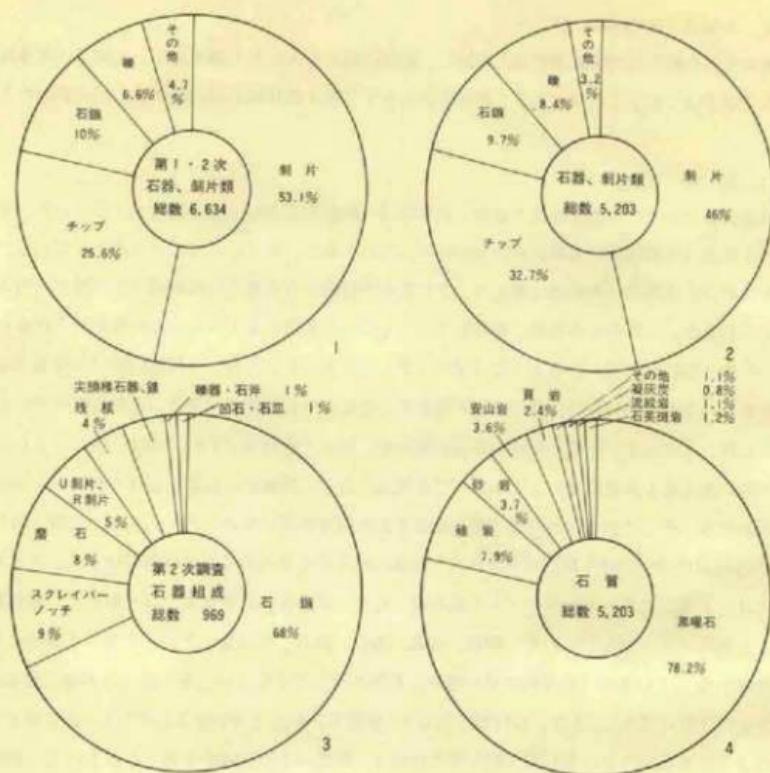
B地点より出土した繩文時代の石器・剝片類は、总数約5,200点と多量に出土しており、その出土状況は土器同様に遺構からのものはほんのわずかで、第IIb・c層から出土している。分布状態は、土器の分布範囲に重なり、また石器の特徴からも考えて時期的にも同様のものと考えられるが、土器の分布状態に比較して、いくつかの集中部をもった分布状態が見られる。しかし先土器時代に見られるような「ブロック」「ユニット」と言った機能的性格は稀薄なものと思われるが、それらは、剝片・碎片類が中心となった石器組成であり、またこの地点における石鋸、スクレイバー等の石器の石質別割合が、剝片・碎石類のそれにはば一致し、またそれぞれの出土数も非常に多いことから、この地点において幾種かの石器が製作されていたものと思われる。そして剝片・碎片類の集中部はそれと関連の深いものと考えられる。石器・剝片類の内剝詰は、剝片・碎片類が約4,000点と全体の80%近くを占めており（第47図2）、石器としては、石鋸、スクレイバー、ノッチ状石器、石錐、使用痕のある剝片（U・剝片）、調整痕のある剝片（R・剝片）、石斧、礫器、石皿、磨石、凹石、残核などといった多くの器種による組成となっているが、数量的に見た場合、石鋸が70%近くを占め、その他の各器種は数量的に少ない（第47図3）。また、石材別に見ると、黒曜石が80%と大半を占めている（第47図4）。このようにB地点における石器・剝片類の特徴は、組成の上で石鋸を主体としたもので、石材としては黒曜石を主な素材として使用されている。この黒曜石の原産地について第1次調査の中では、箱根系と信州系のものに分けられ、その比率は2対3の割合であると分析結果が出されており、このB地点のものについてもこれと同様と考えられる。第1次調査でも石器・剝片類の出土量は多く、石器組成、石材についても、今回のB地点と同様の結果がでている（第47図1）。

○石 鋸

总数505点で、表土層から出土したものも多いが、その大半は、この地点の主体となっている第2群土器の時期と考えてよいと思われる。石材は黒曜石を使用しているものが断然多く、統いて珪岩、安山岩、頁岩、砂岩の順となっている（第48図1）。大きさは重量0.5~1.5g、長さ15~25mmのものが多く、また尖端角度は45~60°に集中している。これらの石鋸は形態により以下の12に分類できる。

第I類（第49図1~61 図版38）

両面に調整加工が施されているもので、形態は、幅に対し長さが長くやや細身の二等辺三角



第47図 B地点石器組成図

形を呈する。基部の抉りはそれほど顕著なものでない。本類のものが量的に大半を占めている。さらに大きさにより5つに細分できる。

- a (1~9) 大形のもので、長さが30~35mmである。
- b (10~26) 長さが20~30mmのもので、aに比べややすんぐりした形状である。抉りが顕著なもの(18)とわずかで三角錐に近いもの(23, 25)も少數みられる。
- c (27~47) bに比べさらに小ぶりになり、長さが15~20mmのものである。基部の抉りが顕著なもの(28~30, 32)やわずかなもの(38, 43)が少數みられる。また片面が周縁のみに調整加工が施されたいわゆる「両面加工品」もある(45~47)。
- d (48~56) 本類の中で最小の大きさのもので長さが15mmに満たないものである。
- e (57~61) 非常に細身に仕上げられたもので、調整加工も入念に行なわれている。

第II類（第50、1～32 図版39）

両面に調整加工が施され、I類に比べ長さに対する幅が広いもので、形状はややすんぐりした二等辺三角形を呈する。基部の抉りは顕著でないものが多い。本類もI類と同様に大きさによってさらに区分できる。

- a (1～10) 長さが30mm前後と大形のものである。
- b (11～21) 長さが20mm前後のものである。13は脚部が左右非対称である。19は胸部にややふくらみをもつ、21は主刺離面を残し周縁加工に近い調整となっている。
- c (22～32) 長さが15mm前後のものである。形状は正三角形に近く、基部の抉りも比較的顕著なものが目立つ。

第III類（第50図33～41 図版39）

比較的厚みのある剝片を素材とし両面に調整加工が施されている。形状は肩の部分がやや張り、三角形というよりも砲弾形を呈する。基部の抉りはわずかなものである。調整加工は入念なものであり、38は細部の調整加工も入念に施されている。

第IV類（第50図42～48 図版39）

厚みのある剝片を素材とし、両面に調整加工が施され、基部は直線的に仕上げられている。形状は棱の高いすんぐりとした三角形を呈する。48は基部の調整加工がエンドスクレイバーを思わせるような調整加工が施されている。

第V類（第50図49～53 図版39）

両面に調整加工が施され、尖端部が細く鋭角に仕上げられたもので、錐状の形を呈する。基部は第IV類と同様直線的であり、三角錐に近い形状である。

第VI類（第50図54～61 図版39）

片面調整加工のものを本類とした。

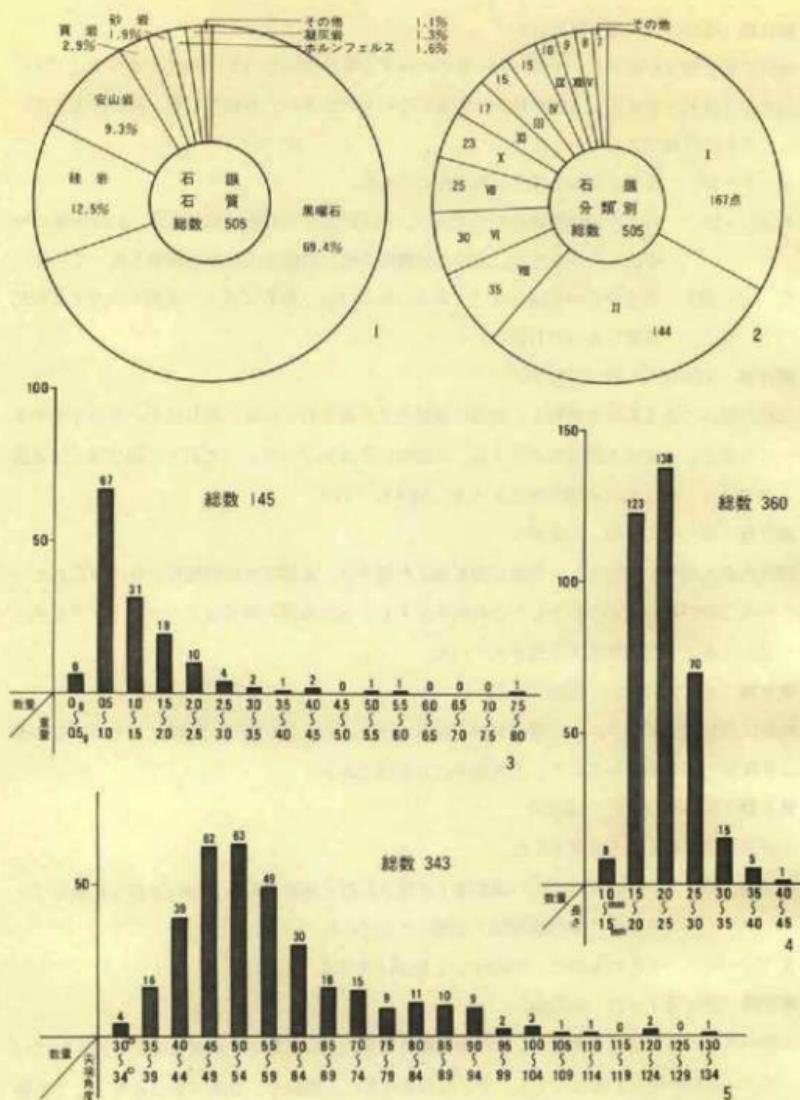
- a (54、55) 大形のもので粗い調整加工が施された三角錐である。54の基部は折断してその部分に細部調整加工を施し仕上げられている。
- b (56～61) 小形のもので、形状的にはIc類と類似している。

第VII類（第51図1～12 図版40）

大形の厚みのある剝片を素材とし、階段剝離技法等により非常に荒い調整加工が施されている。形状は基部の抉りをほとんどもたず、左右非対称の三角錐で、石錐の飛び道具としての機能を果たしたものか疑問なものが多い。12は尖端部が丸みを帯び、欠損等により再加工されたものと思われる。

第VIII類（第51図13～22 図版40）

周縁調整加工のもので、薄手の剝片の形状を利用して周縁のみに軽い調整を施し加工したものである。形態は個々に特徴をもったものが多く、18は厚みある剝片を素材とし、基部は丸み



第48図 石鉄数量図

を帶びている。21、22は非常に小形のものである。

第九類（第51図23～29 図版40）

部分的に調整加工が施されたもので、剥片の形状および鋭い縁辺をそのまま利用して、わずかに、調整加工を施し形を整えたものである。

第十類（第51図30～48 図版40）

両面に調整が施され、幅が長さと同じかそれ以上で寸の詰まった三角形の形状を呈する。30～32は基部が直線的に仕上げられ、尖端部は丸みを帯びている。33～38は基部に抉りが施されたもので、35、38は「鉢形」に近い形状となっている。

第十一類（第51図39～45 図版40）

顯著な抉りにより長脚を有するものを本類とした。

第十二類（第51図46～59 図版40）

本類は基部に抉りを有しない典型的な三角鉢である。47、48、50は基部に細調整が施されているが、46、49は雑な調整のみである。

その他（第52図1～7 図版41）

本類はI～XI類のいずれにも属さない形態のもので、1は大形の細身の剥片に対し小さく純角な脚を有する。2、3は有茎石鉢である。4、5は左右の脚の長さが顯しく違うものである。6は尖端部と胴部に段をもつ特異的な形状を呈する。7は槍先形尖頭器状のものである。

○槍先形尖頭器（第52図8、9 図版41）

いずれも第II c層中より出土したものである。9は縄文時代草創期のものと考えられ、荒い剥離により調整されている。また表面の風化が激しい。8は細調整加工が入念に施されており、第2群土器に伴うものと考えられる。

○残核（第52図10～15 図版41）

残核は総数24点の出土で、剥片・碎片の出土量に比較して非常に少ない。そして出土したいずれのものも、剥片の剥離作業がすでに不可能なものと思われるものののみである。10、11は打面部と背面に礫面を残している単設打面のもので、幅の広い寸の詰まった剥片を剥離したものと思われる。打面の調整は行なわれていない。12はチュビングツール状のもので、礫の1端より、交互に2、3回の剥片剥離作業が行なわれたものである。13、14は一定の打面をもたず、剥離面を打面とした無作為的な剥片剥離作業が行なわれている。15は打面調整剥片であり、かなり大形の石核の存在がうかがわれるが、今回の調査では出土例はない。

○尖頭様石器・石錐（第52図16～21 図版41）

いずれも剥片の1端に調整加工を施し、槍先形尖頭器状に仕上げたもの（16～18）と錐状に仕上げたもの（19～21）である。

○スクレイパー（第53図1～13 図版42）

出土总数50点、1は石匙であり、大形の剥片を素材とし表面は、荒い剥離により形を整え、さらに周縁に細部の調整が施され刃部、つまみを作り出している。これに対して裏面は、ほとんど二次調整が施されず、刃部、つまみの一部に細部調整が施されているのみである。2～5は比較的厚手の剥片を素材とし、表面のほぼ全面に細かな調整剥離が施され刃部角が鈍角なものである。6～13は剥片の周縁やその一部分に調整剥離を施し刃部を作り出したもので、6、7は非常に荒い調整剥離により、8、9は軽く調整剥離が施され、10～13は細かな調整剥離による。

○ノッチ状石器（第53図14～16 図版42）

剥片の周縁に細かい調整剥離により、抉りを入れたものである。

○調整痕のある剥片（第53図17～21 図版42）

出土总数15点で剥片の一部分に軽く調整剥離を施したものである。

○使用痕のある剥片（第53図22～26 図版42）

出土总数36点で、いずれも剥片のもつ鋭い周縁を刃部として使用されたもので、調整剥離は施されておらず、わずかに刃こぼれが見られる。

○打製石斧（第54図1～3 図版42）

出土数はこの3点のみであり、1は完形品であり、基部には礫面を残し、刃部は片刃状を呈する。2は扁平な剥片を素材として、刃部、周縁に調整剥離が施されたものである。基部は欠損している。3は表面の風化が激しく調整剥離の状態はよく解らないが、表面に荒い剥離により刃部を作り出し、裏面には、わずかに調整剥離がみられるだけで、研磨が行なわれたことも予想される。

○礫斧（第54図4 図版42）

大形の礫を素材とし、その形状を利用し一端に表裏面から研磨のみにより片刃状の刃部を作り出したものであり、石斧のように柄の装着は考えられず、握斧のように使用されたものと考えられる。

○敲石（第54図5 図版42）

礫の先端や周縁に敲打痕が残っているもので、5は先端から周縁にかけてかなり顕著な敲打痕がみられ、頻繁に使用されたことがうかがえる。またこの石器は熱を受けた跡がみられる。

○凹石（第54図6 図版42）

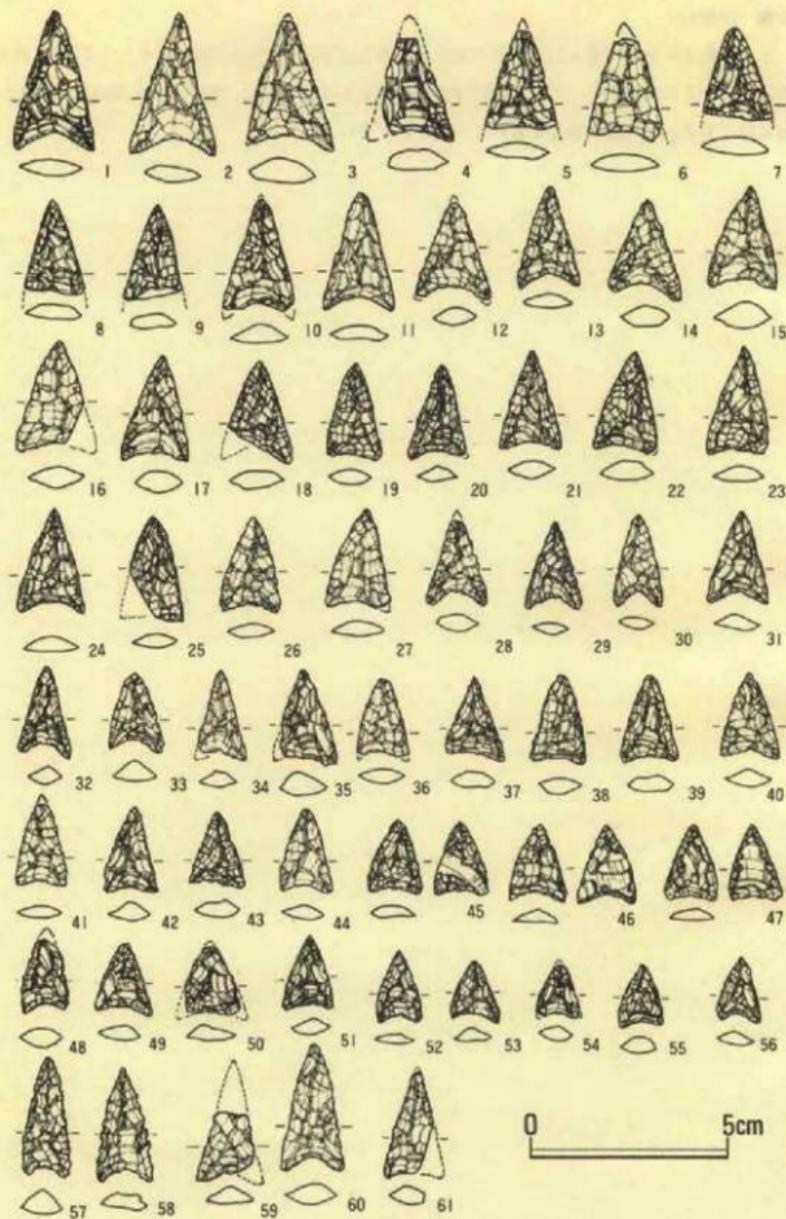
出土数はわずか2点のみであり、非常に少ない。6は両面に3～4つの凹をもち、礫面は研磨されている。

○石皿（第54図7、8 図版42）

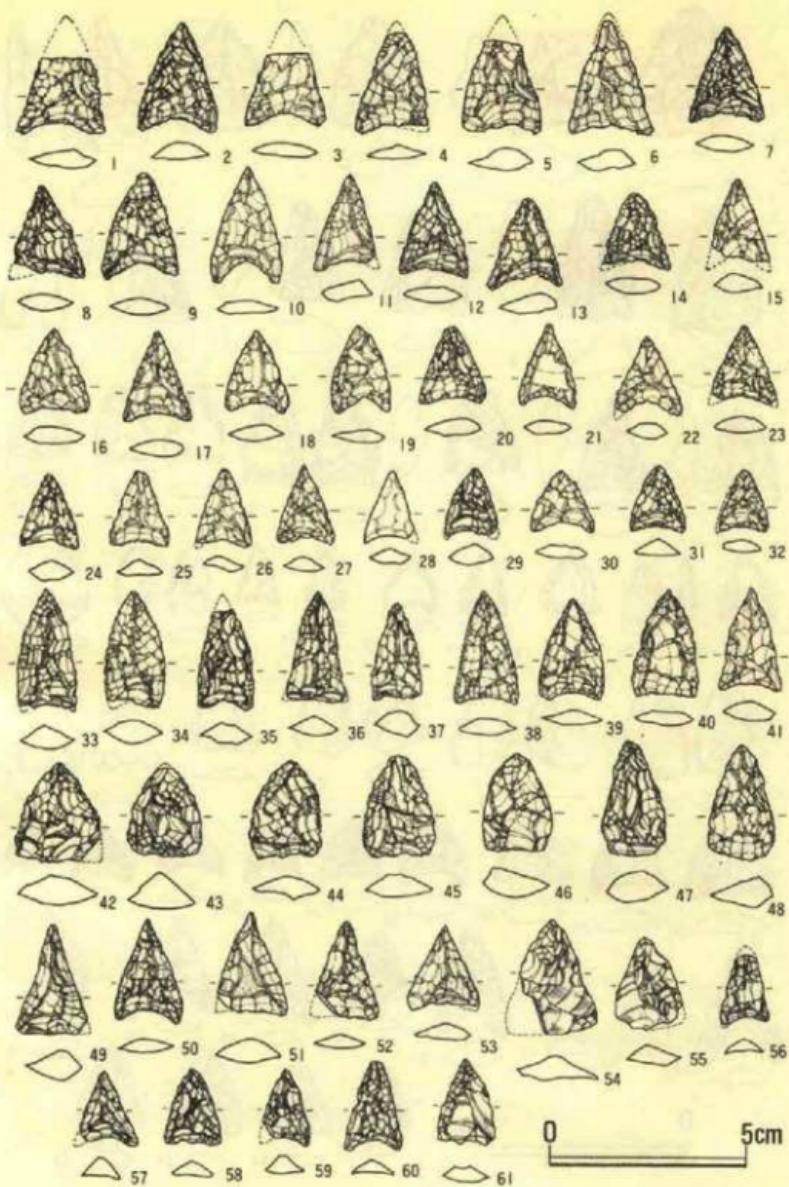
この2点のみの出土で、いずれも欠損品である。8は表面の研ぎが頗しく行なわれている。

○ 琺 (図版42)

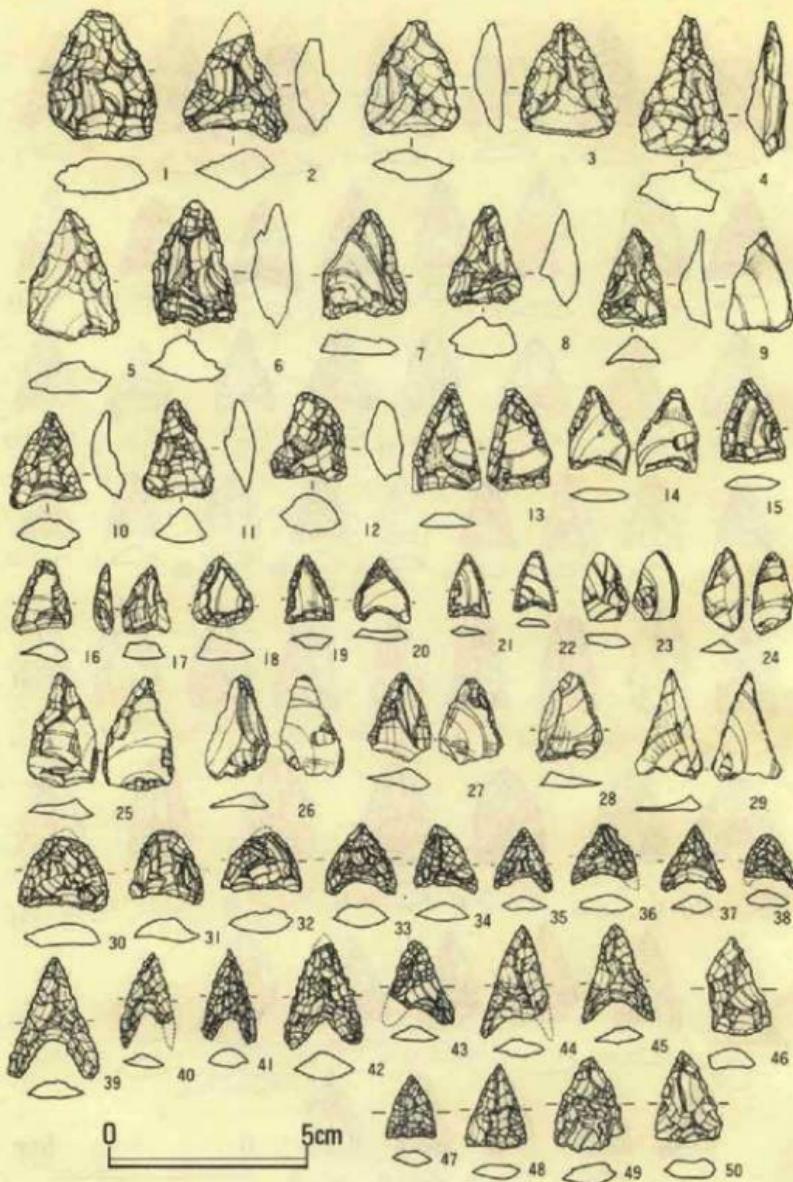
出土総数436点で、拳大以上のもの407点、拳大以下の小さなもの29点、そしてその内、熱を受けているもの85点ある。これら瑺の分布に集積などは見られず、他のものと同様散在した分布状態である。この瑺の用途において不明な点が多い。



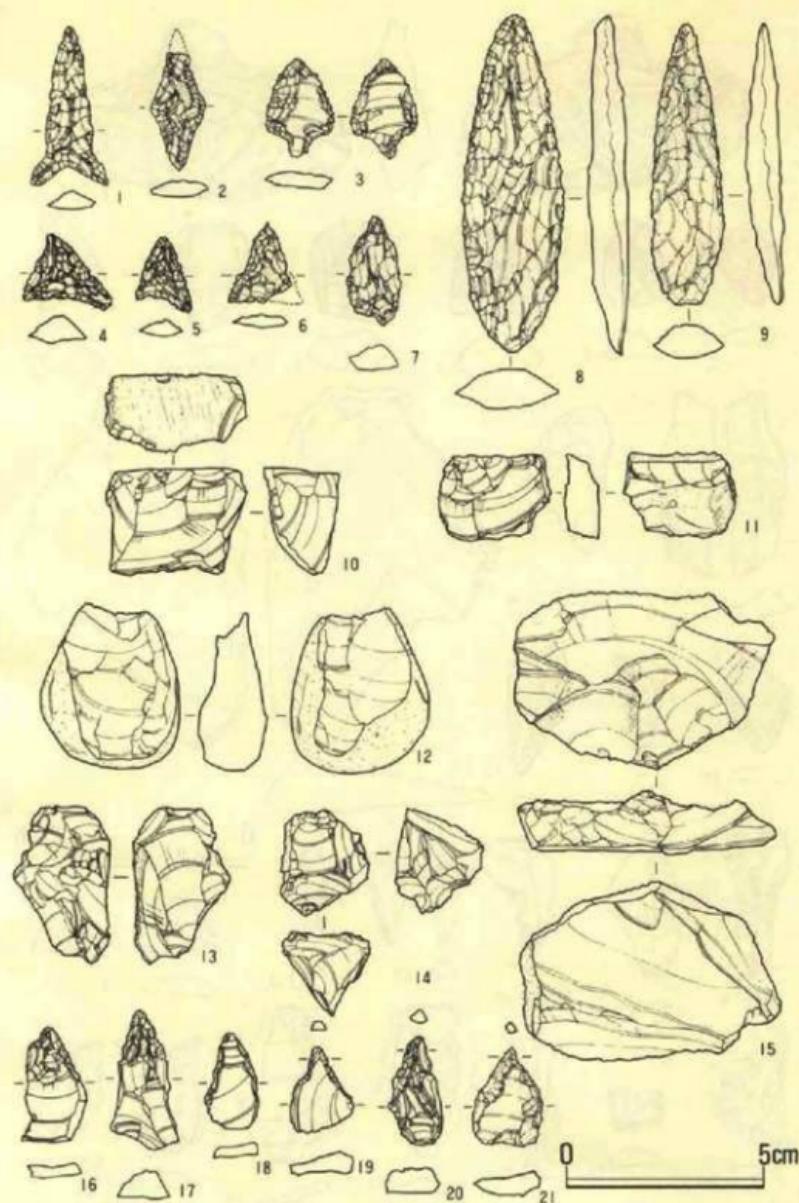
第49図 B地点縄文時代石器(1)



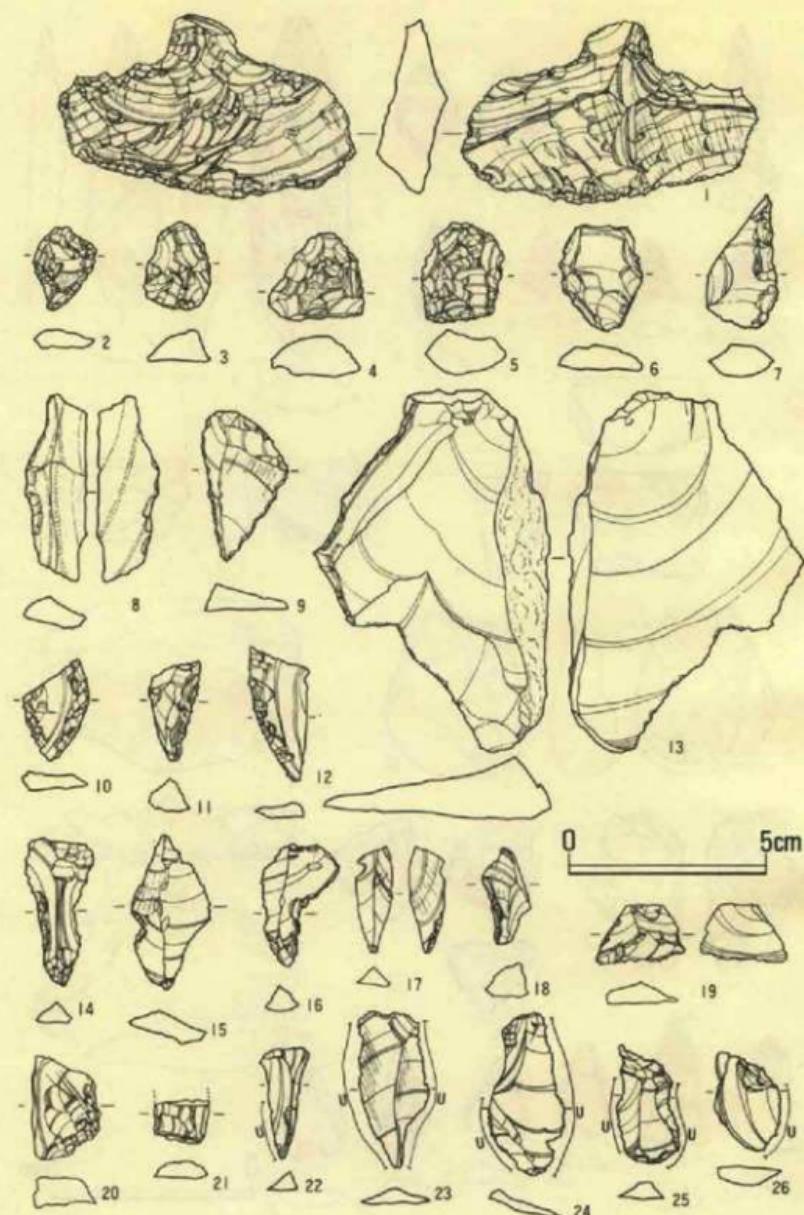
第50図 B地点縄文時代石器(2)



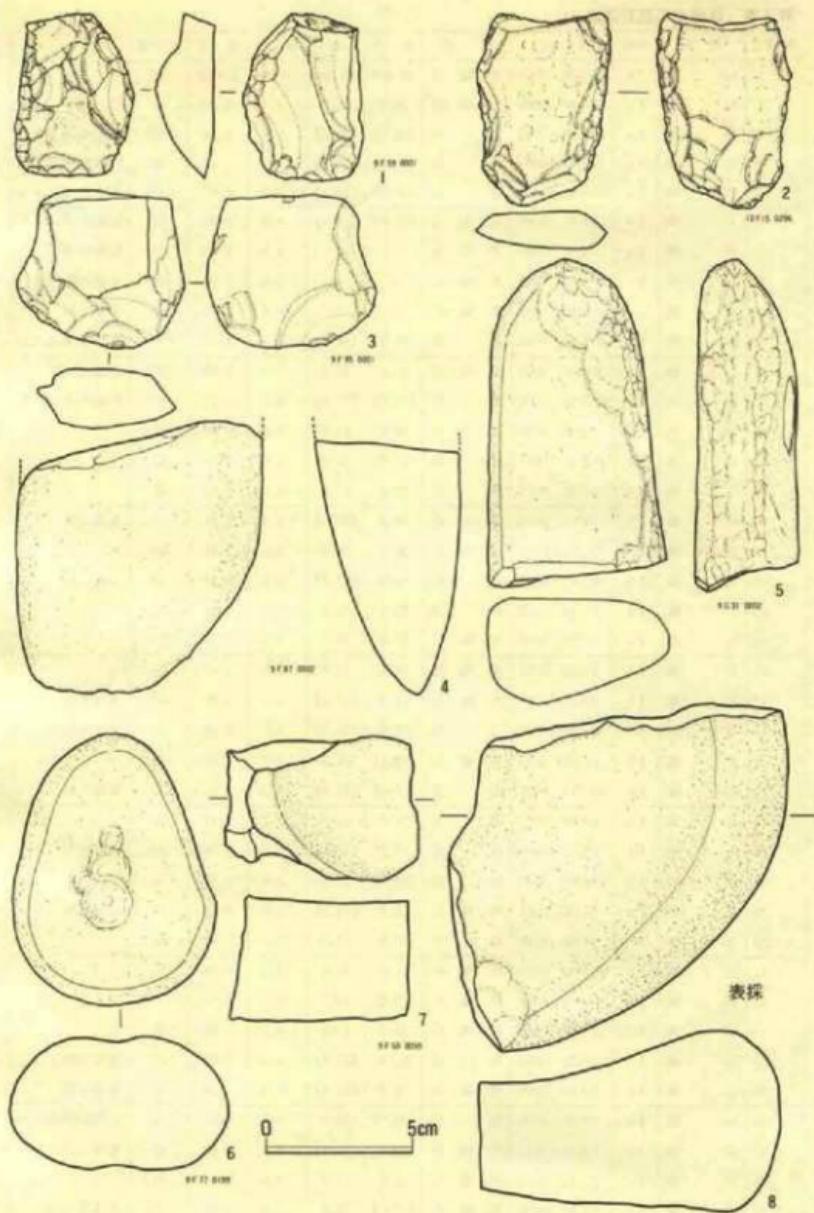
第51図 B地点縄文時代石器(3)



第52圖 B地點繩文時代石器(4)



第53図 B地点縄文時代石器(5)



第54図 B地点繩文時代石器(6)

第2表 日地点石器計測表(1)

標識番号	名 称	分類	出土地点	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	角 度	備 考
49-1	石 鋸	I a	10G30-0001	黑曜石	35.4mm	20.5mm	3.8mm	1.99g	36°	
2	石 鋸	I a	9G60-0001	安山岩	36.7	21.7	4.3	2.28	43	
3	石 鋸	I a	10F18-0041	安山岩	(36.0)	(22.0)	5.8	3.04	(48)	先端部・基部欠損
4	石 鋸	I a	10F37-0001	頁岩	(32.0)	(19.5)	4.6	1.97	(55)	先端部・基部欠損
5	石 鋸	I a	10F15-0001	頁岩	(32.0)	(18.0)	3.2	1.37	(47)	先端部・基部欠損
6	石 鋸	I a	9F57-0386	流紋岩	(31.0)	(19.0)	4.4	1.99	(59)	先端部・基部欠損
7	石 鋸	I a	9G22-0045	黑曜石	—	—	4.5	1.56	(48)	先端部・基部欠損
8	石 鋸	I a	9G52-0015	黑曜石	—	—	3.0	0.96	39	基部欠損
9	石 鋸	I a	10F15-0012	黑曜石	—	—	3.8	1.05	37	基部欠損
10	石 鋸	I b	10F24-0010	頁岩	(27.2)	(18.0)	4.3	1.62	(39)	先端部・基部欠損
11	石 鋸	I b	9G35-0022	硅灰岩	29.3	18.0	3.2	1.52	(37)	先端部欠損
12	石 鋸	I b	10F38-0001	頁岩	(27.0)	(20.0)	4.0	1.17	(47)	先端部・基部欠損
13	石 鋸	I b	9F38-0055	頁岩	26.9	15.9	3.0	0.96	47	
14	石 鋸	I b	10F26-0001	硅灰岩	25.7	18.0	4.6	1.50	47	
15	石 鋸	I b	10F38-0193	頁岩	26.6	17.2	6.1	2.12	47	
16	石 鋸	I b	9F84-0001	安山岩	28.2	(20.0)	4.6	1.85	53	基部欠損
17	石 鋸	I b	10G30-0001	流紋岩	26.1	16.5	4.6	1.45	40	
18	石 鋸	I b	9G62-0001	頁岩	24.9	(17.0)	3.5	1.11	49	基部欠損
19	石 鋸	I b	9F94-0127	頁岩	23.5	13.4	3.4	0.89	55	
20	石 鋸	I b	9G37-0001	黑曜石	23.2	14.7	3.2	0.74	56	
21	石 鋸	I b	9G22-0001	黑曜石	24.4	15.8	3.9	1.03	44	
22	石 鋸	I b	9F85-0069	黑曜石	25.2	(17.0)	4.0	1.29	44	基部欠損
23	石 鋸	I b	9F38-0077	頁岩	27.6	(16.5)	3.5	1.28	37	基部欠損
24	石 鋸	I b	9F85-0014	黑曜石	25.4	16.9	3.7	1.14	46	
25	石 鋸	I b	10F17-0026	頁岩	(27.0)	(15.0)	3.2	0.97	52	基部欠損
26	石 鋸	I b	9F29-0001	硅灰岩	23.0	15.0	3.2	1.12	32	
27	石 鋸	I b	9G73-0196	頁岩	24.7	(17.0)	3.9	1.16	48	基部欠損
28	石 鋸	I c	10F05-0003	硅灰岩	(23.0)	15.0	3.9	0.92	(52)	先端部欠損
29	石 鋸	I c	9G90-0001	黑曜石	21.5	(14.5)	2.8	0.58	44	基部欠損
30	石 鋸	I c	9F69-0100	硅灰岩	22.9	11.9	3.1	0.71	62	
31	石 鋸	I c	10F06-0269	黑曜石	21.0	15.0	3.5	0.76	53	
32	石 鋸	I c	10G34-0005	黑曜石	22.2	13.2	3.9	0.72	38	
33	石 鋸	I c	10F18-0086	黑曜石	18.7	13.5	4.8	0.85	84	
34	石 鋸	I c	9G25-0106	安山岩	21.6	(13.0)	4.0	0.69	33	基部欠損
35	石 鋸	I c	9F95-0004	黑曜石	22.8	(16.0)	6.0	1.28	43	基部欠損
36	石 鋸	I c	9F89-0100	硅灰岩	(20.0)	12.5	3.7	0.57	(62)	先端部・基部欠損
37	石 鋸	I c	9F39-0111	黑曜石	20.5	(16.0)	4.0	0.81	45	基部欠損
38	石 鋸	I c	9G11-0001	黑曜石	21.5	14.2	4.0	0.86	54	
39	石 鋸	I c	9G44-0088	黑曜石	(22.0)	14.3	3.8	1.08	(40)	先端部欠損
40	石 鋸	I c	10G52-0001	硅灰岩	20.6	14.5	4.3	1.02	59	

第3表 B地点石器計測表(2)

博物番号	名 称	分類	出土点	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	角 度	備 考
49-41	石 鋸	I e	10F15 0001	頁 岩	(23.0) mm	12.6 mm	3.0 mm	0.73 g	(59)*	先端部欠損
42	石 鋸	I e	9F39 0001	黑 瑞 石	21.2	(14.0)	4.4	0.86	44	基部欠損
43	石 鋸	I e	9F87 0042	黑 瑞 石	18.3	13.7	4.0	0.77	49	
44	石 鋸	I e	9F95 0159	安 山 岩	20.4	13.2	3.1	0.83	48	
45	石 鋸	I e	9G21 0009	黑 瑞 石	18.1	14.8	2.9	0.55	(81)	先端部欠損
46	石 鋸	I e	9G32 0001	黑 瑞 石	19.0	14.2	3.0	0.58	54	
47	石 鋸	I e	10G33 0001	頁 岩	18.9	12.8	2.8	0.68	53	
48	石 鋸	I d	10G20 0041	黑 瑞 石	(20.0)	11.5	5.5	0.98	—	先端部欠損
49	石 鋸	I d	10F16 0113	黑 瑞 石	16.9	14.2	3.5	0.60	55	
50	石 鋸	I d	9G90 0160	黑 瑞 石	(18.0)	13.6	3.7	0.72	(60)	先端部欠損
51	石 鋸	I d	9F99 0395	黑 瑞 石	18.0	13.7	4.0	0.66	54	
52	石 鋸	I d	9G40 0001	黑 瑞 石	17.4	11.2	2.1	0.38	52	
53	石 鋸	I d	9G12 0001	黑 瑞 石	(15.0)	12.3	3.4	0.49	(53)	先端部欠損
54	石 鋸	I d	9F95 0369	黑 瑞 石	(13.0)	10.7	3.7	0.46	(52)	先端部・基部欠損
55	石 鋸	I d	9F96 0120	黑 瑞 石	15.2	11.1	3.9	0.51	57	
56	石 鋸	I d	10F15 0043	黑 瑞 石	15.5	10.6	3.3	0.41	51	
57	石 鋸	I e	9G64 0001	硅 岩	29.7	12.1	5.3	1.62	37	
58	石 鋸	I e	10G60 0124	硅 岩	28.0	13.8	3.6	1.22	41	
59	石 鋸	I e	10F23 0123	流 砂 岩	(26.0) (14.5)	3.8	0.86	—	先端部・基部欠損	
60	石 鋸	I e	9G50 0117	安 山 岩	31.8	16.6	4.7	1.70	42	
61	石 鋸	I e	9G22 0001	凝 灰 岩	31.8 (13.0)	4.6	1.20	41	基部欠損	
50-1	石 鋸	II a	10F06 0320	頁 岩	(32.0) (23.0)	3.7	1.57	—	先端部・基部欠損	
2	石 鋸	II a	9F97 0052	黑 瑞 石	27.7	19.8	3.8	1.58	53	
3	石 鋸	II a	9F95 0121	安 山 岩	(28.0) (21.0)	3.6	1.26	—	先端部・基部欠損	
4	石 鋸	II a	9G43 0095	硅 岩	(28.0) (18.0)	3.4	1.39	(72)	先端部・基部欠損	
5	石 鋸	II a	9G44 0146	安 山 岩	(30.0) (21.0)	5.2	2.03	—	先端部欠損	
6	石 鋸	II a	10F49 0023	安 山 岩	(32.0)	21.2	4.6	2.15	(56)	先端部欠損
7	石 鋸	II a	9F86 0035	黑 瑞 石	23.5	18.8	3.7	1.21	53	
8	石 鋸	II a	9F68 0244	黑 瑞 石	24.2	(19.0)	3.5	1.12	52	基部欠損
9	石 鋸	II a	8F48 0015	頁 岩	26.9	18.7	3.5	1.47	53	
10	石 鋸	II b	9F85 0085	安 山 岩	29.6	17.7	3.5	1.54	50	
11	石 鋸	II b	9G60 0104	砂 岩	23.8 (15.2)	4.0	1.27	44	基部欠損	
12	石 鋸	II b	10F18 0046	黑 瑞 石	23.3	17.4	3.7	1.12	46	
13	石 鋸	II b	10G20 0061	頁 岩	22.6	18.8	4.3	1.36	(44)	先端部欠損
14	石 鋸	II b	10G02 0051	黑 瑞 石	18.6 (18.0)	3.8	0.90	(87)	基部欠損	
15	石 鋸	II b	9F45 0001	凝 灰 岩	(23.0) (16.5)	4.3	1.02	(47)	基部欠損	
16	石 鋸	II b	10F09 0130	安 山 岩	21.3	17.2	3.9	1.22	60	
17	石 鋸	II b	8F58 0001	安 山 岩	22.4	17.0	4.1	1.28	(42)	先端部欠損
18	石 鋸	II b	9F57 0333	ミルクアーバン	20.3	15.6	3.3	0.99	62	
19	石 鋸	II b	9G93 0012	硅 岩	21.7	15.0	2.9	0.94	75	

第4表 B地点石器計測表(3)

測定番号	名 称	分類	出土地点	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	角 度	備 考
50-20	石 鋸	IIb	9F84 0010	硅 岩	19.1mm	16.5mm	3.9mm	1.05g	51°	
21	石 鋸	IIb	9F58 0032	安 山 岩	20.3	14.1	3.2	0.87	48	
22	石 鋸	IIc	9F97 0087	安 山 岩	18.7	{18.0}	3.9	0.91	55	基部欠損
23	石 鋸	IIc	9G80 0001	真 岩	19.0	16.0	3.8	1.03	(54)	先端部・基部欠損
24	石 鋸	IIc	10F18 0043	硅 岩	17.7	14.6	4.5	1.01	53	
25	石 鋸	IIc	10F27 0087	安 山 岩	{19.0}	14.6	3.5	0.82	(45)	先端部欠損
26	石 鋸	IIc	10F09 0098	安 山 岩	18.5	14.0	3.2	0.82	50	基部欠損
27	石 鋸	IIc	9G50 0010	硅 岩	18.7	14.5	3.6	0.76	55	
28	石 鋸	IIc	9F98 0079	砂 岩	17.3	{14.0}	3.4	0.56	50	基部欠損
29	石 鋸	IIc	9G24 0035	黑 磷 石	17.0	{13.5}	4.9	0.85	65	基部欠損
30	石 鋸	IIc	9G10 0049	エンドウルス	14.7	15.3	3.2	0.61	74	
31	石 鋸	IIc	9G30 0004	黑 磷 石	14.8	14.7	3.8	0.62	(59)	先端部欠損
32	石 鋸	IIc	9F39 0004	硅 岩	{17.0}	{14.0}	3.1	0.55	(48)	先端部・基部欠損
33	石 鋸	III	8G23 0019	黑 磷 石	29.4	14.8	5.8	2.17	58	基部欠損
34	石 鋸	III	10G02 0001	硅 岩	28.7	15.0	5.6	2.19	60	基部欠損
35	石 鋸	III	10F37 0287	黑 磷 石	{28.0}	14.8	4.7	1.58	(64)	先端部欠損
36	石 鋸	III	10F29 0196	馬 磨	26.9	{17.0}	4.4	1.64	42	基部欠損
37	石 鋸	III	9F96 0099	真 岩	23.3	12.7	5.4	1.73	40	
38	石 鋸	III	10F05 0001	瑪 磨	{12.8}	16.0	3.8	1.54	(46)	先端部欠損
39	石 鋸	III	9F67 0212	黑 磷 石	24.6	16.6	3.2	1.25	59	
40	石 鋸	III	9G95 0008	硅 岩	26.3	16.5	3.1	1.50	72	
41	石 鋸	III	8G62 0002	安 山 岩	25.5	15.5	4.5	1.50	48	
42	石 鋸	IV	9F79 0001	黑 磷 石	24.6	{22.0}	6.0	2.80	90	基部欠損
43	石 鋸	IV	9G83 0083	黑 磷 石	{23.5}	18.6	9.2	3.31	(82)	先端部欠損
44	石 鋸	V	9F99 0125	黑 磷 石	24.1	17.2	5.9	2.26	94	
45	石 鋸	VI	9F48 0099 49 0053	黑 磷 石	24.9	18.6	5.8	2.41	—	先端部主刺離面
46	石 鋸	VI	9F49 0001	流 紋 岩	24.1	17.2	6.4	2.64	81	
47	石 鋸	VI	9G73 0025	黑 磷 石	{30.0}	{17.0}	7.1	3.01	52	基部欠損
48	石 鋸	VI	9G21 0012	硅 岩	28.9	16.9	6.7	2.90	73	
49	石 鋸	VII	9F79 0001	真 岩	27.0	{19.0}	7.4	2.57	30	基部欠損
50	石 鋸	VII	10G31 0002	黑 磷 石	25.4	17.2	3.6	1.16	44	
51	石 鋸	VII	9F95 0095	硅 岩	24.6	{18.5}	5.2	2.08	33	基部欠損
52	石 鋸	VII	9G63 0001	硅 岩	{25.0}	{17.5}	3.5	1.05	40	基部欠損
53	石 鋸	VII	9G31 0035	安 山 岩	20.8	18.2	4.3	1.30	51	基部欠損
54	石 鋸	VIIa	9F76 0020	黑 磷 石	28.2	{21.0}	5.8	2.35	79	基部欠損
55	石 鋸	VIIa	9F99 0093	黑 磷 石	22.9	{18.0}	5.5	1.70	80	基部欠損
56	石 鋸	VIIb	9G13 0020	黑 磷 石	{19.0}	11.8	3.2	0.61	—	
57	石 鋸	VIIb	9G50 0001	黑 磷 石	17.3	{15.0}	4.3	0.87	47	
58	石 鋸	VIIb	10F38 0239	黑 磷 石	18.4	14.1	3.2	0.82	57	
59	石 鋸	VIIb	9G35 0063	黑 磷 石	18.9	{13.0}	3.7	0.61	54	基部欠損

第5表 日地点石器計測表(4)

標注番号	名 称	分類	出土地点	石 質	長さ	幅	厚さ	重さ	角 度	備 考
50-60	石 鋸	Vb	9G10 0001	黒曜石	21.7mm	14.6mm	2.7mm	0.74g	46°	
61	石 鋸	Vb	9G00 0001	黒曜石	20.8	14.4	3.1	0.86	57	
51-1	石 鋸	Vb	10G20 0005	頁岩	33.1	26.9	8.2	7.96	107	
2	石 鋸	Vb	9G73 0058	黒曜石	(32.0)	(27.0)	11.1	4.70	—	先端部欠損
3	石 鋸	Vb	9G32 0041	安山岩	27.8	23.5	6.9	4.42	58	
4	石 鋸	Vb	8G92 0001	頁岩	35.1	22.8	10.0	5.72	40	
5	石 鋸	Vb	9F47 0088	凝灰岩	32.2	22.6	7.2	5.03	65	
6	石 鋸	Vb	9G91 0008	黒曜石	31.4	(20.0)	9.7	5.44	62	
7	石 鋸	Vb	10F09 0194	硅岩	27.1	20.8	5.7	3.15	60	
8	石 鋸	Vb	9F48 0079	黒曜石	24.9	18.5	9.5	2.97	48	
9	石 鋸	Vb	9G40 0109	黒曜石	24.3	(17.0)	7.4	2.55	63	基部欠損
10	石 鋸	Vb	9G50 0040	黒曜石	22.7	18.8	6.6	2.11	38	
11	石 鋸	Vb	9F96 0001	黒曜石	24.8	17.6	8.6	2.31	48	
12	石 鋸	Vb	9G53 0001	黒曜石	21.5	19.5	9.1	3.30	82	先端部再加工
13	石 鋸	Vb	9F87 0094	黒曜石	(26.5)	(18.0)	3.7	1.59	54	
14	石 鋸	Vb	9G83 0101	黒曜石	21.2	15.3	3.3	0.89	55	
15	石 鋸	Vb	9G63 0063	黒曜石	20.7	15.8	3.2	0.89	54	
16	石 鋸	Vb	10F06 0333	黒曜石	18.1	14.5	4.9	0.95	130	
17	石 鋸	Vb	9F38 0073	黒曜石	16.7	11.8	4.2	0.85	47	
18	石 鋸	Vb	9F77 0159	黒曜石	17.0	14.8	5.4	1.36	76	
19	石 鋸	Vb	9F38 0070	黒曜石	16.4	11.9	3.6	0.67	66	
20	石 鋸	Vb	9G53 0001	黒曜石	16.1	13.9	2.3	0.51	65	
21	石 鋸	Vb	9F68 0098	黒曜石	15.5	10.2	2.4	0.35	53	
22	石 鋸	Vb	9F78 0041	黒曜石	(16.0)	11.0	1.5	0.25	53	先端部欠損
23	石 鋸	IX	10F07 0282	黒曜石	16.9	11.0	2.5	0.61	84	
24	石 鋸	IX	9G70 0066	黒曜石	(22.0)	9.6	3.6	0.69	92	基部欠損・複葉形
25	石 鋸	IX	9G32 0001	頁岩	26.9	17.6	4.8	1.87	49	
26	石 鋸	IX	9G34 0014	黒曜石	25.4	15.2	3.0	0.97	56	
27	石 鋸	IX	9G45 0001	黒曜石	21.3	(16.0)	4.0	1.14	66	基部欠損
28	石 鋸	IX	9G31 0009	黒曜石	21.2	16.3	3.3	0.80	99	
29	石 鋸	IX	9F27 0047	黒曜石	26.3	16.4	3.0	0.75	38	
30	石 鋸	X	9F37 0375	黒曜石	(21.0)	22.3	5.1	2.18	95	先端部欠損
31	石 鋸	X	10F04 0070	黒曜石	(19.0)	18.1	5.2	1.44	101	先端部欠損
32	石 鋸	X	10G10 0011	黒曜石	(15.5)	20.1	5.2	1.11	114	先端部欠損
33	石 鋸	X	9G63 0147	黒曜石	17.5	17.7	4.5	1.10	75	
34	石 鋸	X	9G41 0001	黒曜石	16.6	16.2	4.0	0.86	73	
35	石 鋸	X	9G60 0001	黒曜石	15.1	14.5	2.9	0.52	64	
36	石 鋸	X	9G50 0050	黒曜石	(17.0)	(15.0)	4.1	0.69	89	先端部・基部欠損
37	石 鋸	X	9G11 0001	黒曜石	15.9	15.9	3.8	0.65	54	
38	石 鋸	X	10F08 0112	黒曜石	(13.0)	(14.0)	3.0	0.45	102	先端部・基部欠損

第6表 B地点石器計測表(5)

辨認番号	名 称	分類	出土地点	石 品	長さ	幅	厚さ	重さ	角 度	備 考
51-39	石	鉋	II	9G31 0001	安 山 石	29.6mm	22.8mm	3.7mm	1.62g	45°
40	石	鉋	II	9F77 0186	鈍 岩	24.1	(12.2)	2.8	0.54	50
41	石	鉋	II	8G 1 麻 払	黑 墨 石	22.5	13.5	4.0	0.73	48
42	石	鉋	II	8G93 0001	黑 墨 石	(27.0)	19.3	6.2	2.21	65
43	石	鉋	II	10F15 0057	黑 墨 石	20.9	(18.0)	3.6	0.71	52
44	石	鉋	II	9F86 0147	鈍 岩	27.8	(18.0)	4.4	1.19	54
45	石	鉋	II	10G35 0037	安 山 石	25.9	17.9	3.3	0.88	60
46	石	鉋	II	9G50 0005	黑 墨 石	24.2	(18.0)	4.3	1.57	51
47	石	鉋	II	9G73 0130	黑 墨 石	15.5	12.5	3.5	0.65	60
48	石	鉋	II	10G43 0016	桂 岩	20.8	15.2	3.6	1.09	52
49	石	鉋	II	9F98 0012	黑 墨 石	23.3	(19.0)	6.5	1.85	93
50	石	鉋	II	9F59 0012	黑 墨 石	23.0	16.8	4.1	1.66	61
52-1	石	鉋	-	10F18 0124	桂 岩	40.1	19.0	4.4	2.20	34
2	石	鉋	-	8G73 0002	鈍 岩	(36.0)	13.7	4.0	1.51	-
3	有茎石鉋	鉋	-	8G67 0001	黑 墨 石	25.6	17.3	3.5	1.38	79
4	石	鉋	-	9F69 0001	黑 墨 石	21.8	17.5	6.0	1.52	120
5	石	鉋	-	9F96 0184	黑 墨 石	17.7	11.5	3.7	0.67	59
6	石	鉋	-	9G80 0100	黑 墨 石	20.6	(15.0)	2.7	0.68	49
7	石	鉋	-	9G63 0151	黑 墨 石	27.0	14.0	7.0	2.14	-
8	槍先形尖頭器	-	-	5F49 0002	桂 岩	85.6	26.1	9.1	-	-
9	槍先形尖頭器	-	-	9G03 0002	安 山 石	70.6	18.5	8.0	10.31	-
10	残 核	-	-	9F58 0130	黑 墨 石	-	-	-	-	-
11	残 核	-	-	10F29 0031	黑 墨 石	-	-	-	-	-
12	残 核	-	-	10F37 0035	桂 岩	-	-	-	-	-
13	残 核	-	-	10F26 0176	黑 墨 石	-	-	-	-	-
14	残 核	-	-	9G54 0002	黑 墨 石	-	-	-	-	-
15	残 核	-	-	9F49 0022	安 山 石	-	-	-	-	-
16	尖頭様石器	-	-	9G04 0007	黑 墨 石	29.0	15.0	6.0	-	42
17	尖頭様石器	-	-	10F14 0027	黑 墨 石	34.0	14.0	8.1	-	37
18	尖頭様石器	-	-	10G01 0160	黑 墨 石	24.2	13.2	3.4	-	40
19	鉋	-	-	10G00 0043	黑 墨 石	21.0	16.0	4.5	-	-
20	鉋	-	-	10F48 0031	黑 墨 石	27.4	12.8	6.7	2.53	-
21	鉋	-	-	9F85 0156	桂 岩	25.0	17.6	4.7	2.33	-
53-1	スクレイバー (右込)	-	-	9G95 0009	黑 墨 石	44.0	73.9	14.1	38.00	-
2	スクレイバー	-	-	9G20 0094	黑 墨 石	20.2	14.9	4.5	1.43	-
3	スクレイバー	-	-	9F49 0185	黑 墨 石	21.0	15.5	4.8	2.65	-
4	スクレイバー	-	-	10F05 0239	黑 墨 石	21.6	23.2	9.6	5.02	-
5	スクレイバー	-	-	9G35 0002	黑 墨 石	25.5	19.8	9.8	5.37	-
6	スクレイバー	-	-	9G81 0055	桂 岩	26.5	20.0	5.9	4.21	-
7	スクレイバー	-	-	9G40 0031	桂 岩	33.2	18.2	8.5	4.63	-

第7表 B地点石器計測表(6)

標注番号	名 称	分類	出土地点	石 質	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	角 度	備 考
53-8	スクレイバー	-	9F49 0104	安山岩	42.5mm	14.6mm	6.6mm	5.23g	-g	
9.	スクレイバー	-	10F22 0005	黒曜石	36.8	19.6	8.8	4.14	-	
10	スクレイバー	-	9F57 0288	黒曜石	20.6	15.9	4.0	-	-	
11	スクレイバー	-	10F09 0191	黒曜石	24.6	12.4	7.6	1.96	-	
12	スクレイバー	-	10G10 0123	黒曜石	29.2	13.0	3.2	1.56	-	
13	スクレイバー	-	10F15 0120	頁岩	87.5	60.1	15.0	61.50	-	
14	ノツチ	-	9F85 0263	頁岩	35.8	16.9	5.4	3.34	-	
15	ノツチ	-	10F08 0168	黒曜石	37.7	19.3	5.7	3.11	-	
16	ノツチ	-	9F67 0271	黒曜石	29.7	16.5	7.5	3.26	-	
17	R・剥片	-	10G02 0017	黒曜石	26.2	8.7	4.1	0.91	-	
18	R・剥片	-	9G50 0162	黒曜石	23.5	10.5	8.5	1.81	-	
19	R・剥片	-	9G60 0024	黒曜石	13.4	22.0	6.5	1.39	-	
20	R・剥片	-	10F07 0320	黒曜石	25.0	16.8	6.8	4.09	-	
21	R・剥片	-	9G90 0122	頁岩	10.8	13.0	3.8	-	-	
22	U・剥片	-	9G13 0022	黒曜石	26.5	11.1	5.0	1.00	-	
23	U・剥片	-	9F86 0108	黒曜石	38.6	17.3	3.3	1.81	-	
24	U・剥片	-	10F07 0033	黒曜石	39.4	19.7	4.4	2.78	-	
25	U・剥片	-	9G84 0052	黒曜石	30.0	14.5	5.5	-	-	
26	U・剥片	-	9F59 0004	黒曜石	23.2	16.8	5.0	1.62	-	
54-1	石斧	-	9F59 0001	砂岩	-	-	-	-	-	
2	石斧	-	10F15 0296	エラシテス	-	-	-	-	-	基部欠損
3	石斧	-	9F95 0001	ルート岩	-	-	-	-	-	基部欠損
4	縛器	-	9F87 0002	砂岩	-	-	-	-	-	
5	縛器	-	9G31 0052	砂岩	-	-	-	-	-	
6	四石	-	9F77 0199	砂岩	-	-	-	-	-	
7	石皿	-	9F59 0059	安山岩	-	-	-	-	-	
8	石皿	-	表採	安山岩	-	-	-	-	-	

第3節 その他の時代

鉄滓 (図版37)

本遺跡から6点の鉄滓が、第1層中から出土している。本遺跡周辺には、取香製鐵遺跡、御幸畠製鐵遺跡といった平安時代の規模の大きな遺跡が発見、調査されている。また他の多くの遺跡からも鉄滓が出土していることから、この周辺で当時製鉄が盛んに行なわれていたと考えられる。

1 (7E-53 0001) 表面は灰褐色を呈し、大小の気孔が多く、砂粒をまばらに喰んでいる。破面は銀灰色で部分的に茶褐色の筋が吹出し、比較的密度が高い。重量130 g。

2 (9F-96 0135) 表面は暗灰色を呈し、滑らかであるが部分的に皺状の凹凸がある。裏面には砂粒が付着するが、破面の観察においても、砂粒が層状に含まれており、また、この部分に気孔が集中していることからも、2回に亘って流れ出たものが重なっていることが判る。9G-87グリット出土品と同様製錬流出滓と思われる。

3 (9G-87 0001) 流動性の強い黒色タール状を呈し、比重は小さい。裏面には砂粒が多く付着している。重量14.5 g。

4 (9G-87 0001) 表面は暗灰色を呈し、滑らかで部分的に弱い凹凸がある。破面からは、小気孔をまばらに含んでいるが、比較的密度の高いことが観察される。製錬時の比較的流動性の強い流出滓と思われる。重量17 g。

5 (9F-94 0001) 暗灰色で部分的に暗赤褐色を呈す。裏面は平坦であるが、表面は皺状の凹凸が著しく流動性が強い。破面は小気孔が密集するが、部分的に大きいものもある。重量3 g。

6 (7E-10 0001) 表面は灰色で、茶褐色の筋がまばらに吹出している。割られた様な破面があり、この面は銀灰色で、小気孔が多く見られる。重量33 g。

古銭 (第46図9~17 図版37)

いずれも第1層中から出土したもので、永樂通宝1枚、寛永通宝50枚が出土している。寛永通宝には大形のもの(12、15~17)と小形のもの(10、11、13、14)とがあり、大形のものの裏側に「文」の文字が書かれているものがある。

第4章 考察編

第1節 B地点出土の第2群土器について ——鶴ヶ島台式土器の細分——

1. はじめに

鶴ヶ島台式土器は、山内清男氏により茅山式土器として縄文時代早期後半に位置づけられた（注1）。その後、岡本勇氏らにより茅山式土器の細分が進められ、野島式、鶴ヶ島台式、茅山下層式、茅山上層式の4つに分類された。そして鶴ヶ島台式土器の型式的特色として岡本氏は「段のくびれと平底の器形を、また文様単位の区画の上に押捺をもつ幾何学的な細縦起文、沈線文をそれぞれメルクマールの典型とする型式」と述べ（注2），さらには「器形の上では茅山下層式との、文様の上では野島式との系統的関連を示めしている。」とそれぞれの型式間における関連をも述べている（注3）。この岡本氏の指摘した鶴ヶ島台式土器の型式的特徴は、今日に至っても的確なものと言える。しかし、これは閑野哲夫氏も指摘されているように（注4）鶴ヶ島台式土器といった一型式の中においても当然時間差を保有するものと考えられるもので、型式学的に細分されるものと考えられる。このような点を考えるにあたり、本遺跡より得られた資料は好資料であると言える。しかし本遺跡の場合、いずれの資料も自然層中からの出土であり、自然層自体浅く、近年の耕作等による擾乱、削平を受けているため、層位学的観点からの遺物の観察は不可能に近く、型式学的観点に基づいた分類、分析に頼らざるを得なかった。また筆者自身浅学のため、資料の観察が充分に行なわれていないとも思われるが、本遺跡から出土した資料を中心として、鶴ヶ島台式土器の細分について行なってみた。なほ、この時期の土器には、条痕文のみの調整による粗製土器といろいろな文様が施文されている精製土器の2つのものが見られ、その個体別の比率としては、今回は充分に把握することはできなかつたが、粗製土器の比率が大であることは充分に認められることであり、鶴ヶ島台式土器の研究を進めるにあたって、粗製土器の研究および粗製土器と精製土器の相互関係をみてゆくことは重要なことと思われる。それらについては今後の課題として充分に考慮して、今回は文様の特色の比較的明確に把握できる精製土器のみについて考えてゆくこととした。

2. 鶴ヶ島台式土器の文様について

鶴ヶ島台式土器の型式的特色は、器形においては胴部に1段ないしは2段の段とくびれを有

し、文様では区画状文、充壇文、区画状文交叉部刺突文の3つの性格の異なる文様が1つの文様帶内において幾何学的な構成により描出されている。この3つの文様は、施文方法の違いにより、それぞれにさらに分類することができる。

区画状文

区画状文は、文様帶をいくつかに区画する役割の文様であり、縦位に区画するものと、横位に区画するものの2つの性格の異なるものとに分けることができ、前者を縦位区画状文、後者を横位区画状文と呼ぶことにした（注5）。そしてさらに細かく見るならば、この縦位・横位区画状文は、施文の段階において、文様帶を大きく区画するものとその区画内をさらに区画するものとの2段階の区画状文に分けることができるものもある。これは特に縦位区画状文では文様要素の違いによって明確に認められる場合がある。またこの2つの区画状文は文様要素の違いにより細分することができ、縦位区画状文の文様要素として、⑥降起線文、⑦細降起線文、⑧微降起線状文、⑨沈線文、⑩細い沈線文、⑪刺突文・押し引き文の6つに分けられ、横位区画状文では、⑫から⑯の5つに分けられる。これら文様の具体的な施文方法については後に触ることにするが、多様な施文方法がみられる。しかし1つの土器の文様帶においては、縦位・横位区画状文と共に共通した單一の文様要素によるもののがほとんどであり、複数の文様要素からなるものでもせいぜい2、3のものからなる。

充壇文

充壇文は、縦位・横位区画状文により区画された中に施文される文様であり、各区画間に関連性をもった規則的な施文方向に基づき施文されている。その文様要素としては、⑥沈線文、⑦細い沈線文、⑧刺突文・押し引き文に分けられ、特殊な例として凹線文がこれに加わる。これらも区画状文と同様に1つの文様帶において單一の文様要素のみにより施文されるものが大部分であるが、複数の文様要素によるものも極く少数であるがみられる。

区画状文交叉部刺突文

この文様は区画状文の交叉部や区画状文上に押捺される文様であり、この時期の特徴的文様と言える。そしてこの文様は施文工具により、⑩円形竹管によるもの、⑪半截（3、4截も含む）竹管によるもの、⑫へラ状（多截竹管も含む）工具によるもの、⑬アダグラ属の貝殻頂部によるものに分けることができる。

以上の3つの文様は、文様要素の組み合わせにおいては、規則性はみられず、さまざまな組み合わせが見られる。しかし文様構成におけるこの3つの文様は、強い規制の上につながりを持ったものと言える。つまり、胸部の段、くびれにより規制された文様帶内を縦位区画状文により4ないし8つに縦割に区画され、さらにそれぞれの区画内をほぼ同様のタスキ状、鋸歯状を基調とした横位区画状文により細かく区画される。そして最小単位の区画内に各区画間に関連をもった施文方向に基づいた充壇文が施文され、最後に区画状文の交叉部に刺突文が押捺さ

れることにより、特徴的な文様構成が作り出されている。言い換えるならば、3つの文様が、1つの文様帶内において、それぞれの文様構成上の役割りを果たすことによって、典型的な鶴ヶ島台式の文様が描出されると言える。

3. 鶴ヶ島台式土器の細分

鶴ヶ島台式の文様とその構成の特徴について簡単に述べてみたが、それらが前後型式をも含めた時間の中において、いかなる系統的変遷がみられるか次に述べてみる。

(1)野島式土器

第1類とした土器群がこれにあたる。今回の調査で出土したものは、いずれも小破片のため明確な特色を把握するのは難しいが、文様の特徴として、刻み目を有する隆起線文の縦位区画状文が2条垂下し、沈線による横位区画状文がタスキ状に施文され、沈線による充填文がこれに加わっている。区画状文交叉部の刺突文は存在していない。また器形において胴部に緩くくびれがみられる。これらの文様のうち縦位区画状文は、野島式の特徴的施文方法によるものであり、横位区画状文、充填文、そして胴部のくびれは、鶴ヶ島台式に通ずるものである。この土器群は、野島式の終末段階に位置づけられるものと考える。この他に、この段階の良好な資料として、第1次調査時の14地区から出土した土器があげられる(第55図①)(注6)。この土器は、器形において、口縁がやや内反し、口唇部は丸みを帯びている。胴部にはそれはどの頗るなものではないが、わずかにくびれを有する。このくびれにより文様帶は2段に分けられる。さらに、文様要素に沈線文を用いて、縦位区画状文とタスキ状の横位区画状文そして充填文が比較的整った構成により描出されている。これに区画状文交叉部刺突文が加われば、鶴ヶ島台式と言っても良いほどのものであるが、文様の施文方法は非常に雑であり、その構成において、また器形においても不安定な感が強いものである。しかし野島式の終末段階において、すでに鶴ヶ島台式の特徴的な文様要素、文様構成、器形の土台はできあがっていたものと言える。

(2)鶴ヶ島台式土器(第55図 ⑥~⑨)

II~IV類の土器群がこれにあたり、それらは文様系統において3段階に分けられる(注7)。第1段階は鶴ヶ島台式の初期段階と言えるものでII類がこれにあたる。第2段階は鶴ヶ島台式の発展段階と言えるものでIII類がこれにあたる。この段階はさらに2つの段階に分けられる。第3段階は鶴ヶ島台式の終末段階と言えるもので、IV類がこれにあたる。この3段階の各段階ごとの特色と相互の関係について見て行くこととする。

第1段階

器形においては、口縁が外反するものが多くなり、口唇部は丸みを帯びたものが多いが、内削げ状の割合も多くなる。胴部には1段ないし2段のくびれを有するが、くびれ状態は緩いも

のである。しかし野島式終末期のものと比べ、はっきりとしたものとなっている。文様においては、縦位・横位区画状文の文様要素に細降起線文、沈線文、細い沈線文が多く使われ、充填文には沈線文、細い沈線文、押し引き文があり、細い沈線文の割合が多い。その構成は垂下する縦位区画状文と、タスキ状、鋸歯状に描出された横位区画状文による単純なものである。以上の点から見ると前段階のものと共通性が強いものであるが、施文方法、文様構成のまとまりと言った点で安定性が見られる。そして前段階のもので最も異なる点は、区画状文交叉部刺突文が加わることである。しかしこの段階におけるこの文様は、一部分の区画状文交叉部にのみ押捺されているもので、その施文において規則性が見られない。以上のようにこの段階は、野島式終末段階のものが新たな文様要素が加わったことにより、新型式に転換した段階にあると言える。

第2段階

この段階は先に述べたようにさらに2段階に分けられるものであり、第3章の本文中の分類ではa、bに細分した。

a段階（第55図⑥～⑩）

器形、文様の要素とその構成において鶴ヶ島式の特徴となるものがほぼ出そろう段階である。器形においては、口縁は外反するものが多くを占め、口唇部は内削げ状のものが大部分となる。胸部のくびれ状態は顕著なものとなり、それに伴い土器の大形化の傾向が見られるようになる。また口縁上部から見た形が方形を呈するような特異的器形も見られるようになる。文様においては、縦位・横位区画状文の文様要素に第1段階のものに新たに降起線文、微降起線状文が加わり、充填文では文様要素の種類は変わらないが、押し引き文の割り合いが多くなり、逆に細い沈線文の割り合いが非常に少なくなる。また文様の施文方法が多様化し、施文工具としてヘラ状工具の使用が多くなる。文様構成においては、文様帶内における縦位・横位区画状文の相互関係にまとまりが見られ、安定したものとなると同時に横位区画状文の複雑化する傾向が見られる。そして区画状文交叉部刺突文も施文において規則性が見られるようになり、安定した文様となり、同時に文様構成において大きな部分を占めるものとなっている。以上述べてきたこの段階の特徴を具体的な資料により見てみると、⑥は②と系統的つながりの強いものと考えられるもので、両者を比較すると、⑥は丁寧な文様が施文されており、特に横位区画状文は複雑化するとともに、縦位区画状文により縦割りされた各区画内における文様構成に規則性がみいだせる。⑩は上段文様帶の縦位区画状文が強調されて施文されているもので、その延長上の口縁にはこの時期特徴的な突起を作り出している。

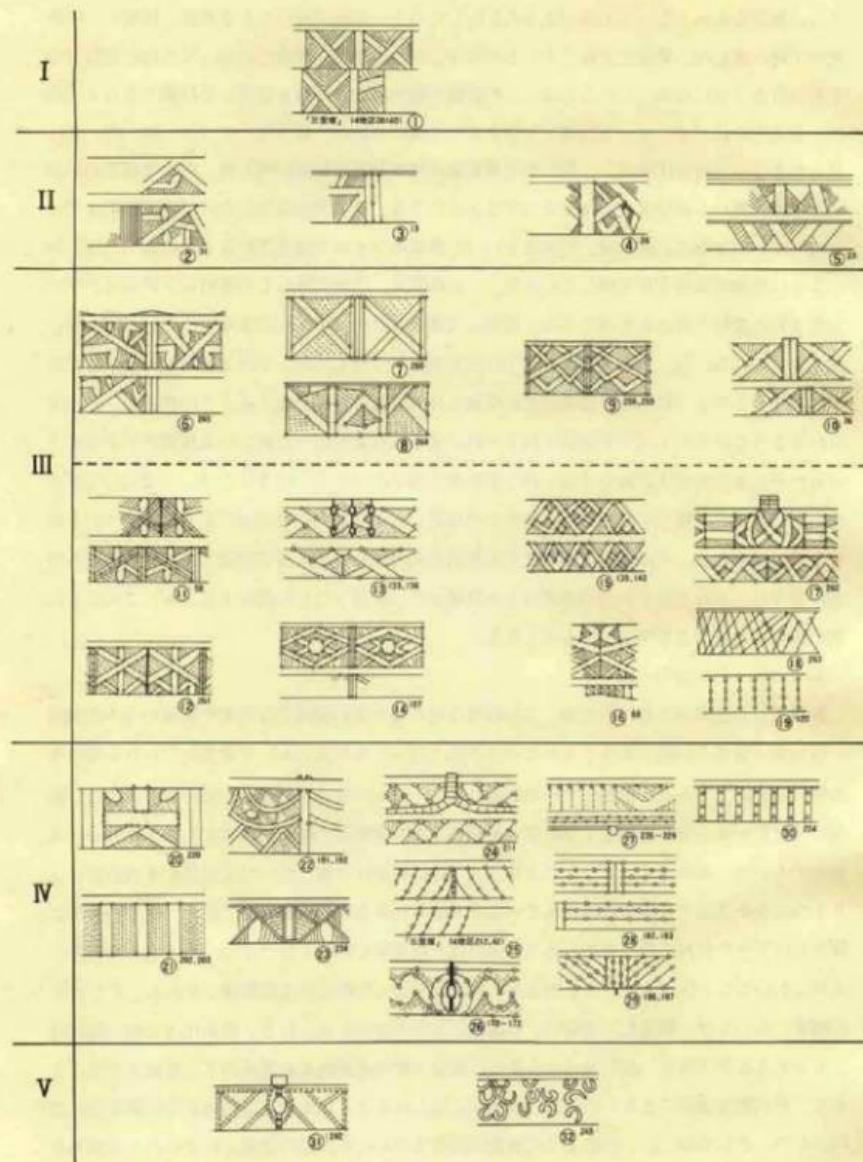
b段階（第55図⑪～⑯）

この段階はa段階のものがさらに発展を遂げたものであり、鶴ヶ島式土器の最も発展した段階である。器形においては、口唇部の内削げ状のものがより多くなり、胸部のくびれ状態も

さらに顕著なものとなって土器がより大形化してゆく。文様においても多様化、複雑化、精練化が1段と進むが、精練化されてゆくものの中には、省略化、簡素化と言った方向に進むものも見られるようになる。このことは、この段階が鶴ヶ島台式の最も発展した段階であると同時に、衰退化がはじまっている段階とも言える。文様の多様化、複雑化としては、⑪、⑫、⑬に見られるように縦位区画状文に新たな文様要素の独特な降起線文が使われ、同一文様帶において性格の異なる縦位区画状文が存在するようになる。横位区画状文においては前段階までの直線的なものでなく、弧状文、円形文といった曲線的なものが施文されるようになり、⑭、⑮のように複雑な文様を作り出しているが、この弧状文、円形文はむしろ省略化、簡素化の中から生まれた文様と言えるものである。反対に文様の省略化、簡素化によるものとして⑯、⑰、⑱が上げられる。⑯、⑰の場合は從来下段文様帶であったものが、上段文様帶に施文されたものであり、このような上・下段文様帶の交換もこの段階の特徴と言える。この他には、⑲に見られるような把手の出現や指頭状工具とそれによる压痕文といった新しい文様要素の出現が上げられる。また充填文においては、押し引き文の割り合がさらに多くなり、二連式の工具を用いると言った多様化が見られる。以上この段階においては、前段階まで見られるように、縦位・横位区画状文、充填文、区画状文文叉部刺突文が同じ歩調の基で発達してきた段階のものとは異なり、それぞれの独自の歩調により発展または衰退した段階と言える。このことは次の段階においてより明らかなものとなる。

第3段階（第55図②～⑩）

Ⅳ類とした土器がこれにあたる。この段階は鶴ヶ島台式の特徴的な器形や文様の基本的構成の崩壊期と言える段階であり、またなぞり手法と言った後型式において発展が見られる新たな文様の出現期でもある。器形や文様の崩壊にはいくつかの方向が見られ、器形においては、胴部のくびれが級くなるものとくびれ部の幅が狭くなり文様帶の幅が狭まるものとに分かれる。前者のものは、前段階までくびれにより上・下段に明確に分離していた文様帶がその衰退により1つに合わさって文様が描出されていると考えられるものである（②、⑩）。後者のものは、後型式に引きつかれて行くものであり、後型式の特徴的な器形を作り出して行くものである。文様においては、区画状文に押し引き文、刺突文と言った新たに文様要素が加わる。そしてその構成においては、簡素化、省略化、強調化の3つの傾向が見られる。簡素化は文様の模式化とも言えるものであり、⑩に見られるように縦位・横位区画状文が從来のような施文方法によるが、形式的な構図によるもの、⑤、⑪～⑩に見られるように施文方法自体非常に簡素化しているもの、そして②、③、⑩のように横位区画状文のみにその傾向が見られるものなどがある。省略化のものについては、⑩のように横位区画状文が描出されてないもの、⑩、⑪～⑩のように充填文が描出されていないもの、②、⑩のように区画状文文叉部刺突文が省略されているものがある。強調化の傾向にあるものとしては、⑩のように縦位区画状文が発達したものや、⑩



第55圖 第2群土器文様模式圖

—⑩に見られる区画状文上の刺突文があげられる。また簡素化の傾向として上げた⑪、⑫、⑬～⑭の横位区画状文は、その強調化ともつながるものと言える。つまり、この段階における複位区画状文、横位区画状文、充填文、区画状文交叉部刺突文の簡素化、省略化は言いかえるならば、1つの文様帶内において特定の文様の強調化されたものと言え、その強調化された文様はさらに簡素化傾向をたどり後型式へ引きつがれて行く。しかし区画状文交叉部刺突文は、この段階で消滅してしまい、後型式では全く見られない文様である。ここでこの文様の発生から消滅までの推移を見て行くと、鶴ヶ島台式土器型式の中で大きなメルクマールとなる文様と言える。つまり鶴ヶ島台式の特徴的な器形、文様要素、文様構成がほぼ確立された第1段階においてこの文様の発生が見られる。しかしこの段階において、この文様は、まだ未熟なものであるが、その後の鶴ヶ島台式の発展に伴いこの文様は文様構成において大きな位置を占めるようになる。さらに崩壊期の第3段階においても、この文様が強調され施文されているものが多いことから、鶴ヶ島台式土器において重要な文様であったと言えよう。

(3)茅山下層式土器（第55図⑪⑫）

第V類とした土器群がこれにあたる。この土器群は鶴ヶ島台式の第3段階のものと関連が深いものであり、器形においてはほぼそのまま引きついでいる。しかし文様においては文様要素として隆起線文、刺突文、押し引き文、なぞり手法による凹線文が多く使われ、文様構成においては鶴ヶ島台式第3段階で述べた強調された文様のみが引きつかれている。⑪は充填文が全く省略され、区画状文のみにより文様構成されたものである。この土器は鶴ヶ島台式の幾何学的な構成がよく引きつかれているが、蛇行状に施文されているものもあり、完全に鶴ヶ島台式の文様構成が崩れ去ってしまっているものも見られる。⑫は前段階では区画状文内に施文されていた凹線が区画状文の省略により、凹線のみの文様構成によるものである。この他にもこれと同じように充填文のみが強調され施文されているものも見られる。この2つの土器を含めた第V類土器は、鶴ヶ島台式の影響を強く残しているもので、茅山下層式の古い段階のものと言える。これ以後、文様構成はさらに簡素化の傾向にあり、また縄文が文様要素に加わり、文様帶も上段のみとなり、新しい段階へと移行していく。

以上本遺跡B地点より出土した第2群土器を基に、鶴ヶ島台式土器の細分について述べてきた。そして鶴ヶ島台式は、特徴的文様要素による幾何学的文様構成に区画状文交叉部刺突文が加えられたことにより、安定した文様を作り出した第1段階、さらにその文様が発展しさざまな文様構成を作り出して行く第2段階、そして基本的文様構成が崩壊して行く第3段階の3つの段階に大きく細分できるものと考える。なお第2段階については、さらに発展の段階により2段階に細分できるものと考える。

4. 施文方法と施文工具について（図版44～46）

最後に、鶴ヶ島台式土器に施文されている文様の施文方法と施文工具について若干述べていきたい。

鶴ヶ島台式土器の文様は、先に述べてきたように区画状文、充填文、区画状文交叉部刺突文の大きく分けて3つの文様により構成されていると言える。そしてそれらの文様要素としては、それぞれの文様のみに見られる特徴的なものもあるが、隆起線文、沈線文、押し引き文、刺突文の4つの文様要素により大半のものが描出され、その他に凹線文、圧痕文、刻み目等のものが加わる。このうち先に上げた4つの文様要素は、施文工具やその使われ方の違いにより、さらに変化に富んだ文様を作り出している。これらの施文工具、施文方法について、各文様要素ごとにみてみる。

(1) 隆起線文

この文様は、鶴ヶ島台式土器においては区画状文のみに用いられているもので、さらに微隆起線状文(20)、細隆起線文(1)、隆起線文(28～30)に分けることができる。微隆起線状文は両側をヘラ状の施文具により入念な磨き(削り)をかけることにより、粘土をわずかに盛り上げて作りだされたものである。細隆起線文にもこれと同様な作られ方のものもあるが、多くのものは細い粘土紐を器面に貼り付けることにより作り上げられたものである。隆起線文もこれと同様の施文方法であるが、粘土紐がかなり太くなり、そしてその上に指頭や指頭状工具による圧痕文と刻み目が施文されているが、これは単なる装飾の意味だけのものではなく、多分に粘土紐を器面に充分付着させるための手法と考えられる。以上のものとは別に、19にみられるように、2条の間隔の狭い平行沈線をはしらせ、その間に刺突文を施文することにより細隆起線文状に作り出されたものも少数ではあるがみられる。

(2) 沈線文

沈線文は細、中、太位の3つに分けることができる。細いものは車状の施文具によるもの(4、21)と非常に細い円形、または半截竹管によるもの(1)とがある。中位のものでは、多くのものは円形、また半截竹管の表皮面を器面にあてて引いたものであり、22に見られるような半截竹管による平行沈線のものは少ない。22の場合は、半截よりむしろ3截に近いものと思われる平行する沈線の幅の広いわりに浅い沈線である。また特異的なものとして、6に見られるように円形または半截竹管を2本合わせて引いた2連式のものもある。太い沈線は、竹管によるもの(2、3)とヘラ状の工具によるもの(4、21、30)とに分けられ、竹管によるものは3のように表皮面をあてて引いたものと、2のように竹管の切断面が器面に対して垂直に当て引いたものとがある。2の場合は、区画状文、充填文とも同一の工具により、この施文方法により描出され、また刺突文も同一の工具によるものと思われるもので、1つの施文工具によりすべ

ての文様を描出している。以上沈線文においては、円形または半截竹管によるものが、太さに関係なく、大半を占めている。

(3)押し引き文

押し引き文も沈線文と同様に細、中、太位に分けられ、その内容においても沈線文とはほぼ一致する。ただ押し引き文を施文する場合、まず工具を器面に強く押し当てるといつた方法の繰り返しにより作り出される文様であるため、押しが浅いものや引きが長いものは沈線状のものとなり(24、25)、逆に押しが深いものや引きの短いものは刺突状のもの(12、18、26)となり、その区別が困難なものもある。また2連のものも押し引き文には多くみられ(11～14)、13の場合は細い円形竹管による2連のものを2列づつ施文している。

(4)刺突文

刺突文は、区画状文交叉部に押捺されるものと充填文として押捺されるものとがある。前者の場合その大半のものは円形竹管をそのまま押捺しているが、4の場所は押捺によるものではなく、ヘラ状の工具により押しひねったものである。また27は、竹管の代わりにハイガイの貝殻頭部によるものである。充填文においては、円形竹管を押捺したもの(15、16)、半截竹管を押捺したもの(17)、多截竹管を押捺したもの(18)、車状の施文工具により押捺したもの(9、30)など施文具において多種にわたる。

(5)その他

その他のものとして、5、23にみられるように指頭状工具によるなぞりの手法がある。また28、29のように压痕文もみられる。

以上のものが本遺跡でみられた鶴ヶ島台式土器における施文工具、施文方法の主なものであるが、実際は、個々の土器ごとに施文工具、施文方法が少しづつ異なっており、製作者の個性と言えるものがうかがえる。しかし1つの土器の中においては、文様要素もそうであるが、施文工具においても、それほど多くのものを用いず、せいぜい多いもので2～3個ぐらいのものであり、その使い方を工夫して多くの文様を作り上げている。

5. おわりに

本遺跡の資料を中心として鶴ヶ島台式土器について述べてきたが不充分な点も多々あることと思われる。本遺跡では層位的観察が困難であったため、型式学的観察に基づいた分析方法を進めてきた。そして一地域における分析であるため、今後他の地域との対比をも充分に行ない、さらに今回の分析結果を検討、修正して行く必要があるものと考える。また前後型式である野島式、茅山下層、上層式についても、今日に至ってなお不明な点が多く、充分に検討の余地を残しているものと思われ、それらも充分に分析がなされた後に、再び鶴ヶ島台式土器の細分について考えてみたい。

第2節 遺跡の性格と特徴

— 遺物包蔵地について —

新東京国際空港予定地内に所在するいずれの遺跡からも多量の縄文時代早期の遺物が検出されていることから、縄文時代早期の大規模な遺跡群がこの地域に所在していると言えよう。このことは当時の生活において、この地域が利根川水系と太平洋水系の分水嶺であり、あまり開拓を受けていないといった地形的立地条件や植物相、動物相といった環境的立地条件が適していたものと考えられる。

それぞれの遺跡の共通して言えることは、土器・石器といった遺物の出土数が極めて多く、それに対する住居跡の数が少ない。そして遺物の多くは、住居跡等の遺構からの出土したものでなく自然層中からのものである。このような遺跡は遺物包蔵地と呼ばれているものであるが、今回本遺跡の調査および整理作業を行なっていくうちに、単純な数の計算上で遺物の数と遺構の数が合わないこれらの遺物包蔵地において、どのような当時の人々の行為・行動が考えられるのか、No14遺跡の第1次、2次調査結果により、本遺跡におけるそれらについて推論してみたい。

本遺跡での縄文時代早期の遺物分布地点は、55地区、56地区、A地点、B地点（14地区も含む）の4地点が確認された。そしてこの4地点は、時期的に沈線文期の55、56地区、A地点と条痕文期のB地点とに分けられる。

55、56地区、A地点の遺物組成を見ると、土器は田戸下層・上層式が主体となり、その他、撚糸文土器や中期、後期のものが見られる。石器組成では、55地区は石鏃5点、剥片2点、56地区は石鏃3点、石皿、磨石、スクレイバー、剥片、A地点は石鏃3点、疊310点、剥片といった多少の内容においての違いはあるが、単純な組成であると言える。遺構については、55地区は炉穴2基、土壙2基、56地区は竪穴住居跡1軒、炉穴2基、A地点は遺構は検出されなかった。この3地点に共通して言えることは、土器・石器の量が少なく、土器では主体となっている沈線文系土器でも多くて3、4個体分である。石器組成では、いずれも貧弱なものと言える。そしてそれらの分布状態は小規模なものである。このような性格をもつ地点における人間の行動を推測すると、非常に小規模な集団による、短期間に営なまれた場所と考えられる。この3地点の有機的関連は不明であるが、遺物の内容にいくつかの違いが見られるのは、その地点における機能的（人間の行動様式）な違いによるものと考えられる。

B地点は、先の3地点とは対照的に出土遺物量、分布範囲が大規模なものであり、それもほぼ鶴ヶ島台期の一型式期間に営なまれた地点である。遺構としては、住居跡3軒、炉穴4基、竪穴状遺構2基、陥し穴状土壙2基、土壙1基が検出され、このうち陥し穴状土壙以外は明らかに遺物と結びつくもので、その分布状態は、炉穴1基と土壙の他は台地の南側縁辺部に

集中している。これに対して遺物の分布は、遺構集中部より北側へ梢円状に広がりをもつものと南側の谷に続く傾面部に見られる。前者の場合は、遺物密度の濃い部分は遺構集中部よりやや北側に離れた所にある。後者について詳細なことは不明であるが、傾斜地のくぼみ部分に多量に遺物が見られたとされている。このように遺構と遺物の分布に多少ずれが見られる。包蔵層から出土した遺物のうち土器は30,000点近い数量が検出され、個体数として捉えても数百以上を数えるものと思われる。しかしその分布状態については、時間差や人間の意図的行為によるものとは考え難く、無作為に捨てられたものと考えられる状態である。しかしこれだけ多くの土器が集中して見られることはどうしてであろうか。つづいて石器・剝片類の分布について見てみると、B地点では土器と多少異なった分布が見られる。石器・剝片類の場合いくつかの小さな集中地点がいくつか見られ、土器のように単に散在している状態ではない。この集中地点の組成はいずれも剝片・碎片類が大半を占め定形的石器は少數である。このB地点における石器組成を見ると、石錐が多量に出土しており、また剝片・碎片類の数も非常に多い。そして、この石錐と剝片・碎片類の石材別割合を見るとほぼ一致する。このことは、この地点において石錐やいくつかの石器がこの地点で盛んに製作されていたと考えられ、完形品も遺物包蔵層から多く出土し、住居跡からの完形品はもちろん、剝片・碎片類の出土が少ないことから、石器製作は、先に述べた剝片・碎片類を主とした小規模な集中部に関係の深い場所において行なわれたと思われる。このように石器・剝片類の分布状態を見ると、散在した状態のものとなんらかの意図的行為（この場合石器製作）によるものとが見られる。それでは土器の分布状態を含め、2つの異なる遺物分布がこの地点に見られることをどう解釈すべきなのであろうか。

まず土器について考えるならば、数百以上の土器は、3軒の住居で生活していた人々によりのみにより廃棄されたものとは数的に見て考えられない。また住居跡自体に拡張、修復の跡が見られないため居住期間はそれほど長期的なものとは思われない。よってこの大規模な遺物包蔵地の土器の多くは、他の地から持ち運こられたものと考えるのが妥当と思われる。この他の地については具体的に指述するのは困難であるが、隣接するNo60、61、62遺跡において多量の鶴ヶ島式土器が検出され、やや離れたNo67遺跡でも条痕文系土器が多量に検出されている。これ以外の多くの遺跡からも量的に少ないが茅山系土器が確認されている。しかし、現在は未整理のものが多く各遺跡の詳細な内容について不明である。今後これから遺跡の整理作業が進むに従い鶴ヶ島式の遺跡のあり方、性格が明らかになり各遺跡間における相互関係も充分に把握されることが可能と思われる。

つづいて石器・剝片類のあり方について見ると、先にも述べたように散布しているものと集中しているものとに大きく分けられ、前者は定形的石器にその傾向が強く、後者は剝片・碎片類にその傾向が強く見られる。そして後者には石器製作の場に関連が強いものと考えると述べた。しかし前者の場合をどう考えるべきであろうか。定形的石器は完形品が多く見られ、この

場所での製作が考えられる石器において特に言える。これらの散在した分布状態を土器と同様に単に捨てられたものとは考えられない。むしろなんらかの原因により置き去られたと考える方が妥当的と思われる。

以上のようにB地点について見てきた。この地点のように比較的短い期間に営なされたものであるが、遺物の量が多く組成も複雑であることからベースキャンプ的様相の地点であったと思われる。この縄文早期後半は狩獵・採集経済が生産基盤となっている縄文時代の中にあっても、労働用具や方法において未発達な段階であったと言える（注8）、それは小規模集団により定住性をあまり持たずたにえず移動をよぎなくされたと思われ、そこで、No.55、56地区、A地点のように極く一時的キャンプ地とB地点のようなベースキャンプ地が存在した可能性は充分考えられる。そのベースキャンプ地と考えられるB地点において、この地で使用された土器はもちろん、他の地で使用された土器についても持ち帰られこの他に廃棄されたものと考えられ、またそれらが廃棄された場所は、同時にこの遺跡での生産の場所とも言える所であり、つまりこのB地点の遺物包蔵地はなんらかの当時の規制を受けていた生活の場と考えられないであろうか。これは貝塚遺跡における、遺構集中部と貝層集中部とに見られる社会的規制関係と重ねて考えられないであろうか。

またB地点の特徴としてすでに述べているが、石器製作が盛んになっていたと考える。この時期の他の遺跡においてこれほど多くの石器や剣片・碎片類の出土例はあまり見られない。つまりこのB地点は石器製作と言った1つの機能をもったベースキャンプと言える。このことは、ベースキャンプ的単位の遺跡ごとに1つまたは複数の生産的、社会的機能をもっていたことが窺え、それぞれが有機的関連により結びついていたと予想される。

以上のように今回の調査で筆者自身、最も疑問に感じた点につき自分なりの解答を得てみたが非常に論拠の薄いものであることは筆者自身自覚している。しかしこの疑問点を考えるためにあたって、過去調査され報告された遺物包蔵地遺跡に対して遺物収集的傾向が強く、それのみで終わってしまうものが多いように思われる。近年、開発も規模が大きなものとなり、台地全体における遺構、遺物のあり方が明確に把握できるようになってきた中で、単に個々の遺物にのみに研究が注がれるのではなく、いかなる人間の行動、行為により遺物包蔵地が作り出されたのかと言ったマクロ的研究も必要な段階にきていると思う。

注1 山内清男 「縄文土器型式の細別と大別」 昭和13年

注2 岡本勇 「三浦市鶴ヶ島台遺跡」『横浜市立博物館研究報告』5 昭和36年

注3 注2と同じ

注4 関野哲夫 「鶴ヶ島台式土器細分への覚書」『古代探査』 昭和55年 関野氏のこの論文は、岡本勇氏以後の鶴ヶ島式土器研究において充分に評価されるものと思われる。筆者自身、今回の報告書をまとめあげるについて氏の研究に負う所が大である。

注5 條文・横位区画状文の区別については本文中でも述べてきたが、非常に開運性の強い文様であると言える。しかしそれら文様の系統的発展を見て行くと、異なった様相を展開して行くものであり、本來的性格の違う文様と言える。よってこの2つの文様を分離して考えることが必要と思われる。

注6 千葉県北總公社「No.14道跡」「三里塚」昭和46年 この報告書においてこの土器は茅山下層式とされているが、文様その他の特徴から野島式終末期に位置づけられるものである。

注7 開野氏は、船ヶ島台式を古、中、新期の3段階に分けている。いくつかの点において異なるが、ほぼ開野氏の分類されたものに比定される。

注8 岡本勇氏はこの時期を縄文時代の社会と文化において大きく上昇した時期であるとしている。そしてその傾向は茅山式土器の時期に強く見られると述べられている。本道跡の船ヶ島台期においても後段階に影響を及ぼす変革期と言えるが、生産形態や社会形態はまだ前段のものが強く残っていたと思われる。

結語

新東京国際空港内 No14遺跡の調査結果には、先章までに詳細に紹介し、あわせて若干の問題点についてふられている。ここではNo14遺跡の調査結果を取りまとめ、結語としたい。

発掘調査

No14遺跡の発掘調査は昭和53年4月1日から翌54年3月31日まで、班長 杉山晋作、調査研究員 野口行雄、山口直樹を調査担当者として実施した。調査面積は20,800m²である。この調査に先立ち、昭和45年から46年にかけて、財團法人 千葉県北総公社によって第一次調査が実施され、「三里塚—新東京国際空港団地内の考古学的調査」(財團法人 千葉県北総公社、1970. 11. 1)に報告されているので、参照していただきたい。

今回の発掘調査の方法は基本的にグリッド法とし、縄文時代遺物包含層までについては2m×4mのグリッド、先土器時代石器群については2m×2mのグリッドによって確認調査を実施した。確認調査の結果は、本調査の面積及び調査方法等を検討する基礎資料として用いた。現在調査中の遺跡においてもグリッドを2m×2mとしたものの、原則的には、その方法を踏襲している。

なお、詳細については、第1章第2節に述べられているとおりである。

遺跡

千葉県の北部にひろがる北総台地は標高40m前後の平坦な台地である。三里塚地域においては、利根川、栗山川の支流によって開拓を受け、複雑な地形を呈している。No14遺跡は空港予定地内の他の遺跡と同様三里塚地域に含まれ、利根川に注ぎ込む根古名川の支流取香川の源流点に位置する。また、本遺跡の南側には太平洋に流入する栗山川の支流である高谷川の源流がある。即ち、本遺跡は広くみると、利根川水系及び太平洋水系の分水界に位置していると言えるのである。

新東京国際空港は分水界に建設された空港である。従って、これに関わる当文化財センターが行なっている一連の発掘調査は分水界の遺跡を対象としていると言えよう。現在も継続中である一連の発掘調査において、分水界の原始古代の社会、文化を明確することが重要な研究テーマの一つとして与えられていると言うことができる。当然、三里塚地域にあるNo14遺跡においても、同様のテーマが与えられていると考えねばならない。

昭和45~46年度にかけて実施された第1次の空港関連調査によって、No14、No55遺跡をはじめとして10か所の遺跡が発掘調査され、先土器時代の石器群、縄文時代早期の土器群が多量に出土した。この傾向は昭和51年度以降に行なわれている発掘調査においても大きく変化することがない。これは分水界という立地条件や動・植物相という環境条件が、先土器時代、縄文時代早期の人々の生活に適していたためといえよう。しかし個々の遺跡を考えると、No14遺跡

では鶴ヶ島台式土器を主体としていたり、No.67遺跡において三戸式土器が多く出土している等、内容的に多様性も認められるのである。このことから三里塚地域を分水界の一つのまとまった地域と想定した場合、その中にある個々の遺跡の分析及び遺跡相互の関連性を検討することによって、分水界における先土器時代・縄文時代の社会・文化を知ることができると言えよう。残念ながら遺物の整理はやっと手がついたばかりである。すべての整理が終了した時には、分水界における原始時代の社会・文化の一端を知ることができるはずである。これによって、三里塚地域全域を発掘調査した意義があつたと言えよう。この意味でNo.14遺跡の調査報告書は、三里塚地域における一里塚と位置付けられよう。

ところで、考察編において、野口行雄は遺跡の性格と特徴と題し、No.14遺跡における遺跡の内容からその問題点を論考しているが、今述べた点から三里塚地域における遺跡論の予察と考えられる。

遺物と遺構

昭和45~46年にかけて実施された発掘調査において、No.14遺跡群は、台地基部より、14地区（遺跡）、55地区（遺跡）、56地区（遺跡）の3地区（遺跡）に分けられている。

今回発掘調査したNo.14遺跡は、14地区の北側に位置している。

No.14地区からは、次の遺物・遺構が出土している。

先土器時代

尖頭器・搔器・削器・細石核？・剥片等

縄文時代

遺物 土器（鶴ヶ島台式・茅山下層式・他に後期の縄文式土器）、石器（有茎尖頭器・石錐・石皿・磨石・凹石・敲石等）

遺構 壁穴住居跡3軒（鶴ヶ島台式）、炉穴2基、壁穴3基

今回、発掘調査したNo.14遺跡からは次の遺物・遺構が出土した。

先土器時代

切出し形石器（1点）・剥片・炭化物片集中地点5か所

縄文時代

遺物 土器（早期鶴ヶ島台式を主体とし、他に前期・中期・後期の縄文式土器）、石器（石錐・スクレイバー・剥片・石斧・礫器・石皿・磨石・凹石等）

遺構 炉穴1基、陥入穴状土壤2基、土壤1基

その他の時代

遺物 鉄滓・古銭（50数点）

遺構 溝（野馬堀）1条

先土器時代

先土器時代の遺物については、第1次調査では、細石核・尖頭器・剝片等が多数出土しているにもかかわらず、今回の調査では切出し形石器が1点、剝片が数点出土したのみであった。これは、No.14遺跡が、14地区の北側に隣接しているうえに、55、56地区にくらべ台地の奥部にあるという地形的理由によるのであろうか。

ところで、本遺跡から炭化物片の集中地点が5ヶ所発見された。No.1地点は第Ⅷ層を中心とし、数本の炭化材を中心に炭化物片が広範囲に散在していた。No.2地点は第Ⅳ層から第Ⅵ層にかけて、6×4mの範囲で検出された。No.3地点は第Ⅳ層から第Ⅶ層にかけて検出された。分布範囲は削平部分があり確認できなかった。No.4地点は第Ⅳ層を中心とし、径約2.5mの範囲に散布していた。No.5地点は第Ⅳ層からⅥ層にかけて、径約2mの範囲で検出された。石器が付近より出土したのは、No.2・No.3地点である。No.2地点では安山岩製の剝片が3点、No.3地点では頁岩製の剝片が3点出土した。

ここで、特に注意をしなければならない点は、炭化物の集中地点の意味するところである。山火事等により山林の立木が焼け落ちたために炭化物が周辺に散布したものであったのであろうか。あるいは、先土器時代人が営んだ跡のようなものであったであろうか。炭化物の集中地点を人為的なものととらえるか、あるいは、自然的なものととらえるかによって、考古学的意味が変わってくるばかりでなく、その取扱い方がまったく異なってくるのである。即ち、炭化物集中地点が人為的なものであるならば、これを遺構に準ずるものとして取扱う必要が生じてくる。

さて、本遺跡の炭化物集中地点には、燐跡等で認められる焼土及び焼けた跡が認められなかった。また、No.1地点では数本の炭化材を中心に炭化物片（炭化粒）が散在した状態で検出された。剝片は、No.2・No.3地点で出土したが、炭化物集中地点と積極的に関連性を持たせるという根拠もなかった。このようなことから、我々は本遺跡の炭化物集中地点を人為的なものではなく、自然的なものと考えている。

No.14遺跡より出土した炭化物片は、空港に隣接した他の遺跡と比較にならないほど多量に出土した。このため、発掘調査を実施するに当たっては、このことが何を意味しているのかについて、特に注意を払ったのであるが、残念ながら十分なる成果を得られなかった。炭化物片（炭化粒）を1点1点注意深く発掘調査することは、No.14遺跡の発掘調査を通じて非常な労力を要することがわかった。現在、とりまかれている埋蔵文化財の環境において、ただ万全と発掘調査を行うことは許されない。他方、炭化物集中地点をすべて自然的なものとばかり結論することができないのも事実である。従って、炭化物集中地点の発掘調査に当たっては、少なくとも、本調査に移行すべきか否か、又その性格を事前に確認しておくことが重要なこととなる。たとえば、炭化物集中地点が人為的なものである根拠をして、焼土又は焼けた跡、礫、石器の存在等が考えられよう。そして、本調査を実施した場合には、次の点に留意する必要があろう。

- (1) 炭化物片の散布の範囲
- (2) 焼土又は焼けた跡の有無
- (3) 碓が出土しないかどうか
- (4) 石器が出土する場合、その組成と出土のしかた
- (5) その他

縄文時代

今回の発掘調査において、検出された遺構は炉穴1基、陥れ穴状土壤2基、土壤1基である。昭和45~46年度調査にくらべて極めて貧弱であった。

遺物としては、土器、石器、土製品が出土した。その分布の状態からA、B地点に分けることができた。

A地点からは、土器が約500点出土した。第1群（田戸下層式、田戸上層式）、第2群（広義の茅山式）、第4群（五領ヶ台式）、第5群（後期初頭）に分類される。石器の出土総数は313点であり、石錐3点、礫片310点よりなる。

B地点からは土器が約16,000点出土した。そのうち鶴ヶ島台式土器が95%を占めていた。出土土器については、第2群（早期）、第3群（前期後半期）、第4群（中期）、第5群（後期）に分けられる。第2群は第I類（野島式）、第II類（鶴ヶ島台式の形成段階）、第III類（鶴ヶ島台式の完成段階）、第IV類（鶴ヶ島台式の崩壊段階）、第V類（茅山下層式）、粗製土器等に分類されている。さらに、第II類、第III類については、縦位・横位区画状文を縦起線文・沈線・線い沈線によって作出したものとA~C種に細分している。これらの土器は第II層b（新期テフラ）、c（暗褐色土層）より出土しており、型式学的に分類されたものである。特に、第2群土器、鶴ヶ島台式土器については、考察編に詳述されているので、参考とされたい。また、土器の詳細は第2章に記されているので省略したい。

B地点より出土した土製品は土鍊1点のみである。時期を判断することは困難であるが、中期に属するものであろう。

石器は石錐、スクレイバー、ノッチ状石器、石斧、石皿、磨石、凹石等であり、石錐が70%を占める。石錐の80%は黒曜石製であり、第2群に属するものと考えられる。

石器について注目すべき点は、剥片・碎片が石器総数の80%におよび、集中地点が数か所認められることである。石器集中地点から碎片が多く認められるとともに、石核が数点出土することから、石器製作跡的性格をもつものと考えられよう。No.14遺跡では石製品の70%が石錐であるという事実から考えると、この石器集中地点は石錐製作跡であった可能性が強い。先土器時代において石器の分析が重要な研究課題であるのは当然のことであるが、縄文時代においても石器の分析を軽視すべきではない。本遺跡から出土した縄文時代の石器については、整理段階で製作技術を検討してみたが、十分な成果を得られなかった。他の遺跡において、同様な

性格の石器群が出土した場合には、石器製作技術という側面から検討したい。

その他の時代

本遺跡から鉄滓が6点出土した。No14遺跡の北側をめぐる支谷は根古名川の支流であり、その源流点にあたる。この支谷を取りまき、No60、61、62遺跡が所在している。No60遺跡の傾斜部には取香製鉄跡、No61遺跡の南傾斜部には御幸細製鉄跡が認められる。また、No62遺跡の傾斜部にも製鉄炉は発見されなかったものの、多量の鉄滓が出土している。このように河川の最も奥まった支谷、即ち河川の源流点に近いところからまとまって製鉄に関連した遺物・遺構が検出されるのは、注目すべきことである。

なお、これに関して文化財センター研究部では古代の製鉄技術等について集中的に検討を加え、「千葉県文化財センター研究紀要 第7号」として発行してある。詳細はそれにゆずる。

この他、永樂通宝、寛永通宝が第1層中から出土した。

また、溝も1条検出された。当地域には古来より牧場が営まれていた。この溝もそれに関連した野馬塹であろう。本地域については現在も発掘調査を実施中である。牧場の全体像について記述するのは、将来にゆずらねばならない。

まとめ

No14遺跡については昭和53年度に発掘調査を実施し、昭和56年度に整理を行い、昭和57年度に本報告書を刊行するに至った。この間、発掘調査に従事した調査研究員も人事移動に伴ない他の発掘調査に携わっている。幸い、発掘調査を担当していた野口行雄調査研究員が整理を行う機会にめぐまれ、本書の大部分を執筆し、あわせて考察を加えてくれた。論考等について不十分な点もあると思われるが、氏に対する温い御批判をお願いするところである。

さて、No14遺跡では縄文時代早期鶴ヶ島式土器が多数出土した。これは三里塚地域において例のないことであるばかりか、周辺域においても稀なことである。このことによってNo14遺跡は縄文時代早期鶴ヶ島式土器研究において全くことのできない遺跡の一つと位置付けられよう。また、鶴ヶ島式土器を出土している三里塚地域内の遺跡との比較研究を通して、当該地の遺跡論の研究に全くことのできない資料を提供してくれた。

三里塚地域を含めた分水界の社会・文化の研究はその途についたばかりである。本報告書もその一つと考えられよう。本報告書を発行するにあたり、あらためて、三里塚地域を広域にわたって発掘調査している意味を再認識したい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係諸機関及び調査補助員の方々に厚くお礼を申し上げる次第である。

参考文献

- 赤星直志 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊』1 昭和23年
- 我孫子市教育委員会 「紫崎第4次調査報告書」昭和55年
- 岡崎文喜 古内茂編 「北總古地」りくえつ刊 昭和54年
- 岡本勇 「茅山貝塚」『横浜市立博物館研究報告』1 昭和32年
- 岡本勇 「三浦市鶴ヶ島台道路」『横浜市立博物館研究報告』5 昭和36年
- 岡本勇 「横須賀市吉井城山第1貝塚の土器(1)」『横浜市立博物館研究報告』6 昭和37年
- 岡本勇 戸沢光則 「縄文文化の発展と地域性」『日本の考古学』II 昭和40年
- 岡本勇編 「縄文土器大成」1 早、前期 昭和57年
- 小田静夫 C・T・キーリー 「武藏野公園道路」昭和48年
- 小林達雄編 「縄文土器」『日本原始美術大系』1 昭和52年
- 佐倉市教育委員会 佐倉市遺跡調査会 「石神第1地点」「臼井南」昭和50年
- 杉原莊介 芹沢長介 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部考古学研究報告』第2号 昭和32年
- 関野哲夫 「鶴ヶ島台式土器細分への覚書」『古代探査』昭和55年
- 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査会 「高根北遺跡」「五斗苅遺跡」「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書」昭和51年
- 千葉県北總公社 「三里塚」昭和46年
- 千葉県文化財センター 「佐倉市星谷津遺跡」昭和53年
- 千葉県文化財センター 「No.6遺跡」「木の根」昭和56年
- 千葉市史編纂委員会 「千葉市史」史料編 I 昭和51年
- 戸沢光則 堀越正行 「美濃輪台遺跡-A地点」昭和49年
- 飛ノ台貝塚発掘調査団 「飛ノ台貝塚発掘調査概報」昭和53年
- 所沢市教育委員会 「妙川先土器時代遺跡」昭和49年
- 水澤光一編 「縄文土器大成」2 中期 昭和56年
- 成田市史編さん委員会 「成田市史」原始古代編 昭和55年
- 西村正衛 「茨城県潮来町狭間貝塚(第1次調査)」『学術研究』22号 昭和48年
- 沼津市教育委員会 「元野遺跡発掘調査報告書」昭和50年
- 八王子市春日台遺跡調査会 「春日台下耕地遺跡」昭和49年
- 堀越正行 田川良 「美濃輪台貝塚-B地点」2 昭和50年
- 町田市田中谷戸遺跡調査会 「田中谷戸遺跡」昭和51年
- 山内清男 「縄文土器型式の細別と大別」昭和13年
- 米田耕之助 「土器」「東間郡多古墳群」昭和49年
- 吉田格 「千葉県城ノ台貝塚」「石器時代」第1号 昭和26年

SUMMARY

Background

This is a report of the excavation at Site No.14 of the New Tokyo International Airport. The work began on April 1978 and continued until March 1979, conducted by the Chiba Prefecture Cultural Properties Center.

The site is located at 6 Furugome, Narita-shi, Chiba prefecture, lying on the bluff along the Totsuko stream altitude about 40m. This area forms the watershed of Pacific basin and Tone basin.

The mission conducted by the Chiba-Prefecture Hokuso Corporation had excavated the site in 1971 and exposed artificial remains and features during preceramic and Earliest Jomon Era.

Artifacts and Features

There were found many artifacts and features belonging to Preceramic, Jomon and Historical Era, resulting of excavation of thid season throughout about 2000 square meters, the rest part of the former excavation. Five clusters of charcoal flecks and few artifacts were found from Preceramic layer. Stone implements were composed of kife-like backed blades, kiridashi-type tools, scrapers and pebble tools and flakes.

Artificial remains and features of Jomon were found at two areas, A and B. Potsherds of Area A were mostly Upper and Lower Tado type of Earliest Jomon including Middle and Late Jomon and pebble tools also found. Large quantities of potsherds mostly Ugashima-dai type of Earliest Jomon were distributed over a wide range of Area B. Arrow-heads were common in large number of stone tools from this area including spear-head-like points, scrapers, axes and querns.

There were slag of Heian period and coins nf Edo period from Historical layer.

写 真 図 版

図版 I 遺跡



遺跡全景（航空写真）南より



B地点遠景（航空写真）西より

図版2 遺跡



遺跡近景（南方より）

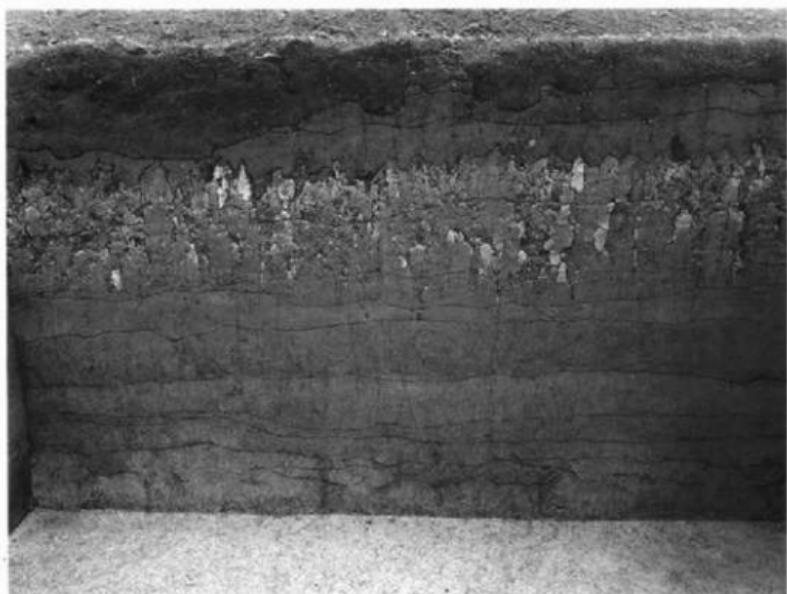


遺跡近景（北方より）

図版 3 層序

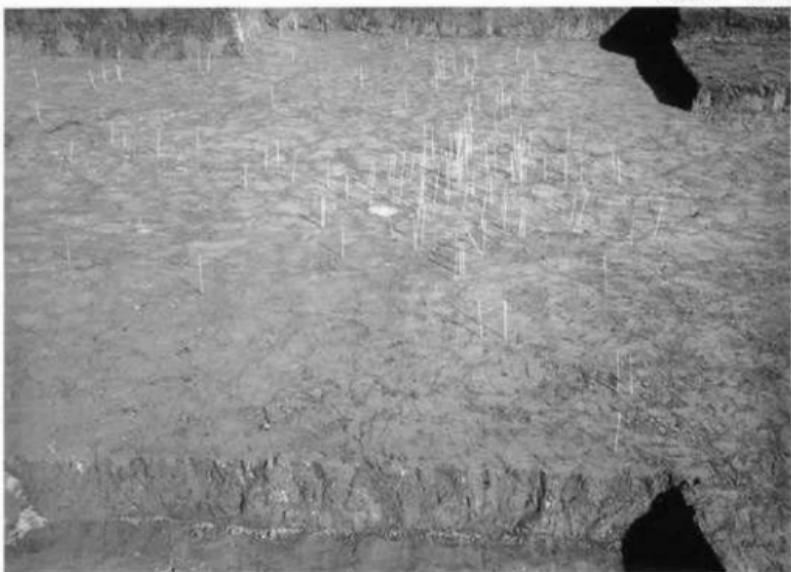


8 E 38 土層セクション



8 G 56 土層セクション

図版 4 遺構



No. 2 炭化物片集中地点



No. 5 炭化物片集中地点

図版 5 遺構

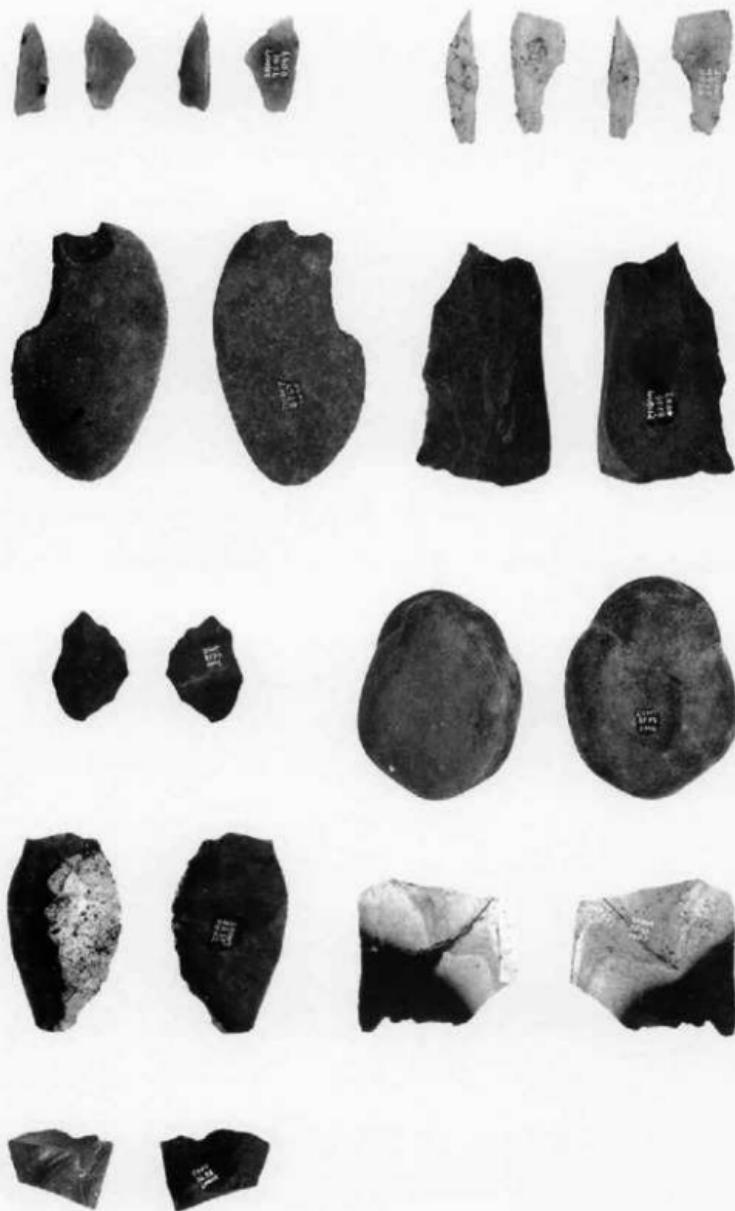


No. 4 炭化物片集中地点セクション



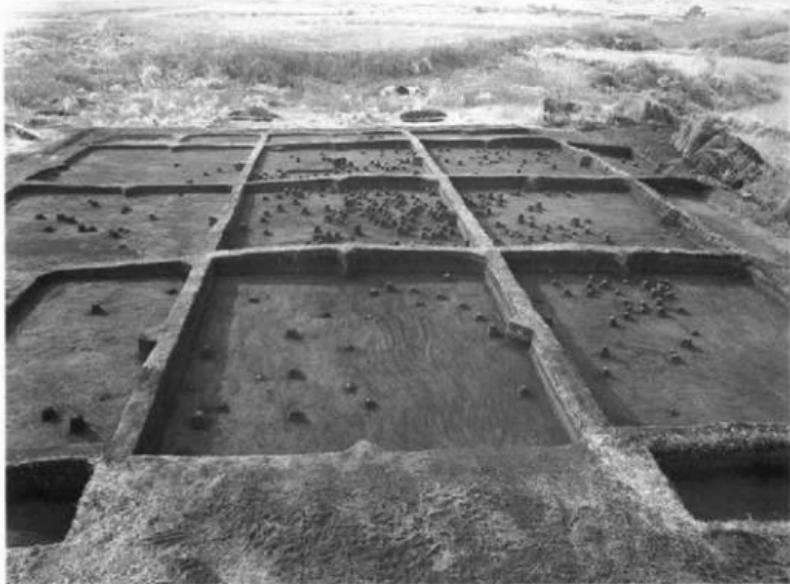
No. 4 炭化物片集中地点

図版 6 遺物

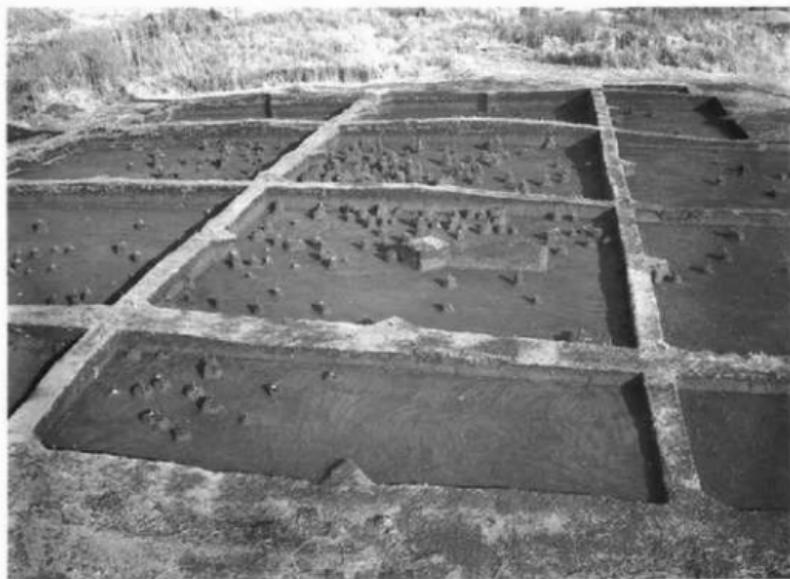


先土器時代遺物

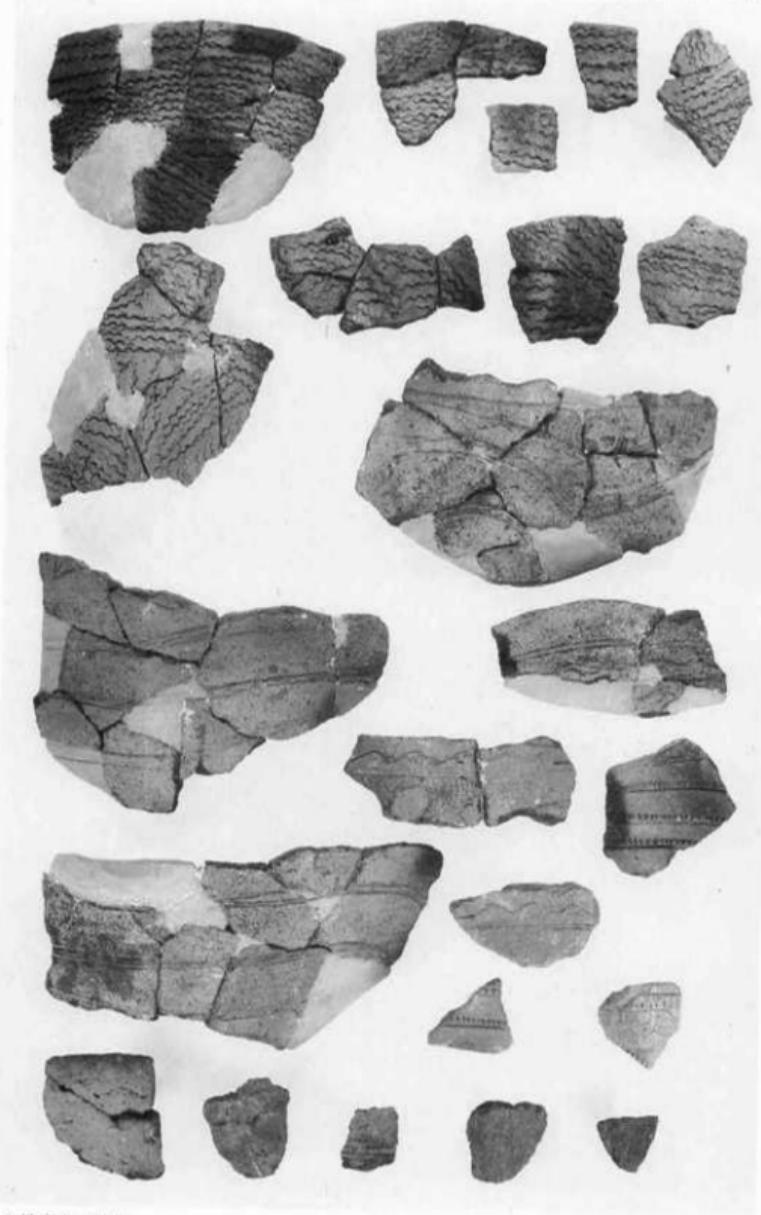
図版 7 造構



A 地点縄文時代遺物出土状況（東より）

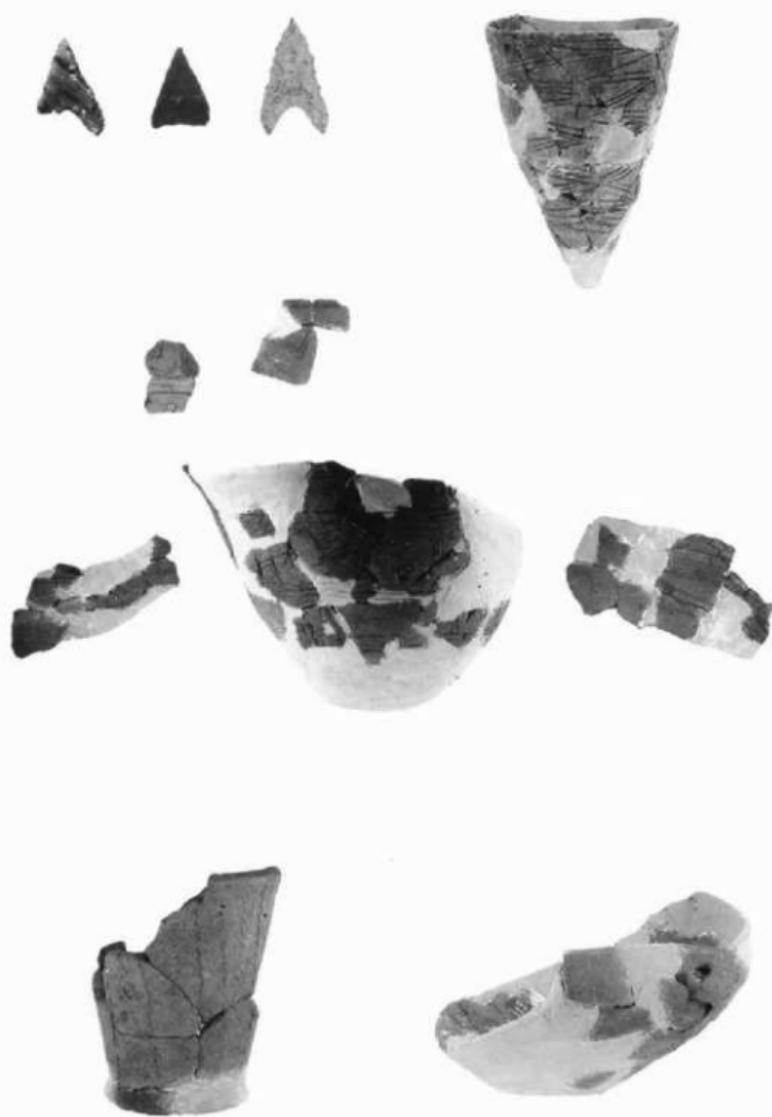


图版 8 遗物



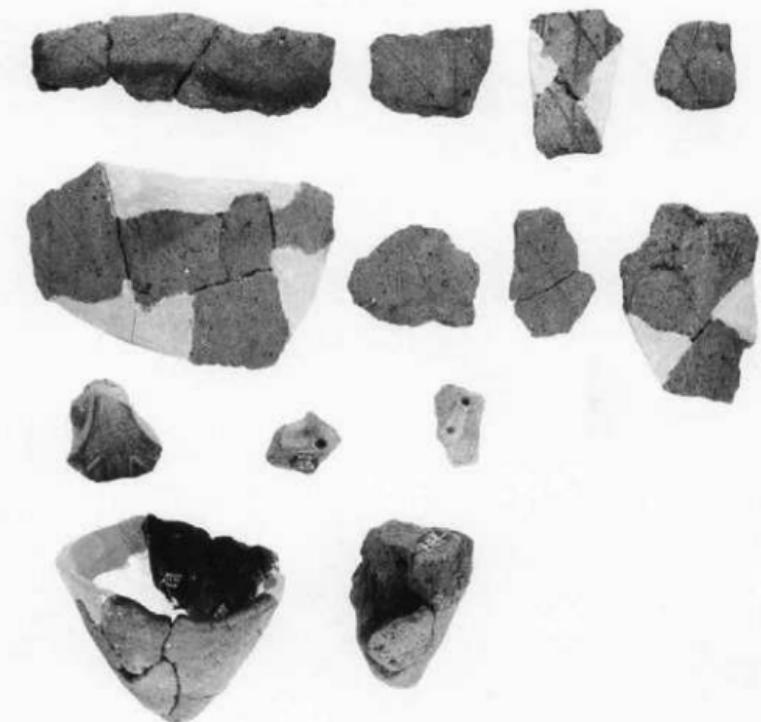
A 地点出土遗物

圖版 9 遺物



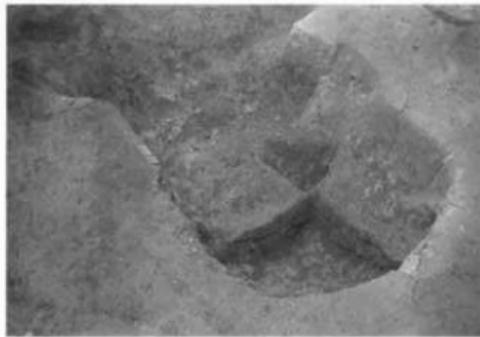
A 地点出土遺物

図版10 遺物



A地点出土遺物

図版II 001遺構



出土遺物

炉部・遺物出土状況

図版12 002遺構



西より



出土遺物



土層セクション・遺物出土状況

図版I3 003遺構



土層セクション



検出状況



西より

図版14 004遺構



土層セクション

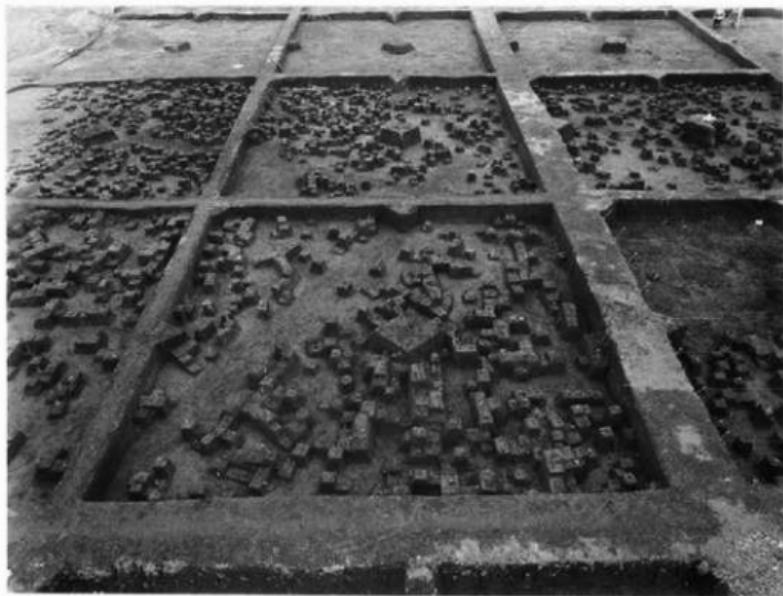


北より

図版15 遺構

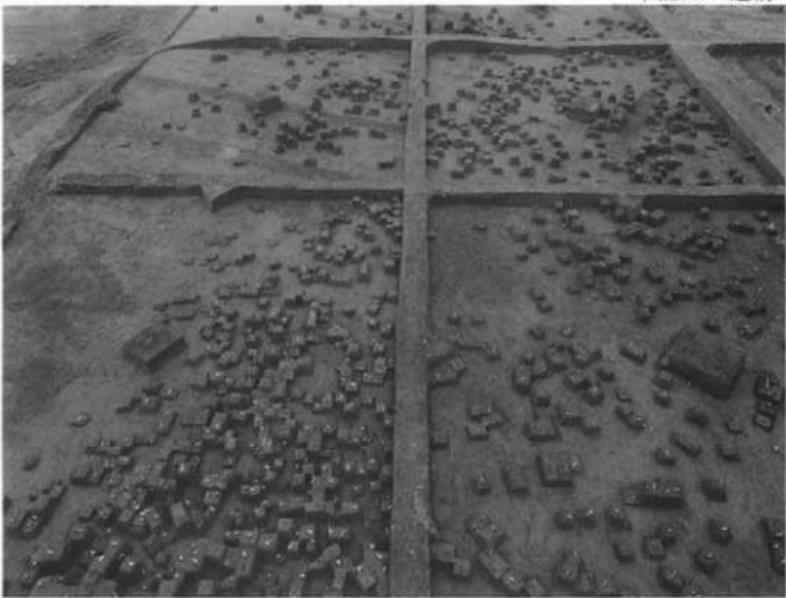


8 G 繩文時代遺物出土状況（南より）



9 F 南側縄文時代遺物出土状況（南より）

図版16 遺構



9 F 北側縄文時代遺物出土状況（南より）



10 F 縄文時代遺物出土状況（北より）

図版17 遺物



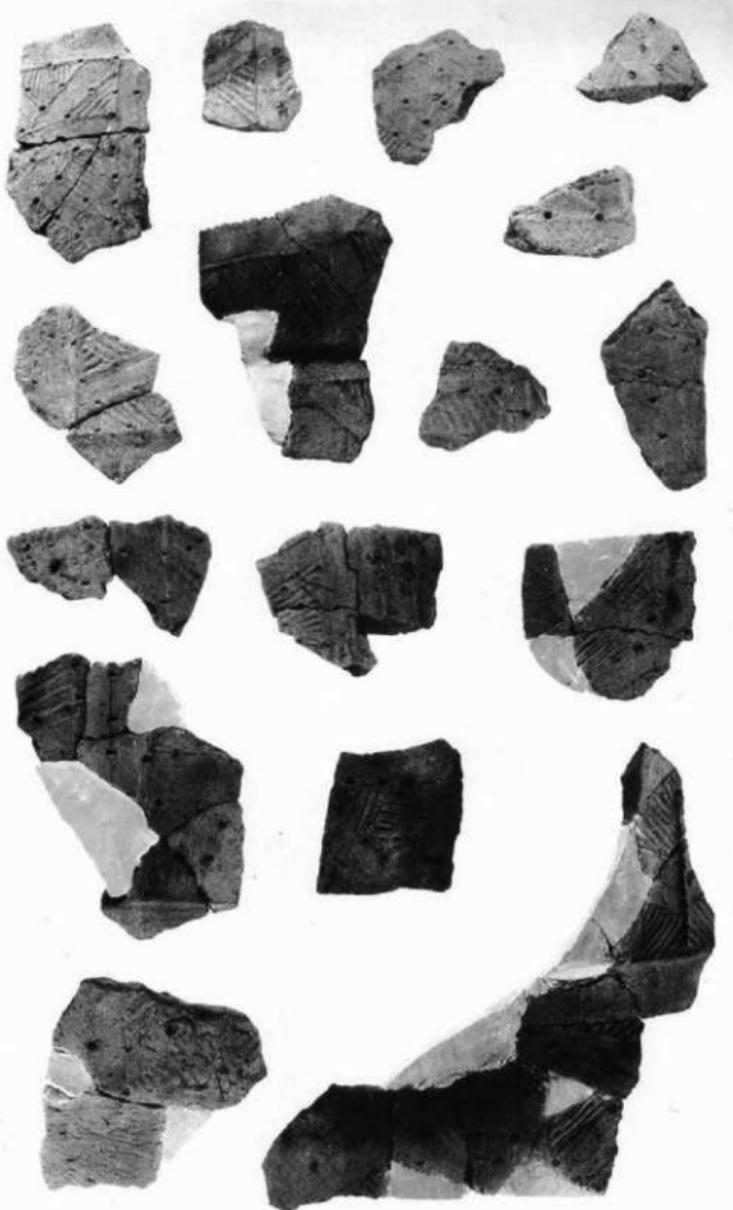
B地点、第2群Ⅰ・Ⅱ類土器

図版18 遺物



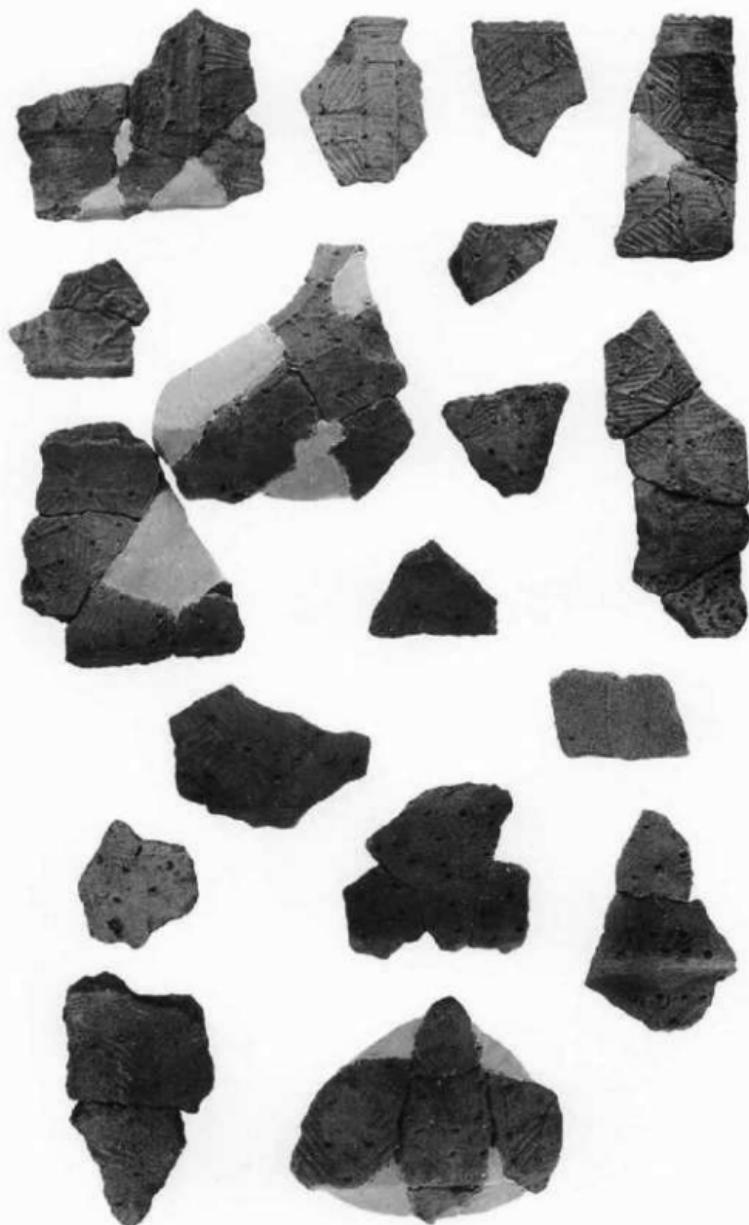
B地点、第2群II類土器

図版19 遺物



B地点、第2群III類土器

図版20 遺物



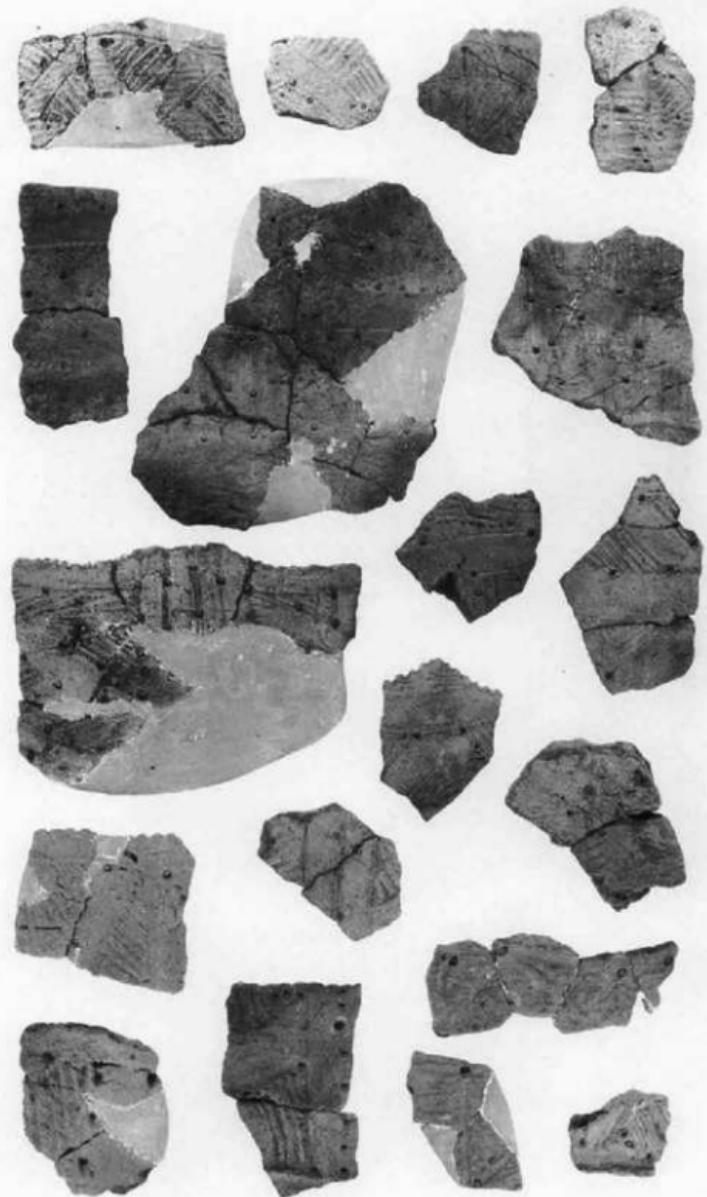
B地点、第2群Ⅲ類土器

図版21 遺物



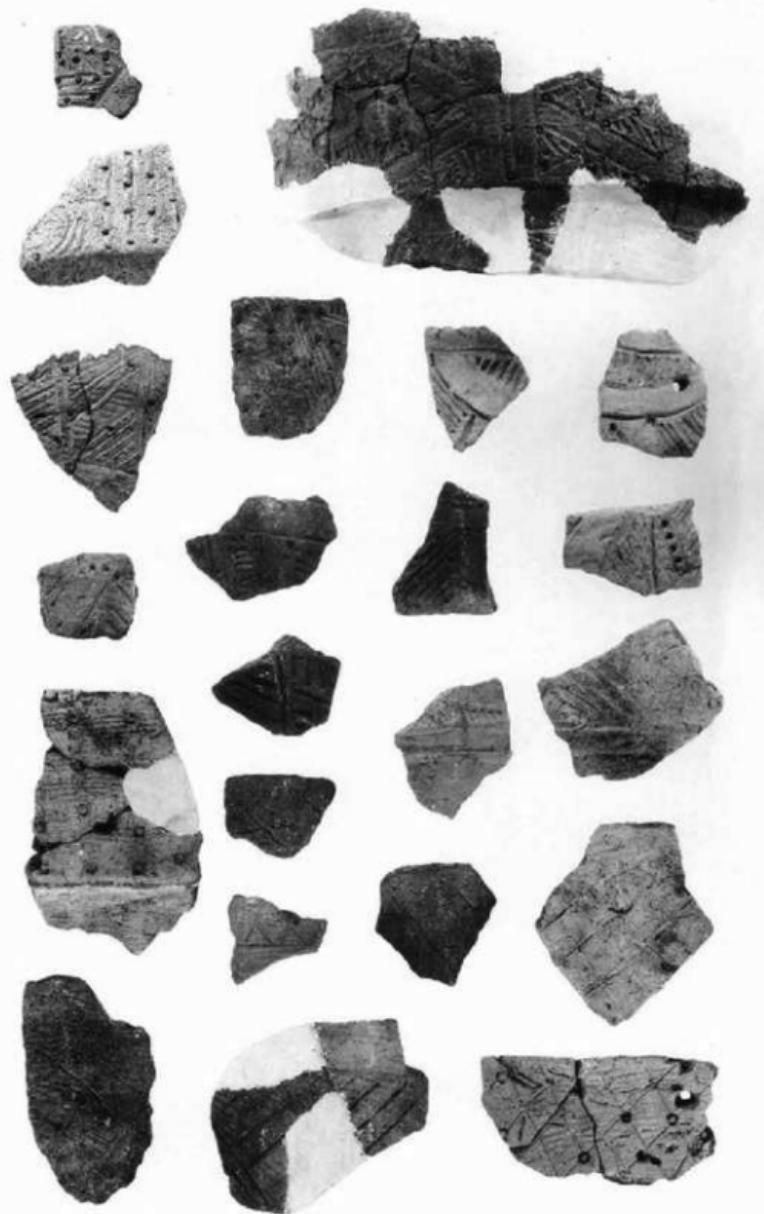
B地点、第2群III類土器

图版22 遗物



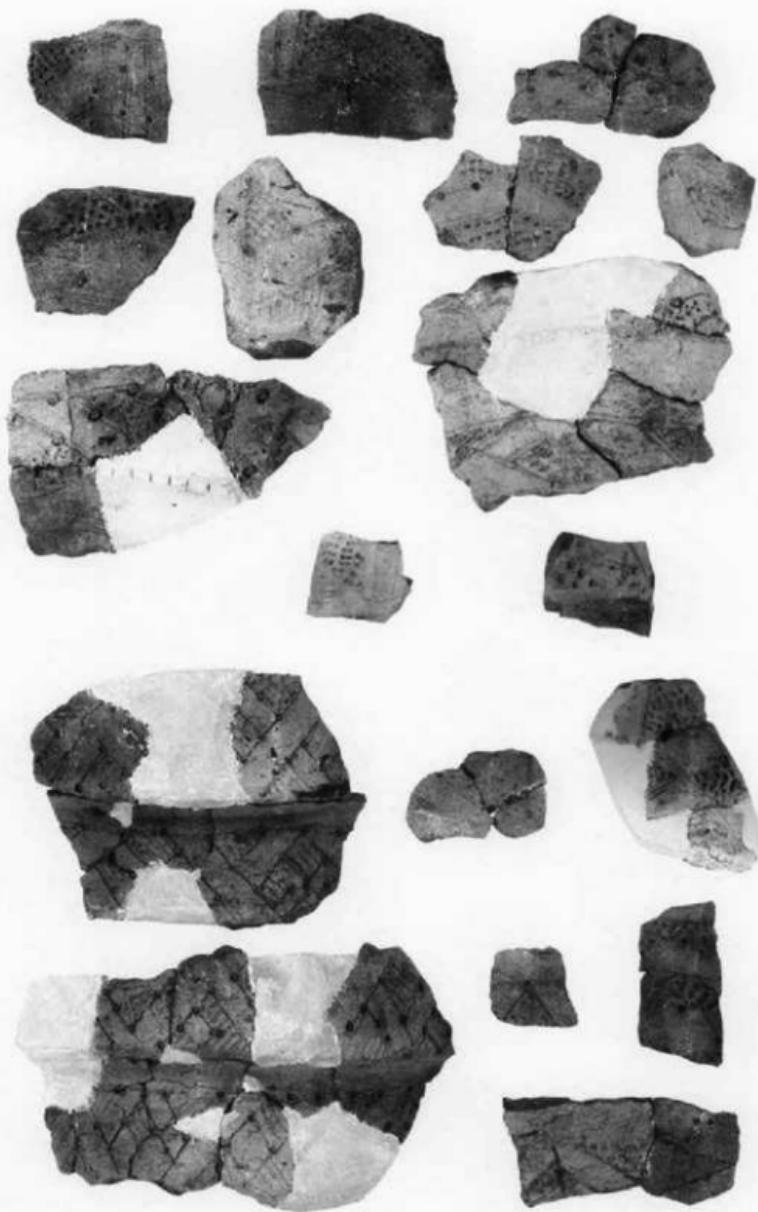
B地点、第2群Ⅲ類土器

図版23 遺物



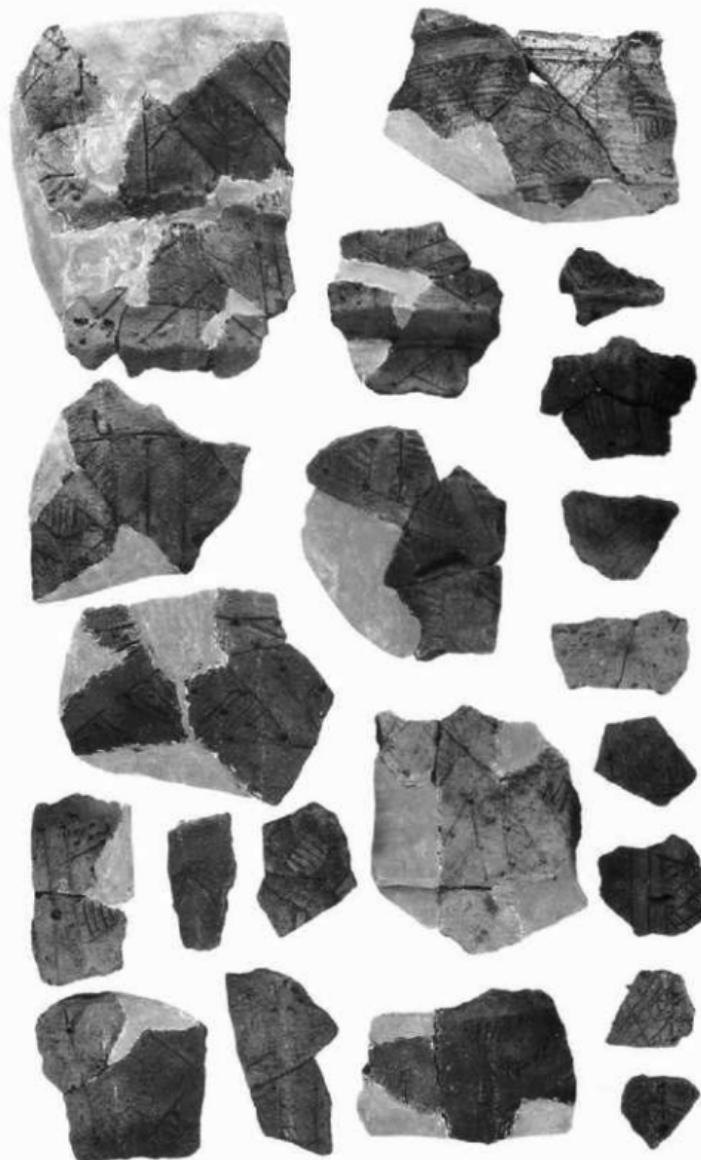
B地点、第2群Ⅲ類土器

図版24 遺物



B地点、第2群III類土器

図版25 遺物



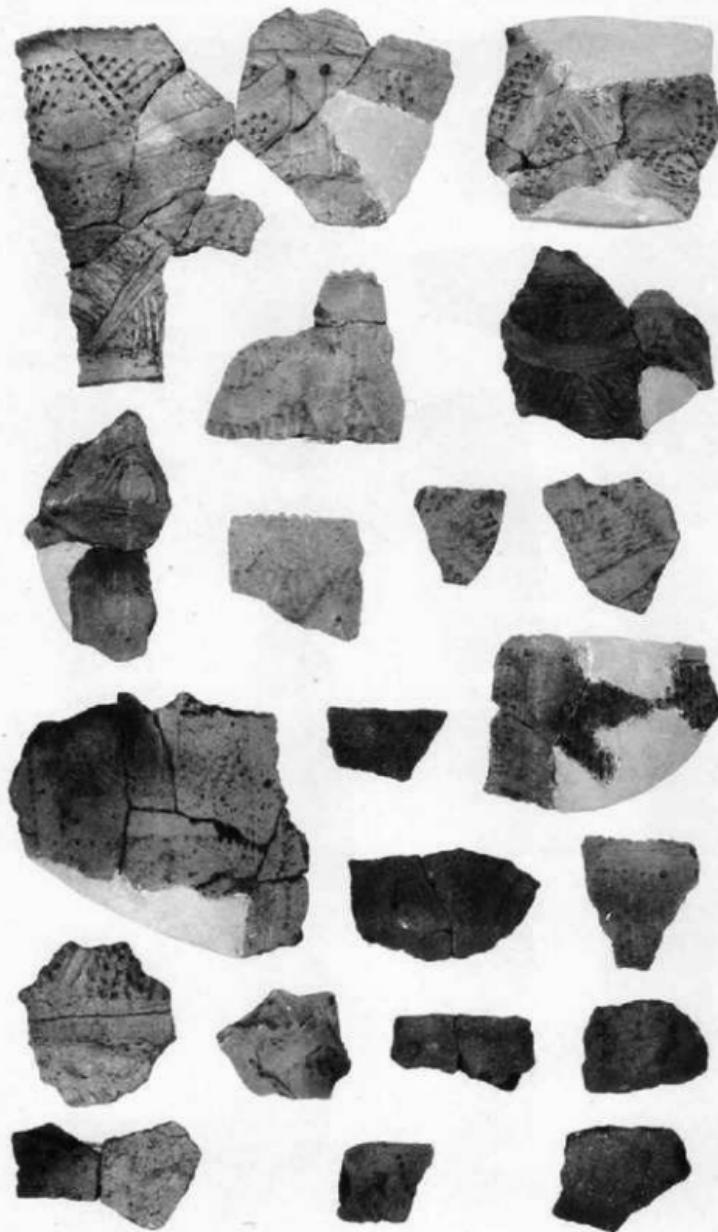
B地点、第2群Ⅲ類土器

图版26 遗物

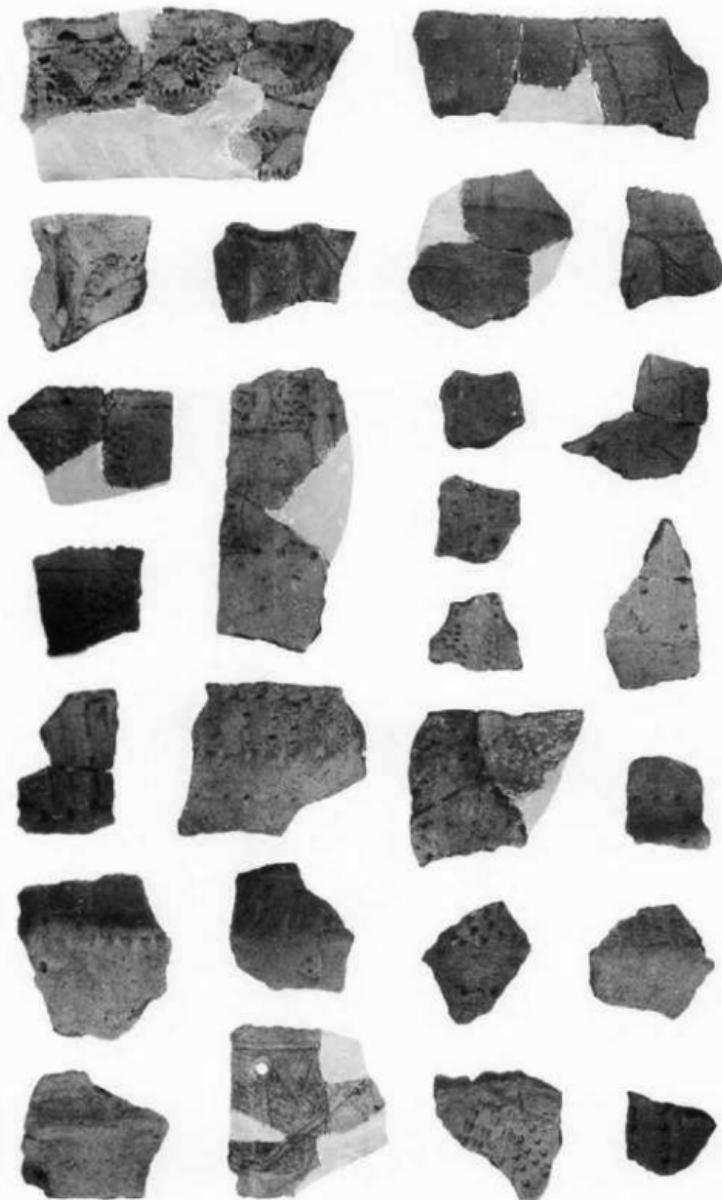


B地点、第2群IV類土器

図版27 遺物

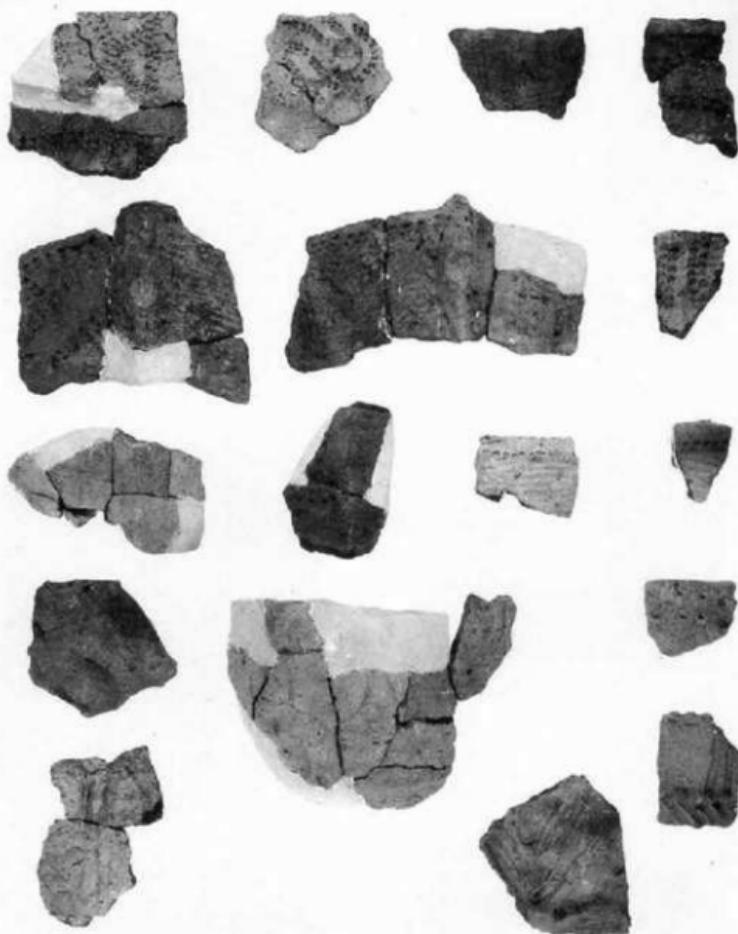


B 地点、第2群IV類土器



B地点、第2群IV類土器

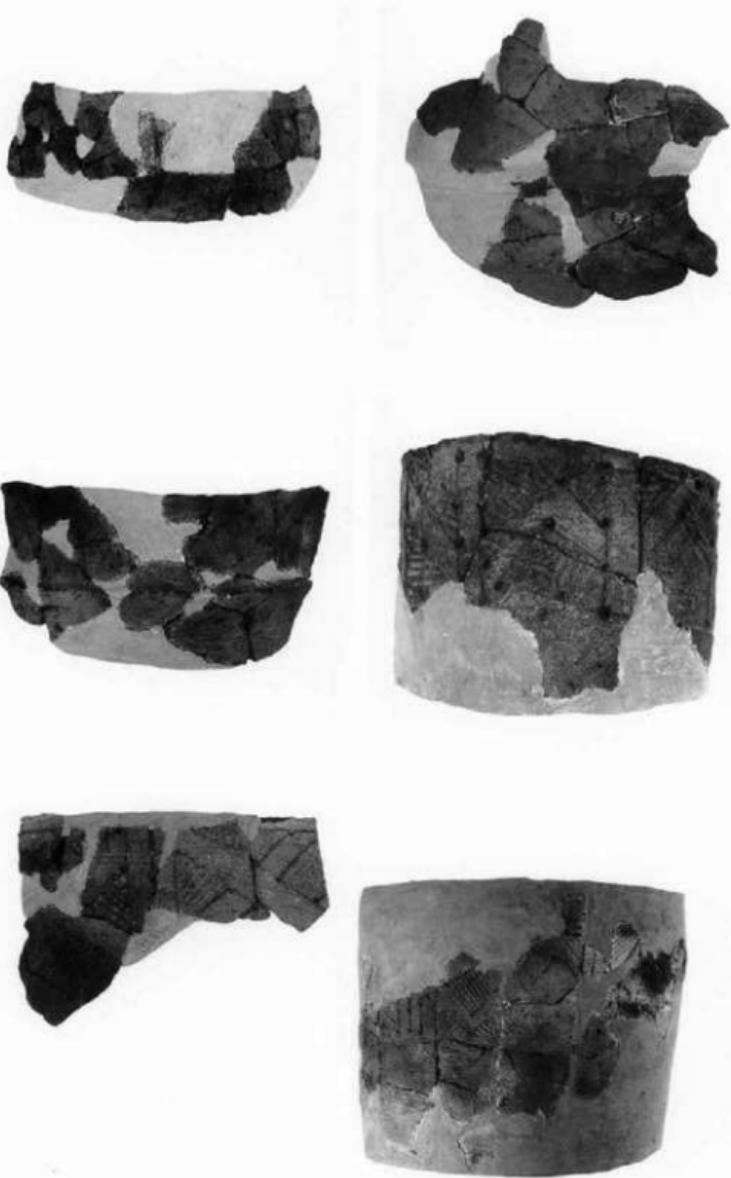
図版29 遺物



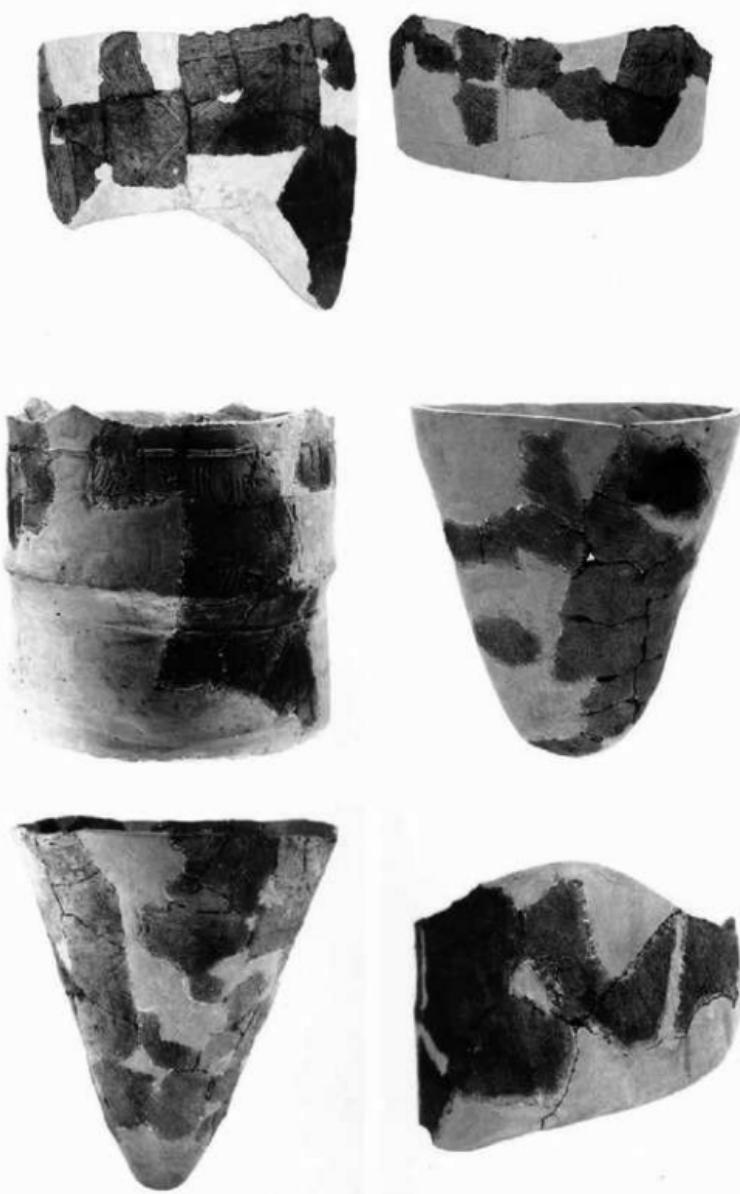
B地点、第2群V類土器



B地点、第2群III類土器（把手）

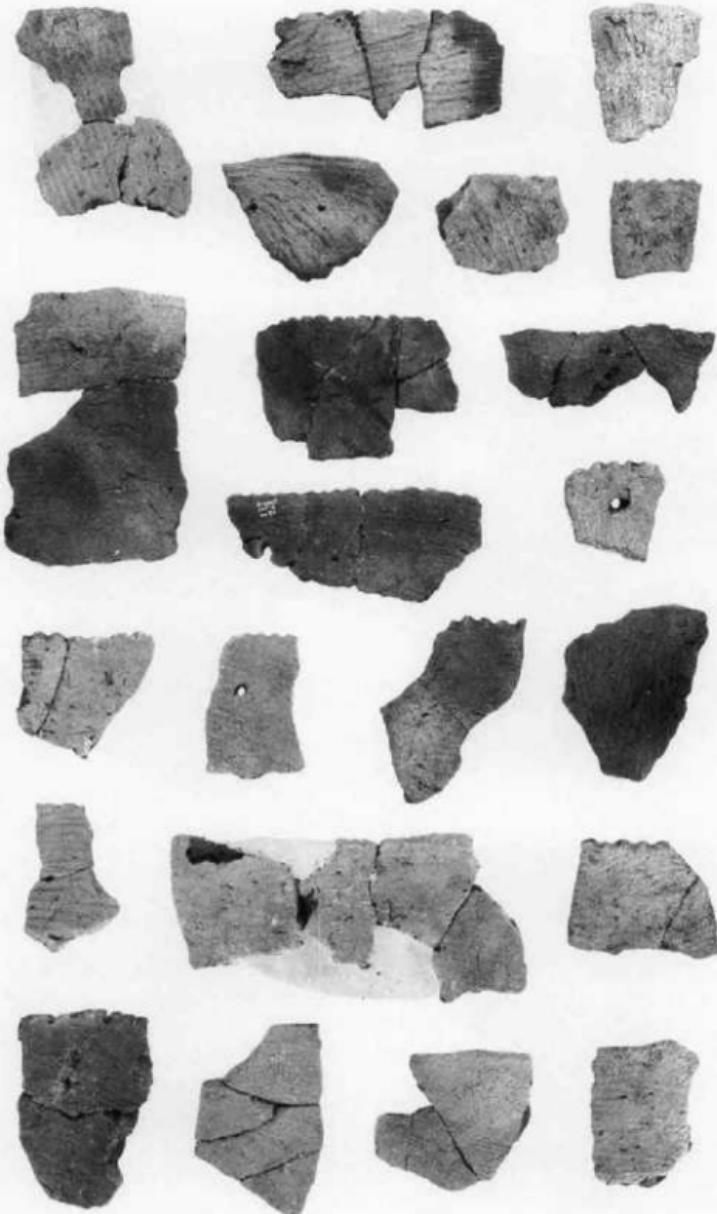


B 地点、第 2 群田類土器



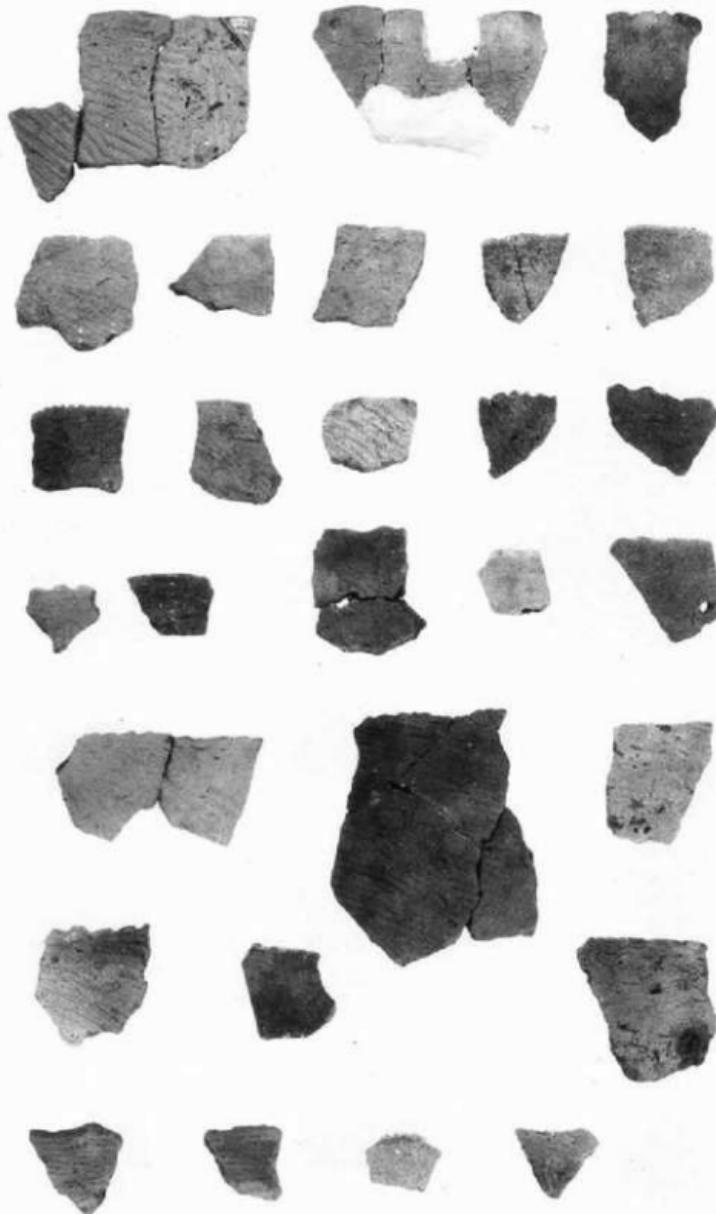
B地点、第2群III類土器及び粗製土器

図版32 遺物



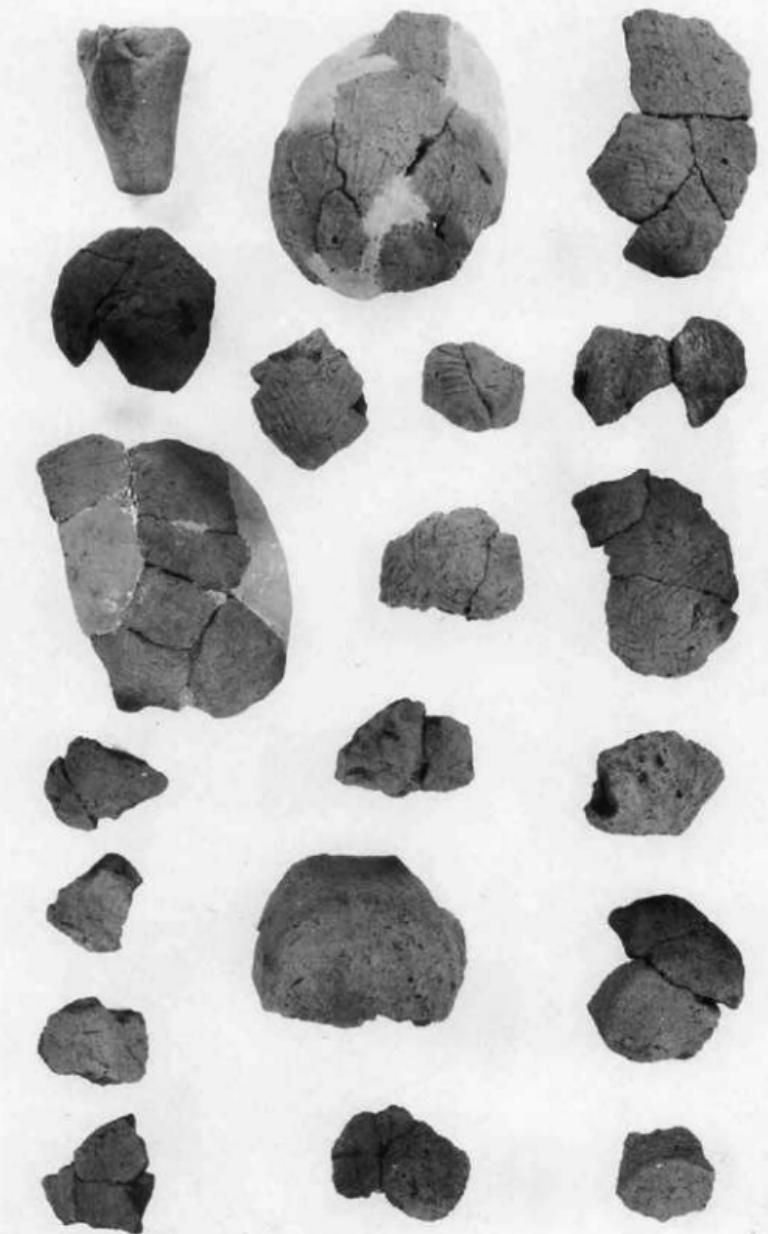
B地点、第2群土器口縁部(1)

図版33 遺物



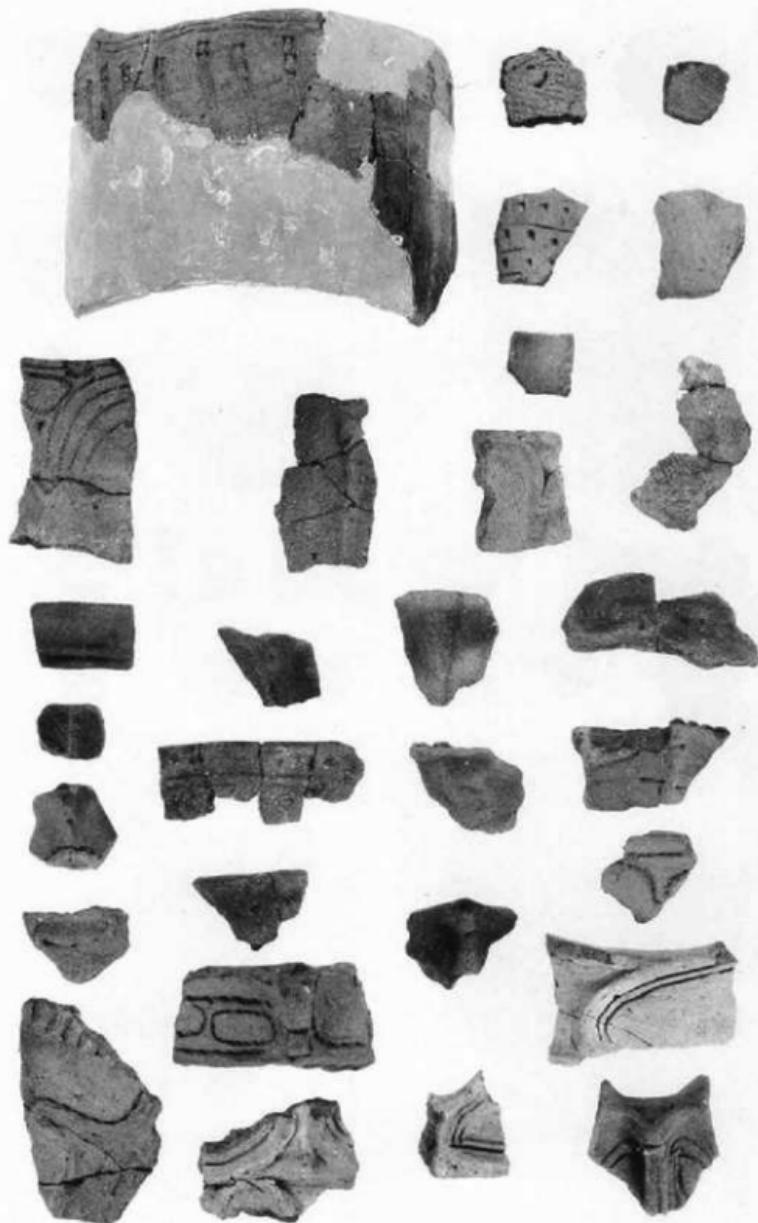
B地点、第2群土器口縁部(2)

図版34 遺物



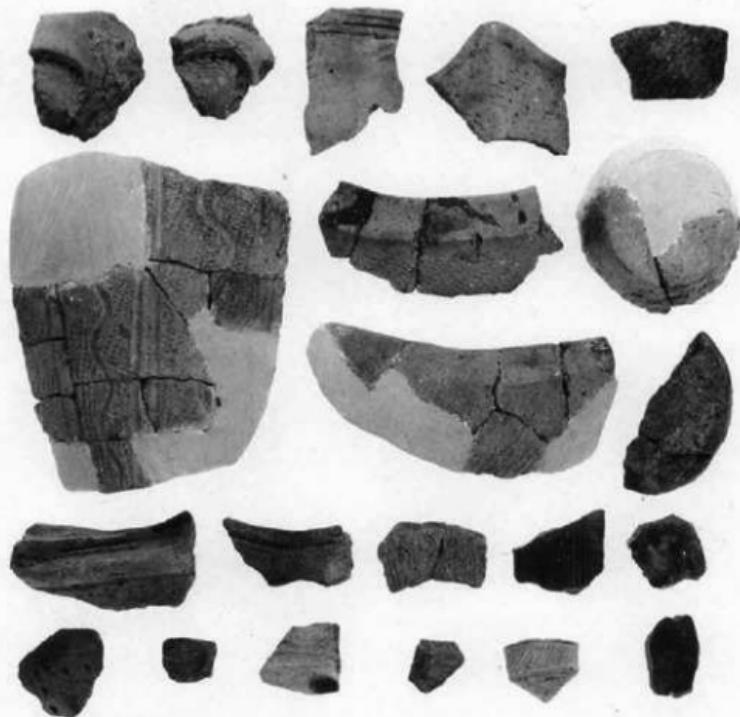
B 地点、第1・第2群土器底部

图版35 遗物



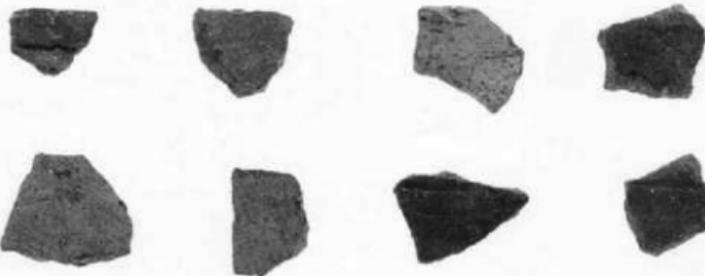
B地点、第3・第4群土器

図版36 遺物

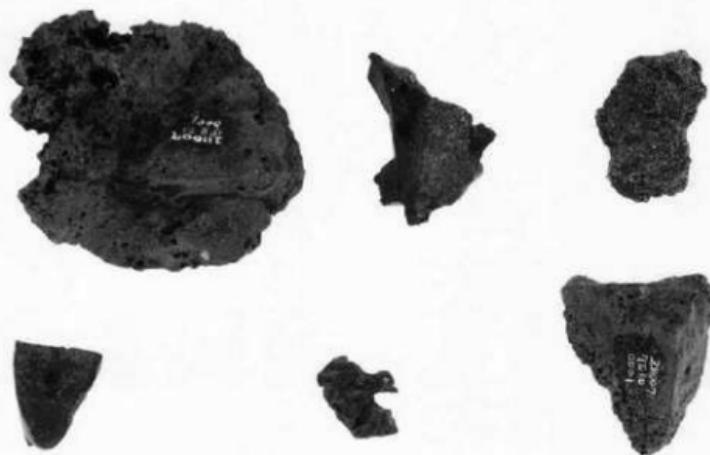


B地点、第4・5群土器

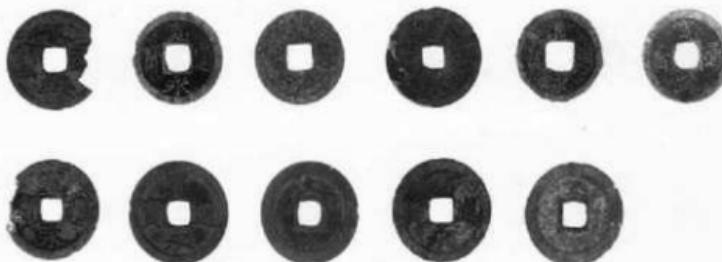
圖版37 遺物



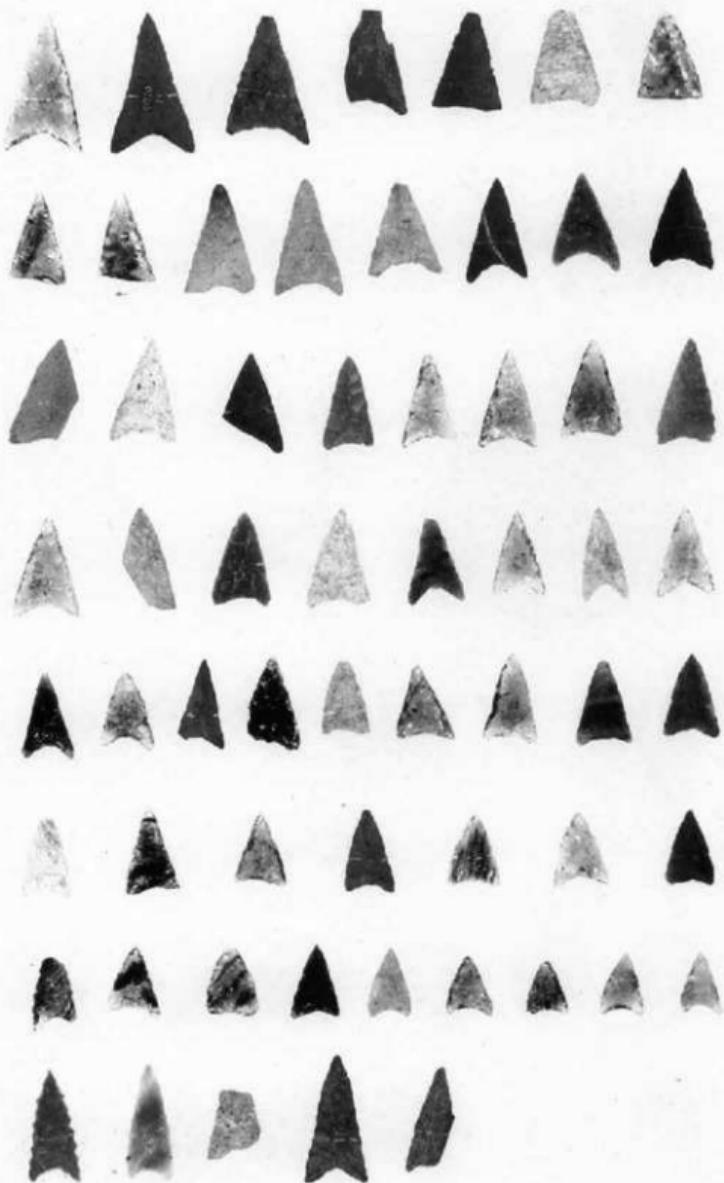
B 地点、第 5 群土器



鐵滓

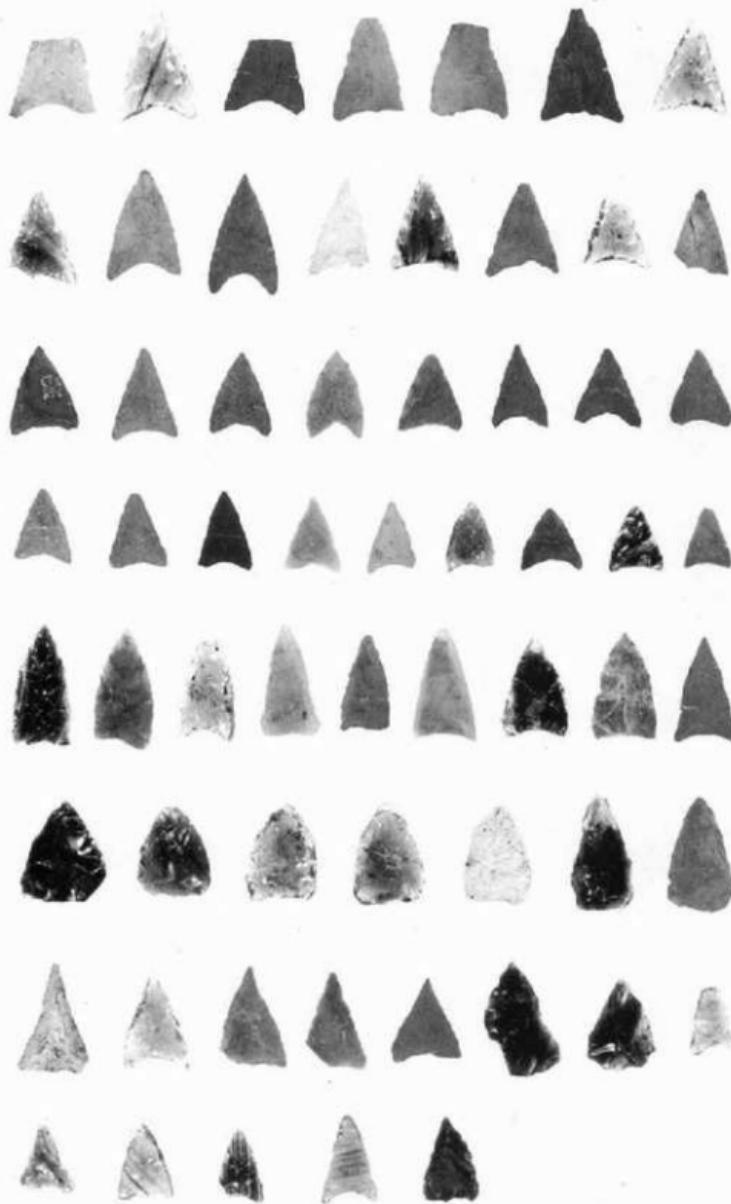


古錢



B地点、縄文時代石器(1)

図版39 遺物



B地点、縄文時代石器(2)



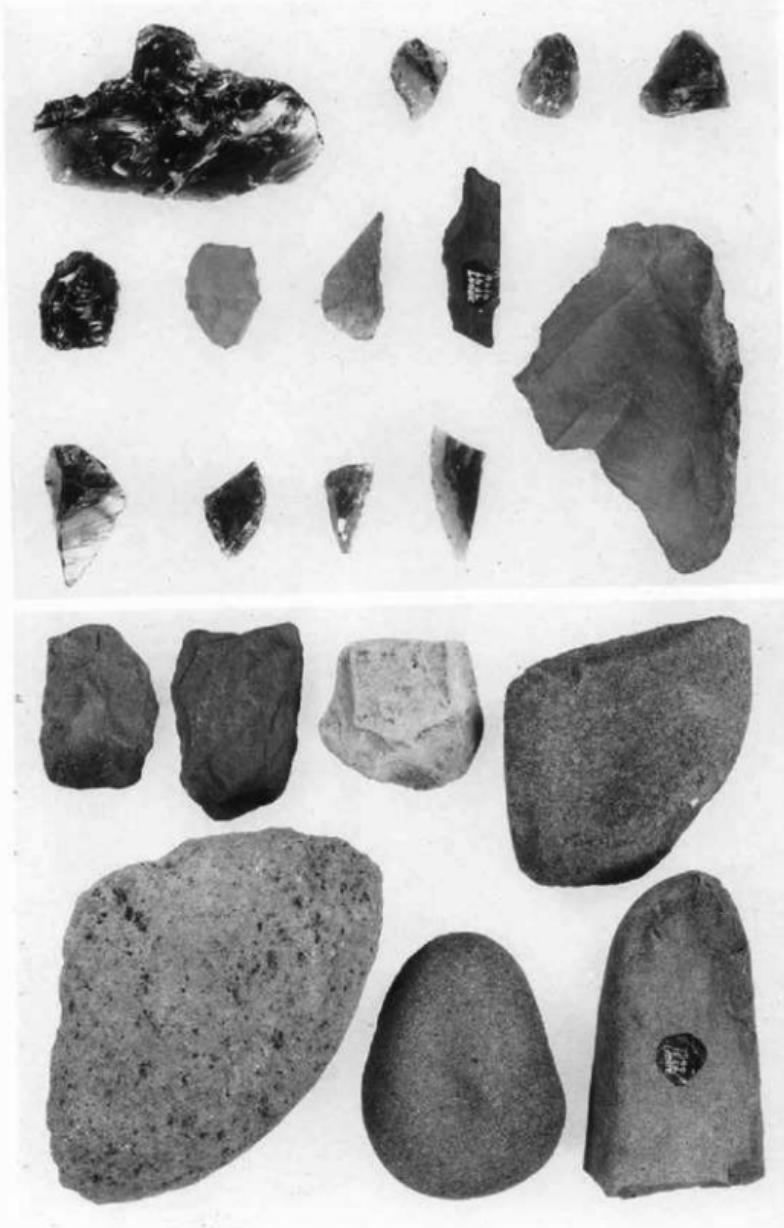
B地点、縄文時代石器(3)

図版41 遺物



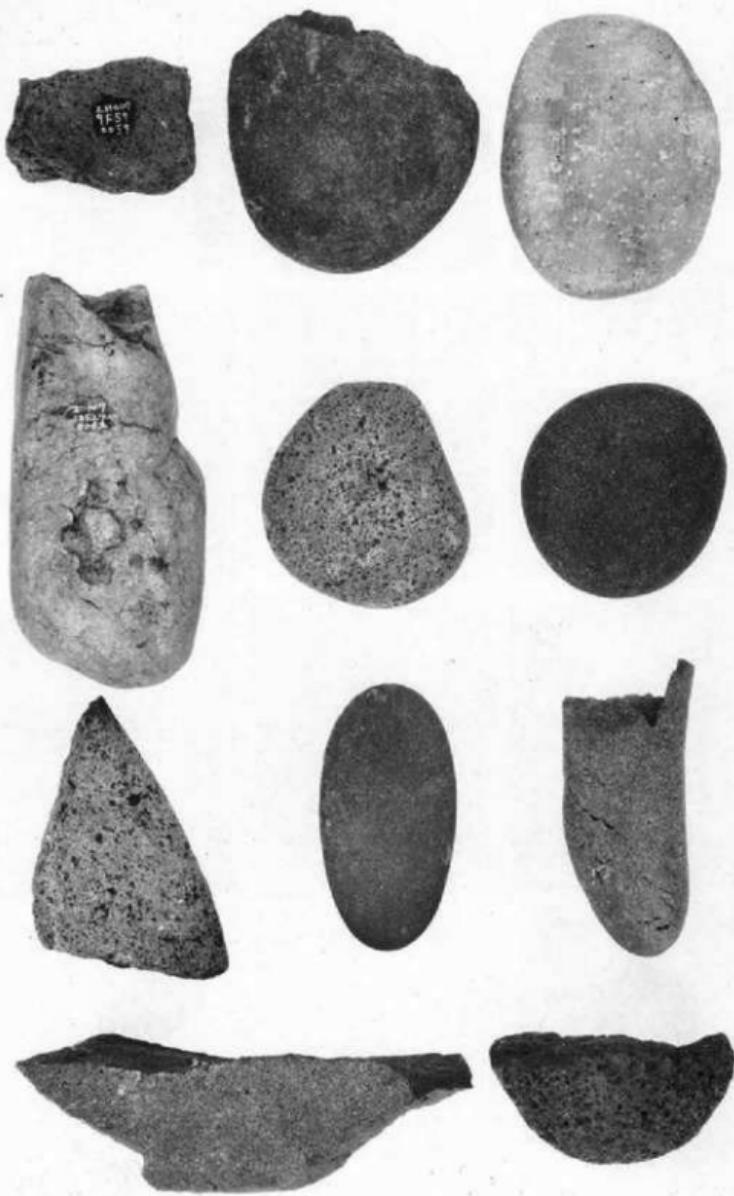
B地点、縄文時代石器(4)

図版42 遺物



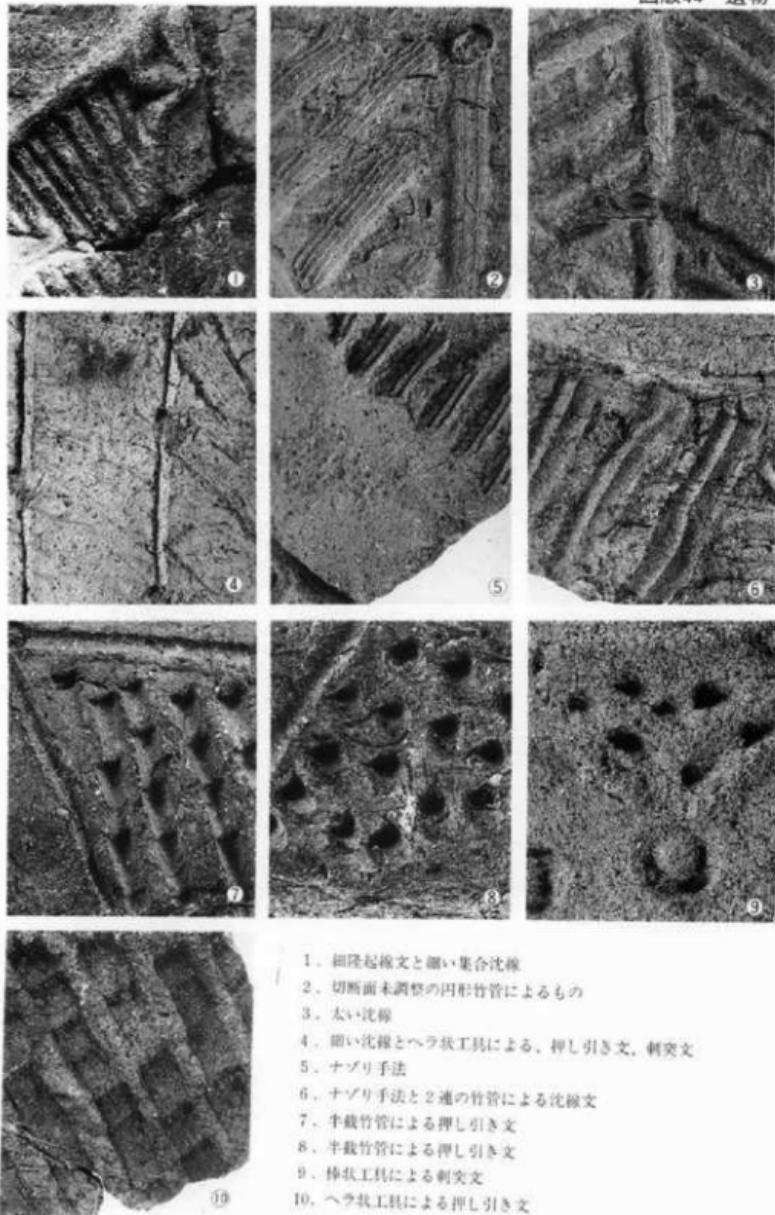
B地点、縄文時代石器(5)

図版43 遺物



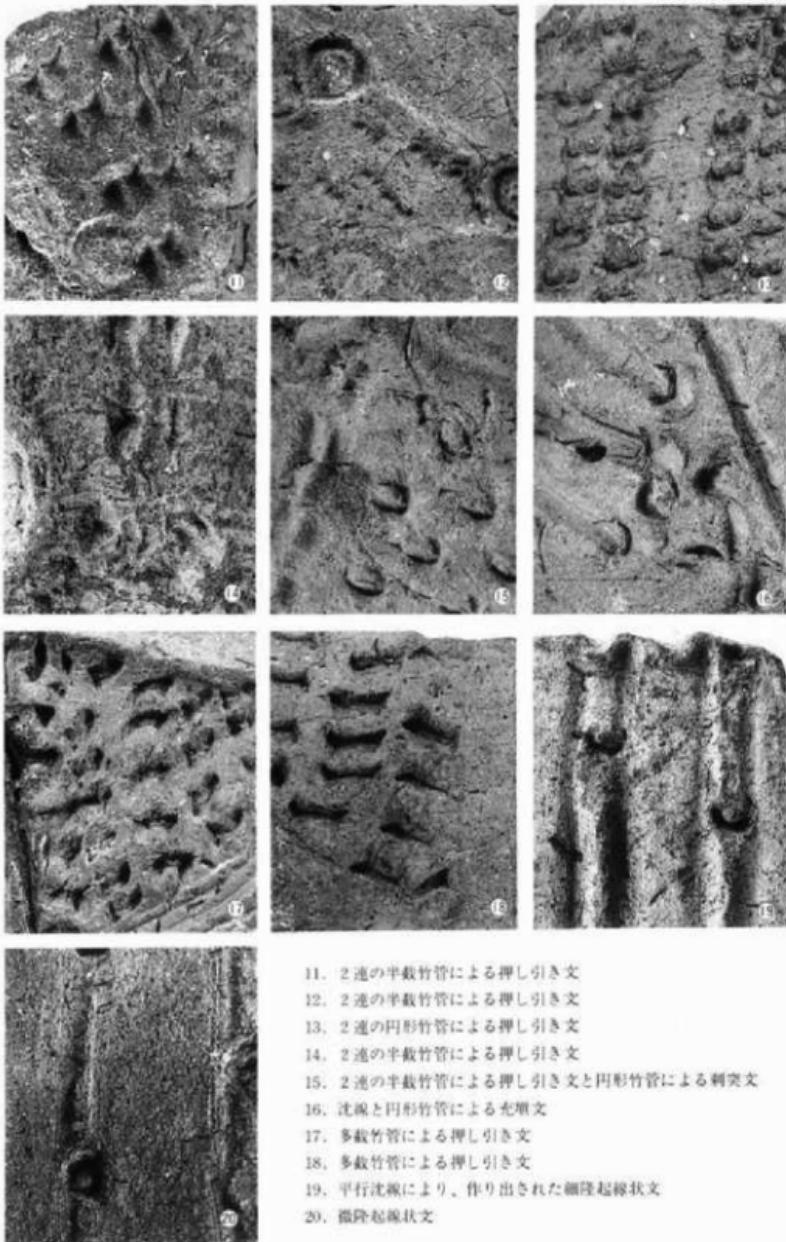
B地点、縄文時代石器(6)

図版44 遺物



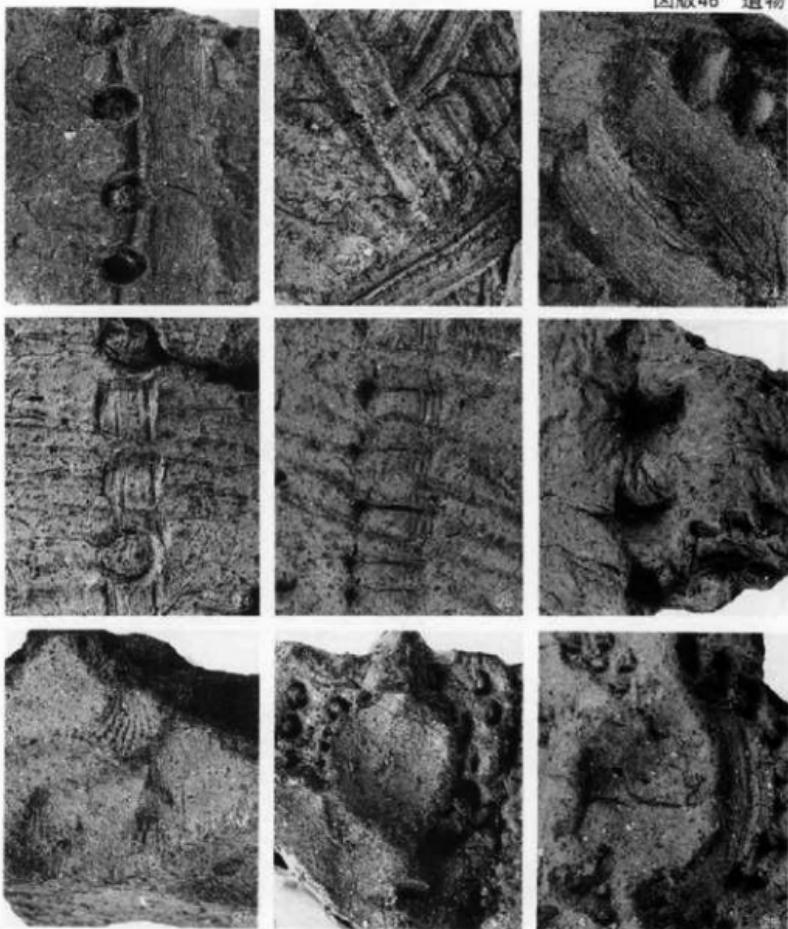
第2群土器文様拡大写真(1)

図版45 遺物

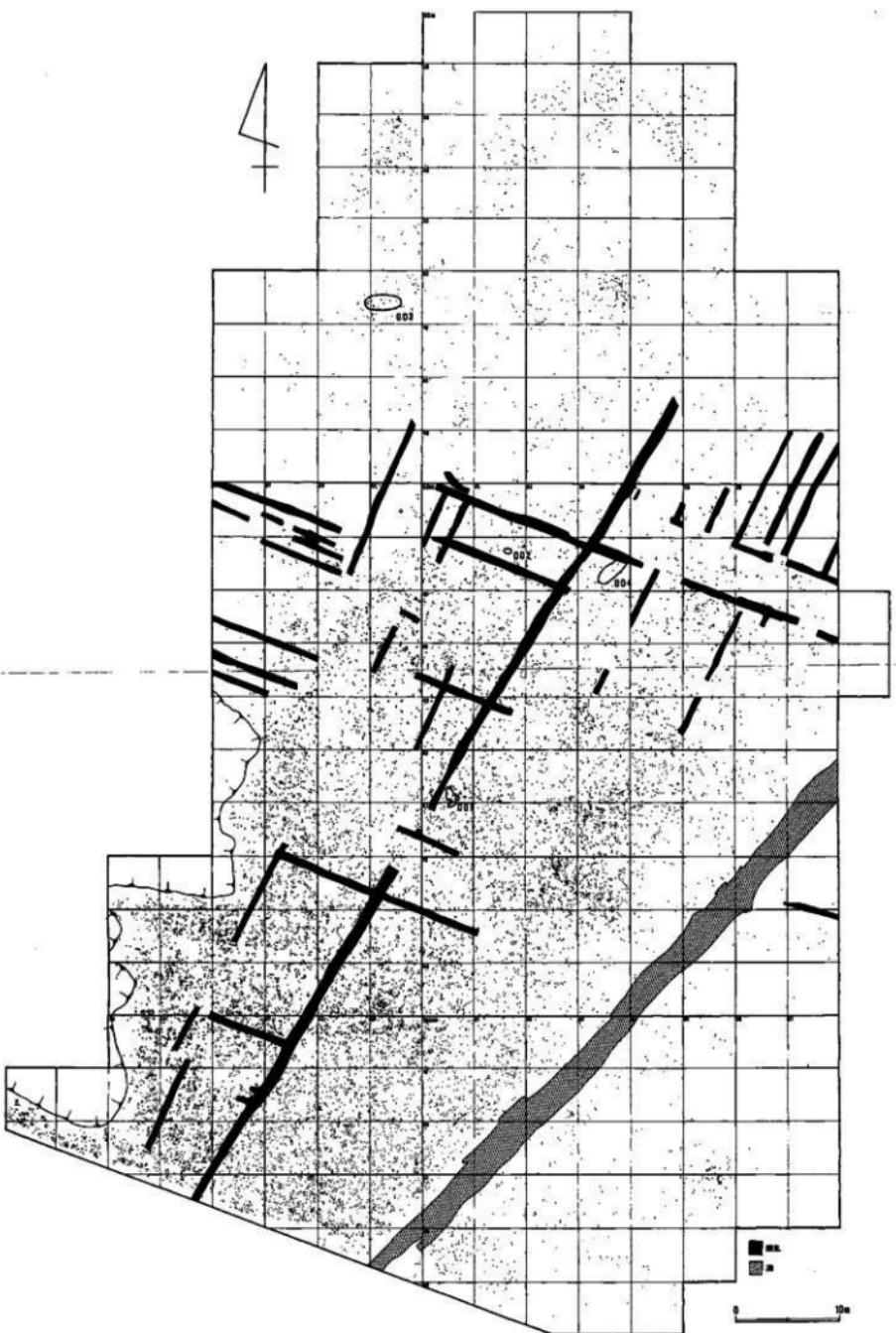


第2群土器文様拡大写真(2)

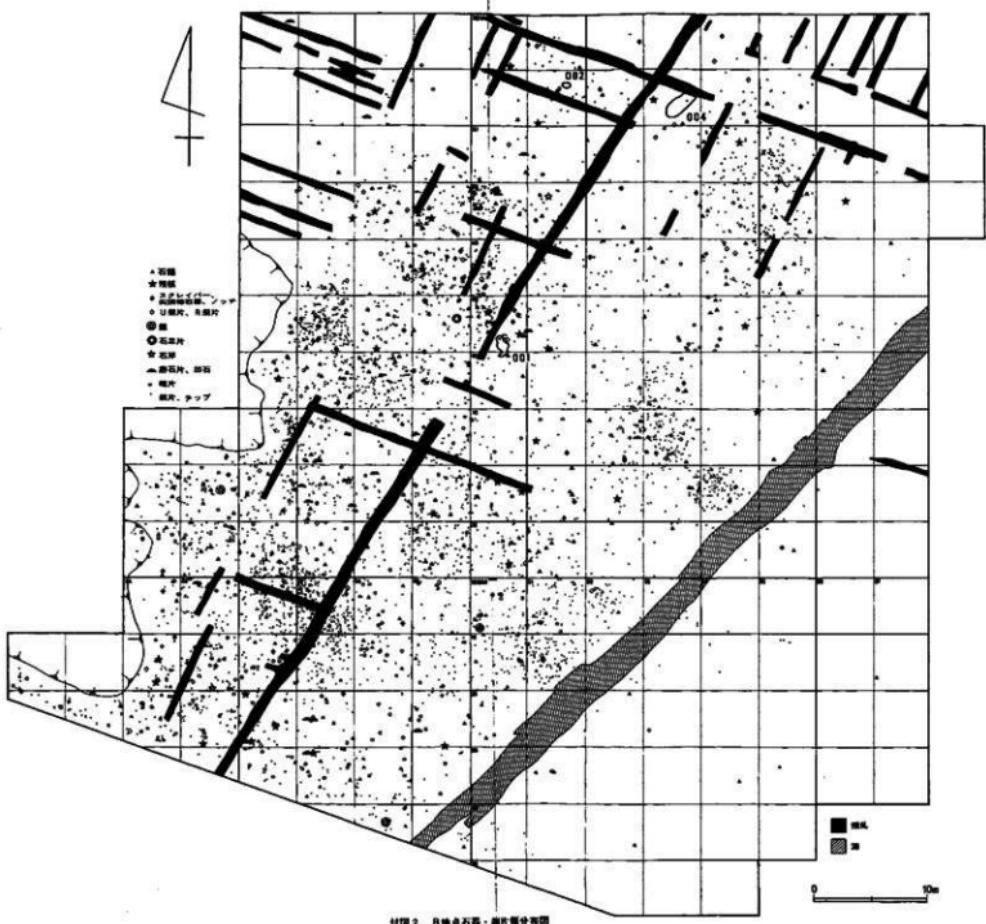
図版46 遺物



21. ヘラ状工具による太い沈線、細い沈線
22. 半截竹管による沈線文
23. ナゾリ手法
24. ヘラ状工具による押し引き文
25. ヘラ状工具による押し引き文
26. 半截竹管による刺突文
27. 目殻（アナグラ属）頭部による押捺文
28. 指頭状工具による圧痕文と2連式押し引き文
29. 降起線文と指頭状工具による圧痕文
30. 降起線文、細い沈線文と太い沈線文



附图1 B地点第2剖面土层分布图



付図2 D地点石器・破片分布図

昭和58年2月19日 印刷

昭和58年2月26日 発行

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III

— No.14 遺跡 —

発行 新 東 京 国 際 空 港 公 団

東京都中央区日本橋本町2丁目4番地

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県千葉市亥鼻1-3-13

印刷 株式会社 ヤ カ 東京工場

千葉県松戸市田中新田5-5